
どんぐりさんの恋

kiki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どんぐりさんの恋

【Nコード】

N1793R

【作者名】

kiki

【あらすじ】

ケーキ屋さんの娘である愛那^{まな}が店番をしていると、現れたのは隣のクラスの高橋君。彼は目つきが怖いので有名な強面の男の子だった。そんな彼がケーキを買っていく姿に、ちよつと親近感を持つ。ゆつくり恋に落ちていく、のほほんとした感じでお話は進んでいくと思います。

あらすじ変更しました。題名もちよつと変えました

隣のクラスの高橋君 1

それは、高校二年生のある日。

そろそろ初夏に差し掛かる5月も終わりの、ちょっとした出来事。いつもと同じ、でもちよつとだけ違ったりした、日常のひとコマだったんだ。

その日私は、店番だった。

あ、私のお家ってケーキ屋さんだけだね。
古い商店街に立ち並ぶ、小さなケーキ屋さん。
私が産まれる前から営業してるって言うんだから、結構レトロな店構え。

けど私は気に入ってるんだ。
肩肘張らない、落ち着いた雰囲気のお店は私が小さい頃から慣れ親しんできた場所。

お得意さんもたくさん居て、中には私のことを孫のように思ってくれてる人も居たりして、すごく居心地がいい。
で。

高校に入った今でもだいたい週に2度くらいの頻度で、店番に立ってる。

パートの斉藤さんが無理な日とかね。

んで、今日もたまたま、そんな日だったわけ。

「お、愛那ちゃんじゃないか」

「あ、田中のおじさん、お久しぶりですー！」

につこり営業スマイルも板についたもの、自分で言うのもなんだけど。

いつもの常連さん、確かうちのお父さんと同じ歳くらいのおじち

やん相手に惜しげもなく笑顔のサービス。

「そうかあ、もう高校二年生になるか。すっかりべっぴんさんになつて」

「やだなあ、褒めても何も出ないですよ」

「いやいや、やっぱ娘はいいなあ。かわいくて。」

うちの息子なんて結婚してからはすっかり家に寄り付かなくなっちゃまってなあ」

なんて世間話をしつつ、おじさんはウチの店昔からの定番の品ロールケーキを購入してくれる。

なんでも明日、話に出てた息子さんがお孫さんを連れて遊びに来るらしい。

あ、ちなみに今日は土曜日なんだけどね。

なんだかんだいいつつ嬉しそうに相好を崩して帰っていくおじさんに、

「ありがとうございます！」

と声をかけた、その時だった。

おじさんが自動ドアを開けて出て行き、それとすれ違うようにして階段を登ってくるその姿に、まず私はげつと眉をしかめてしまった。

紺のブレザーに、緑がかった灰色のスポンを着た大きな体つき。

それはとってもよく知ってる制服だった。

——うちの学校のじゃない。今日は土曜日なのにどうして！

よもや片道電車で40分かけて通学してるこんな遠く離れた場所、しかも地元の商店街で、同じ学校の人に会うとは予想もしていなかった私ははじめ、メンドクサイなあと思った。

でもよく考えたら今私は学校の制服を着ていない。

白のブラウスに黒のタイトスカート、そしてピンクのフリルのついたエプロン。つまり、店の制服を着ている。

一緒の学校なんてわからないんじゃない？と気を取り直したところで、相手は階段を登りきって自動ドアを開けて入ってきた。

「いらつしゃいませ」

につこり笑顔でお出迎え・・・のつもりが、相手の顔を認識したとたん、固まってしまった。

身長180cmくらい、肩幅は広くって、がっしりとした体つき。そんでもって。

体つきと同じく、しっかりとした顔立ちの上に思い切り存在感を放つその目つき。

え？あなた、私と同じ高校生ですよ？ってくらい鋭いその目の持ち主。

私は、その相手のことを知っていた。

た、高橋君だ・・・！

隣のクラスの男の子。顔立ちは決して悪いほうではないのだけれども、まず目を引くのがその目つきの悪さ。加えて、とっつき悪そうな態度に、なんだか怖い人、という印象が強く、女子の中では敬遠されがちの存在だ。

クラスは違うけれども、存在感が抜群にあるため、顔と名前だけは私も知っていた。

その彼が今、うちの店に来ている。

え、な、なんで？！ものっそい似合わないんだけど、この風景！

うちのお店はさっきも言ったとおり古いお店だけれども、それで

も決して古臭いイメージがあるわけじゃなくって、いい意味でレトロな、昔のケーキ屋さんの内装をしてる。

年月が経っていい感じの色合いになってる自然木の、柱。それと同じ材木を使ったクッキーやマドレーヌなどが置いてあるテーブルや棚。

ナチュラル感を意識した空間になってる。

小さなお店だから、入ってすぐそのお菓子が並ぶ陳列棚があるんだけど、その中に佇んだ彼はすごく浮いて見えた。

なんというか、大きく違和感。

色とりどりのお菓子たちの中、大きな身体が窮屈そうに周りを見渡してる。

それから高橋君は、自動ドアの前で店の中を一通り見渡した後そのままケーキが並ぶショーケースまで大きな歩幅で歩いてきた。

同時に威圧感も迫ってくる錯覚を起こし、私は思わずカウンターの中で後ずさりしそうになるのをなんとか堪える。

どんっという効果音が付きそうな存在感がショーケースを挟んで目の前に立った。

いけない、笑顔笑顔！

「ご注文は？」

とっさに笑顔を顔に貼り付けた自分を褒めてやりたい。

ま、頬が引きつっちゃってるのは見逃してちょうだいな。

「・・・ロールケーキにシュークリーム、アップルパイをひとつづつ」

えっと、ものっすごい眉にしわが寄ってますけど。

唯でさえ悪そうな人相しているのに極悪非道な顔になってますけど。

注文すんのにそんな気合いいれなくたっていいじゃん！怖いんだっ

てば！

とか心の中では色々叫びつつ、手際よく商品をトレイに取り、箱に詰めていく作業にはいる私。

良かった。私のこと、知らないみたい。

同じ学校に通ってるとは気づかれてないみたいだ。

ほっとしつつちらりと後ろを覗き見ると、高橋君はショーケースの前で腕を組み、仁王立ちして中を覗き込んでいるところだった。

恐ろしく真剣な目つきでショーケースの中を・・・吟味してる？

・・・ケーキ、好きなのかな？

なんだかそう思うとさっきまでの怖さが薄らいでくるから不思議だ。

そりやなんとって私はケーキ屋の娘ですから。

「お待たせ致しました！」

さっきよりも自然な笑顔が浮かんで、ケーキの入った箱を彼に手渡した。

「・・・どーも」

返事なんか期待してなかったんだけど、眉間に皺を寄せたまま視線を逸らしてそんな声が返ってきた。

お、結構いい声してる。低音が耳に残る。

そして、指定の黒の学生鞆を肩に掛けて、それとは別の左手がケーキの箱の握り手の部分をしっかりと握りしめ、私からケーキの箱を受け取った。体つきと同じ、がっしりとした、大きな手のひらだった。

それから彼は無言で後ろを振り向き、自動ドアの方へ歩いていく。私はその後姿を見送った。

姿勢、いいな。ぴんと伸びた背筋が、凜としたイメージを感じさせる。

それにしても。

ケーキの箱が似合わない・・・！

大きな体つき、いかにも強面の彼がちょこんと持つ左手のケーキの箱が、そこはかとなない違和感を醸し出してる。

でもなんか、そのアンバランスさがちょっとかわいいと言えなくも、無い。

なんだか微笑ましく感じながら、

「ありがとうございます！」

元気よく、彼を送り出した。

そして高橋君の姿が自動ドアの向こうに消えた後、私はくすくす笑いが頬に浮かぶのを止められなかった。

あれ、一人で食べるのかな？

あ、でも家族に買って帰っただけ、っていう線もあるか。

え、でもあんな怖い顔をして実家族思いかいいうオチ？

とか、本人が知ったらきつと怒るであろう、結構失礼なことを考えながら。

それが、私と彼の初めての接触、というやつだった。

隣のクラスの高橋君 2

ううーん、ないなあ。

それから週が明けた月曜日。

授業の終わった放課後、私は整然と本の立ち並ぶ棚を回りながら、目当ての辞典がある場所を探していた。

「愛那ー、あつたあ？」

同じクラスの親友、工藤 凜が向こう側からやってくる。

すつと伸びた手足、清楚な雰囲気彼女のその細腕には似合わない分厚い本が抱えられてる。

おっと、凜のほうは見つかったみたいね。

世界史の授業で出た宿題で、教科書だけでは太刀打ちできないプリントの内容に、私たちは手分けしてそれを埋めることにしたんだけど、普段図書室なんて来ないものだからその資料を探すのにも一苦労だった。

「ごめん、まだ見つからない。先、戻つていてくれる？もうちょい探すわ」

「手伝おうか？」

「んーん、だいじょうぶー。」

ありがたい申し出を断わり、こちらを気にしつつも席に戻っていく凜に軽く手を振って。

ふうとため息をひとつ。

やれやれ、棚ごとに分類されてるはずなんだけどな。なんで見つからないんだろ。

不思議なんだけど、図書室ですぐに目当ての物を見つけられた試しがないんだよね。

いっつも右往左往してさまよってしまうんだ。

さてさて、どこかなー、辞典辞典っとな。

あ。ていうか、世界史で探してるんだから、そっちの分類で探したらあるのかな？

じいっと棚を見上げていた私はそう思い当たり、別の所を探すため棚を移動することにした。

いったん探してた棚を出て、緑色の分類名に従ってその方向に向かったとき。

あ。

図書室の一番奥の棚、本棚のすぐ傍に立つその大きな姿を見つけて私はちよつとだけ足を止めた。

思いがけず丁寧な手つきで、手に持った本を棚に戻している、明らかに何かスポーツをしていると分かるがっしりとした体育会系の体つき。

相も変わらず目つきが悪い。というかまた眉間に皺が寄ってるよ。

・

最近ケーキ屋に訪れたその人は、一瞬だけこちらに視線を走らせてきたけど、私があのかのケーキ屋の店員だとは気づかなかったみたいで、すぐさま視線は逸らされた。

そのことにほっとしつつ、ただ立っているだけで存在感のあるその姿にまたまた違和感を感じてしまった私だ。

いや、余計なお世話なんだけど、こう、図書館とか本とかのイメージもないよね、高橋くん。

あの大きな手でちまちまとページを捲る姿を想像するとなんだか微笑ましい。

なんだか頬が緩むのを感じつつ、私は目当ての本を探すために奥

の棚へと歩き出した。

高橋くんの後ろを通る時、ほんの少し興味を引かれて彼の手にある本をチェックしようとしたけど、その大きな体が邪魔をして見えなかった。

ざんねんぐと肩をすくめつつ、さてさてそんなことより辞典探さなくっちゃ。凜も待ってるんだし。

と棚を見上げて探すことしばし。

——あつた！

ようやくそれらしい名前の辞典が見つかって思わず心の中でガッツポーズ。

でも。

う・・・ん。

見つかったことにほっとしたんだけど、その辞典があるその場所に、私はちよつと眉を寄せてしまった。

だって。

辞典の位置が、ものすごく微妙な位置にあつたのよ。

爪先立ちになって指先が届く、そんな位置。

どうしょ。でも、はしご持つてくるの面倒くさいなあ。

ものぐさな私の悩みは一瞬で終わった。

うんしょつと爪先立ちになり、目当ての辞典に手を伸ばす。指先が、分厚い辞典の数センチに引つかかった。親指と人差し指を使って引つ張り出そうとして・・・ううん、結構重いな。

なかなか、出てこない。

——うん、わかつてる。ここで、止めとけばよかったってことは。

ちゃんとはしご持つてきたら良かったってことは。いつも、兄ちゃんにもよく怒られる、お前はものぐさだって、もっとよく考えて動けって。

けどそんなこと思つても後の祭り。

元来短気な私は、なかなか引つ張り出せない辞書に業を煮やして、荒業にでてしまったんだ。

ほら、よくやるでしょ？ぎゅうぎゅうに詰まつてる本とか取るとき、人差し指で取りたい本のてっぺんをくいっと引つ張り出すやつ。それを、私は無謀にも下からやろうとしたわけ。爪先だつてる状態でね。

——さっき引つ張つたからほんの少し他の本よりも棚から飛び出てる、その辞典を人差し指でくいっと、下から引つ張り出す。一応背が届くし、ちゃんと本は受け取められる、そう思つて。けど。ひとつ誤算があつたのよ。

辞典が思つたより重かつた・・・！

一度ではなかなか出てこなかつたから、二回目、三回目と何度か続けると、40センチくらいのおおきさの、太さは5センチくらいある辞典がぐらりと重力に従つて傾いてくるのが見えた。

よっしゃ、取れる！と爪先立ちのまま両手をばんざいの格好で落ちてくるのを待ち構えていたんだけれども、ずしり。

思つたより両手のひらに重力がかかつた。

え。え。え・・・！

体を持つてかれそうになるのを必死に踏ん張り、手のひらの上の本が危うい均衡を保つた。

ととと・・・っ。

ちよつとでも体がよたつくと、辞典もぐらぐらと動いてそのまま体ごとひっくり返りそうなので足に力をこめる。

え、うそ。動けない？？

顔が青ざめるのがわかつた。

動く頭上の辞典が降ってくる・・・！

この重さからして落ちて当たったら相当痛い・・・！

けど支えてる腕もぶるぶる震えて、限界が近いことを知る。

もう駄目だ・・・！

腕の震動でぐらりとまた本がバランスを崩し、辞典の重みに体も持つて行かれるのがわかり、覚悟してぎゅ、と目を閉じた時だった。

とん、と背中に温かい手のひらの感触と、

「——危ない」

耳に残る静かな声がすぐ頭上から。

それは一瞬のことだった。

背中に感じたぬくもりと、あたかな吐息が私の前髪をくすぐつて。

大きな手のひらがよろけた私の背中を軽くささえ、す、と現れた太い腕が私の耳の横を通って辞典を掴んで、バランスを崩した私を助けてくれた。

——どきんっ。

手のひら越しとはいえ、背後から突然大きなものに身体を一瞬覆われて、心臓が大きな音を立てる。

すぐさま頭上の辞典ごとその大きな身体は離れていったんだけれども。

「た、たかはしくん」

振り仰ぐと、私を助けてくれた高橋君が、眉間に皺が寄った顔で私を見下ろしていた。

「・・・無理をする」

呆れたような声音にうわあと私は肩をすくめる。
恥ずかしいとこ見られてしまった。

「ご、ごめんね、ありがとう」

「別にいい。ただ、無理をするな。怪我をするぞ」

まるで小さい子に言いきかせるような口調でそう私に告げると、右腕に抱えた本のうち辞典を私に差し出してくれたので、私は両腕でそれを受け取った。

その時、ちらりと高橋くんが脇に抱えたもう一冊の本も目に入っ
て、軽く目を見張る。

けど、すぐに両腕にかかる辞典の重さに気を取られてしまった。

う、無茶をしたものだ、私。

と、そこで無言で去っていく大きな後姿に気づき、慌てて私はそ
の背中に向かって叫ぶ。

「ありがとう！」

返事は、ちらりとだけ向けられた無愛想な顔だった。

「———どうしたの？」

席に戻ると機嫌のいい私に気づいたのか、凜が訊いてくるのに「
なんでもない」と返しながら。

私はにやにやと顔が緩むのを止められなかった。

うふふ、だって。

ちらつと目に入った、高橋くんの抱えてた本のタイトル。

それは、かの有名なファンタジー小説。

ベリー・ボッターだった。

似合わないすぎるよ、高橋くん！

高橋君と猫 1（前書き）

こちら改稿後のお話ですが、前回投稿した『高橋君と猫』の『2』のエピソードと同じ内容となっております。読んだ方は飛ばしてもらっても大丈夫です。

ややこしくてすみません！

高橋君と猫 1

それから何事もなく日々は過ぎていつて。

私はクラブには入ってないから学校が終わったら凜とお茶したり、店番したりとそこそこ忙しく毎日を過ごしていた。

そしてそれは、すっかり高橋君のことも脳裏のあなたへと飛ばしてしまった、ある5月の月曜日のことだった。

あ、たんぽぽ。

黄色の馴染み深い花を草むらの中に見つけて、思わず私は頬を緩めた。

授業も終わった放課後の、掃除時間。

ゴミ捨ての帰り道、私はあまり人気のない、校舎裏を通るルートで教室に戻ろうとしていた。

だってなんだか散歩日和のお天気だし。

空から降り注ぐぽかぽか日差しが気持ちいい。

うーん、と伸びをひとつ、気持ちのいい木漏れ日がいい感じに眠りを誘う。

校舎裏は、思ったより快適な場所だった。

ぐるりと学校を取り囲む高いコンクリート部分は茂みになって、その姿はほとんど隠れてしまっていたんだけど、基本、人が通る部分はそんなに草は茂ってないし。

もっと殺伐としてるかと思ってたけど、黄色いタンポポやら綿帽子が咲いてて、ちょうちょなんかも飛んでたりなんかして、意外と心が和む。

そろそろ夏に向かうこの季節、新緑の香りは私に爽やかさを届けてくれた。

あれ？

しばし進んだその人気のない場所で、またまた見覚えのある大きな背中がしゃがみ込んでいるのが目に入った。

高橋君だ。なんだか最近、よく会うなあ。

それにしても、何やってるんだろ、あんな所でしゃがみこんで。

目を凝らすと、高橋君から少し離れたところに何か小さな生き物がいるのがわかった。

まだ小さい、にゃんこさんだった。黒ネコさん。

どつかから迷いこんだのかな？かわいい。

思わず相好を崩す私の目の前で高橋君が、ちゅちゅちゅちゅ、とにゃんこさんを舌を鳴らして手で招きだした。その指先に、食べ物差し出して。

その姿に目が点になる私。

ええっと。

たかはしくん。

——ちよっと、怖いです。

眉間には皺が寄っているし。

大きな体は、しゃがみ込んでても威圧感がある。子猫さんが怯えるのには充分な要素だよ。

唯でさえ警戒心いっぱいな様子の黒猫さん、近づくのは無理なんじゃ……

と思つてちらりともう一度高橋君の様子を伺った私なだけど。

すごい真剣な様子が伝わってきて、思わずごくり、と唾を飲み込んで見守ってしまった。

うわ、なんか見ているこっちも緊張するよ・・・！

しばらくの膠着状態が続いて。

じりじりとしながらも、黒ネコさんは警戒しながらも鼻をくんと鳴らし、徐々に、徐々に、近寄っていく。

だけど。

四肢を落とし、いつでも逃げれる体勢を取っていた黒ネコさんほでも、あともう少しで手が届く、というところでぴたりと歩みを止めてしまった。

高橋君とその手元にある食べ物は何度もその目が往復して、迷いを示す。

けど、物欲しげな顔をしながらもそれ以上は近寄ろうとはしない黒ネコさんの様子に、私は思わずぐっと拳を握ってしまった。

だ、大丈夫だよ、黒ネコさん。その人、そんな怖い顔してるけど、結構いい人だよ。

お願いだから傍に寄ってあげて・・・！

必死に黒ネコさんに向かって念を送ったけど届かなかったみたいだ。

しばらくして黒ネコさんはそろりそろりと腰を落として後退していつてしまう。

あああゝ・・・。

「・・・待て」

小さいけれど、芯の通った声がした。高橋君だ。

高橋君は、ポケットからハンカチを取り出すとむき出しの地面の上に敷き、そこに食べ物置いた。

見た感じ、パンっぽい。

そして、黒ネコさんを怖がらせないためか、しゃがみこんだまま

自分自身が後ろに移動していった。

その手が完全に届かない距離まで下がると、様子を伺っていた黒ネコさんは、ピクリと髭を動かして。

目は高橋君を捉えたまま、またそろりそろりと用心深く食べ物のところまで近寄ってゆく。

そして、ふんふんとまず匂いを嗅いで確かめ、それが食べれるものだと判断するとすごい勢いでがつつき始めた。

よ、良かった・・・！

私はその黒ネコさんの様子にほっと胸をなでおろし、口元を緩めて、何気なく高橋くんの方に視線を向け・・・その表情が目に入って、目を丸くした。

高橋君は、いつもは険しいその瞳に優しい色を浮かべて、黒ネコさんを見下ろしていた。

その口元も、微かに弧を描いている。

——へえ、あんな顔、するんだ。

私は意外な気持ちになって、高橋君を見つめた。

なんだかその緩やかな雰囲気を目を離せなかった。

じいつと見つめていると、視線を感じたのか高橋君がこちらを向いてしまった。

ばかり、と瞳がかち合ってびっくりしたんだけど、そのほのぼのした空気につられて、思わずにつこり、と笑顔を浮かべる。

「こんにちは」

そう声を掛けると、黒ネコさんが驚いて、びくん！と一瞬大きく毛を逆立ってて飛び上がった。

そのまま、脇目もふらず逃げて行ってしまっ。

「あっくー！！」

私は思わず失望の声を上げた。

ちらりと高橋君の様子を伺うと、相変わらず眉間に皺を寄せた顔で、黒ネコさんが去っていったほうに視線を向けていた。

「ご、ごめんね！高橋君」

私は慌てて高橋君に謝った。

高橋君は視線を私に向け、軽く首を振った。

「いや。もう食べ終わっていたし、問題ないだろう」

・・・それより」

高橋君が、ちよつと考えこむように私を見た。

何かを思い出そうとする表情に、慌てて私は名乗る。

「2-Aの井上です！」

この前、図書館でも助けてもらった」

「ああ」

納得したように頷いてから、その瞳がちらりと私の持つゴミ箱に落ちてくる。

「ゴミ捨てか」

「え、うん。掃除当番で・・・高橋君はどうしてこんなところに？」

「俺もゴミ捨てだ。」

「ふ、ふうん??」

頷いたものの私は首を傾げてしまった。だって、そういう高橋君の傍にはゴミ箱なんてなかったから。

でも、その疑問をぶつける前に、さつと高橋君は身を翻してしまった。

え、あれ、行っちゃう。

慌てて私はそのごつつい背を追っかけた。

「え、でもゴミ箱は？ないみたいだけど。どっか忘れた？」

やや斜め前を歩く、凜とした姿勢の後頭部に向かつて尋ねる。

その身の丈に合って高橋君の歩幅は大きく、私は小走りになってしまった。

「・・・違う」

ちらり、と顔は向けずに視線だけが降ってくる。

うう、迷惑だったかな。

そのつつけんだんな対応に思わず怯みそうになったんだけど。

私の高橋君へと向けていた視線が、スポーツマンらしく短めにカ
ットされた後頭部の襟足部分から、精悍な横顔へと自然な流れで変
わっていったのがわかって、ちょっと目をぱちくりさせてしまった。
うん、ごめんなさい、わかりにくかったよね。

つまり、急に高橋君の歩調が緩やかになったんだ。

えと、高橋君でさ、実は。

さっきの黒ネコさんにごはんをあげてたことといい、実はいい人
なんじゃない？

この前助けてくれたことといい、紳士だよね。

だって明らかに、私が隣に並んだからペースが落ちたんだもの。

思わずこみ上げてくるにまにま笑いを隠すため口元に手をやり、
ちら、と私は高橋君を見上げた。

うん、相変わらず眉間に皺を寄せて不審そうな視線を私に向けて
いるけど、ちゃんと、私が話すのを待っていてくれるし。

そのことに気づいて調子に乗った私は、にっこりと高橋君に向か
って笑顔を向けた。

「どうしてあそこに居たの？」

「・・・ゴミ当番だったから」

「でもゴミ箱持ってないよね？」

——それに、鞆も持ってきてるし」

返答は、難しい表情と沈黙だった。

でもそれは、怒ってるという感じではなくて。

どう答えようか思案している、そんな雰囲気を感じられたので、
気まずさを覚えることなく、私は高橋君の返答を待った。

ゆっくりとした歩調で、揃って二人、校舎裏が出る。

焼却炉は裏門の近くにあったから、反対方向へと歩いてきた私たちはそのまま 靴箱のある玄関の方まで戻ってくる。

放課後のこの時間、クラブに行く人や家に帰る人で、制服姿の生徒達で玄関はごったがえしていた。

高橋君は、その喧騒から少し離れたところでぴたりと立ち止まった。

にぎやかな声が入ってくる。

「・・・・・・・・猫が、居たから」

「え？」

ああ、高橋君は部活だろうし、私はクラスに戻らなくっちゃいけないし、ここでお別れかなあと考えていた私はぼつり、と溢れた低い声を拾って慌てて高橋君を見上げた。

微妙に私から視線を逸らしたところに視線を向けて、高橋君は話しだす。

「ゴミは先に捨てに行つたからゴミ箱はここにはない。ただそれだけだ」

早いわけでもない、ゆっくりなわけでもない、淡々とした口調で告げられた内容に、私はまたまた目を丸くした。

「――部活に行く」

じゃあな、と言って高橋君は入り口の所でぐるりと身を翻した。

「あ、バイバイ！」

慌てて声を掛けた私に返る、眼差しと小さな頷き。

その後姿を見つめながら、私はさっきの会話を脳内で反芻していた。

えっと、つまりあれかな。

高橋君はゴミを捨てに行つたと。

で、帰りに黒ネコさんを見つけて・・・多分、手元に何もなかったから、一度鞆を取りに返って。

わざわざ、ご飯を挙げにここに戻ってきたと、そういうこと？
くすり、と口元にまた笑みが蘇るのがわかった。

いやもうなんか。

ちよつと、ツボに入るよ高橋君・・・！

しかもさっき、微妙に視線を逸らしてたのって照れてたから？

ちゃんと理由話すの恥ずかしいから、別の答え考えてたけど結局思いつかなくて、そのまま話したんじゃない？私が突っ込んだから。

堪えきれず肩を震わせて笑う私を、他の生徒たちが不審げに見てくるのがわかったので慌ててコホンと咳払い。

そして、ゴミ箱を抱えなおして、靴を履き替えるため靴箱に向かった。

なんとも言えない、ほんわかした気持ちで胸がいっぱいだった。

高橋君と猫 1（後書き）

続きます。次のエピソードは前回『高橋君と猫』の『1』だった部分です。

高橋君と猫 2（前書き）

改稿後のお話です。前回の『高橋君と猫』の『1』と内容は同じですが、最後の部分だけが次へと続くためにエピソードを付け加えます。読まなくてもお話は通じると思います。

ややこしいこととしてごめんなさい。今日中に続きます。

小さな頃から、お菓子の焼ける匂いが好きだった。

お店ではいつも嗅ぎなれてる匂いんだけど、お家にて嗅ぐお菓子
の匂いはまた特別で。

お店の厨房には、私が大きくなるまで入らせてもらえなかったから、どうしても未だにそこは神聖な場所って感覚が抜けない。

だからかな。店でなくて、お家で焼くお菓子は、自分の為に作ってくれるんだ！って、わくわくしたのを覚えてる。

小さいときは、魔法を見てみたいだった。

卵に砂糖、小麦粉。大きな泡たてき。

リズミカルな、ボウルの中身をかき混ぜる音。

どきどきして、テーブルにかじりついてお父さんの大きな手の中にあるボウルを覗き込んでたなあ。

背が届かないから一生懸命背伸びして、ね。

いつもは許してもらえない行為も、お家では許してもらえたから。それだけでもう、私の中では特別なことで、小さな胸を期待で膨らませるのに十分な出来事だったんだ。

とりりとした黄色いクリームが、ボウルからケーキの型に収まっていくのを見るのがすきだった。

だって、甘くていいにおいのするこのところが、オーブンの中に入って、ふんわりとした美味しいケーキになるのが不思議でしうがなかったから。

焼きあがるときの、あのあまい匂い。

もう、それだけで頬が緩みっぱなしになる。

それからほら、焼きあがってからのあの、待つ時間！

手を伸ばせばすぐそこにあるのに、生地が冷めるまでお預け。

ああ、よく我慢できずに「味見」とか言って一口ちぎって食べちゃって怒られたつけ。そこだけ生地が凹んでしまって、すぐにバレてしまっただよね。

なのに懲りずに、しょっちゅう味見したなあ。

昔はそれが、父さんだった。でも最近ではそれは、兄ちゃんに代わって、我が家では受け継がれてる。たまに私も参加したりね。

とまあ前置きが長かったけれど、要するに、お家に帰った私を待っていたのはそんな幸せな、お菓子の焼けるいい匂いだったんだ。がちやりと玄関の扉を開けると、ふんわり鼻先へと届く、イチゴの焼ける甘酸っぱい匂い。

私は思わずにんまりと頬を緩めながら、靴を脱いで、そのままキッチンへと直行した。

「兄ちゃん！」

「お。愛那、おかえり。いいタイミングだな」

迎えたのは、シャツを腕まくりしてキッチンに立ってる兄ちゃんだった。

柔和な顔立ちのうちの兄ちゃんは、へにやりとその垂れ目を細めて、笑う。

そうすると、唯でさえ甘めの顔立ちが、さらに優しい顔になる。妹の私が言うのもなんだけれども、結構男前な方だと思うんだ。けど、傍から見ると私と兄ちゃんは似ているらしい。

垂れ勝ちの瞳とか、ちよっと色素の薄い髪とか。

でも、私はそうは思わない。兄ちゃんのほうが顔立ち整ってると、そう思ってるんだけど、うん、突っ込まなくていいよ。

ブラコン気味なのは百も承知だから。

4つ年上の兄ちゃんは、年が離れているせいか結構私のことをかわいがってくれている、と思う。

小さなころからお店で忙しい両親に代わって、私の面倒をよく見てくれて、たくさん遊んでくれた。

基本私には甘い人なんだけれど、怒ると怖い。我が家では私の叱り役はほとんど兄ちゃんだった。

なので、ある意味私にとって両親より怖い存在だ。

だから、怒られても私が逆らうことはほとんどないので、喧嘩することは少ない。

名前は井上 夕哉ゆづやといって、21歳。ただ今製菓学校でお菓子の勉強中の身の上だ。

「うん、いちごのいい匂い。なにに、今日は何作ったの？」

うきうきと私が訪ねると、兄ちゃんがふつと頬を緩めた。

「いちごが、もう終わりの時期で安かったから・・・タルトにでも使おうと思って、たくさん買ってきた。」

ほらと差し出された手元を覗き込むと、そこには甘酸っぱい香りいっぱいの一いちごのタルト。

「うわあ、おいしそうー!!」

タルト生地いっぱいに敷き詰められた、深みの増したの一いちごちゃん達が私を誘惑する。

生いちごの瑞々しさとはまた違う、焼いたイチゴの香りは見た感じもいちごのジャムそのものだった。

「うわあ、美味しそう！ちようだいちようだい」

手を伸ばしたその甲を、ぺちん！と兄ちゃんにはたかれた。

「駄目だ。手、まだ洗ってないだろ？それに着替えてもない」

「じろりと睨まれて、私は軽く肩をすくめた。」

「はいはい、わかったよー兄ちゃんってば細かいんだから」

「——愛那？」

思わず洩らした言葉に反応した兄ちゃんの薄い唇から、低い声。私はぎくりとした。

しまった、機嫌を損ねてしまったみたい。

慌てて逃げるべく身を翻した。

「着替えてきます!」

「こけんなよ」

すかさずそんな声が背後からかかって私は「はぁい!」と返事を
して階段を駆けあがっていった。

うん、じつは最後の一段で足の膝を打ち付けたのは内緒という方
向でお願いします。

でないとまた兄ちゃんに怒られる・・・

んで、打ち付けた膝を押さえて涙目になりながらも、速攻で長T
シャツとカーキのカーゴパンツに着替えると、洗面所で手を洗い、
私はキッチンへと戻った。

うん、着替えるときに視界に入った膝に青タンが出来てたけど見
ないふり見ないふり。

兄ちゃんは、出来上がったタルトに仕上げとして茶漉しで粉砂糖
をふりかけていた。

細かい白色がいちごの上に散って、粉雪みたいでかわいい。

「早いな・・・」

苦笑しながら兄ちゃんは完成したばかりのタルトを私用に切り分
けて、お皿に盛ってくれた。

ほら、と兄ちゃんからさしだされた皿を受け取ると、私はダイニ
ングのテーブルに座って、うきうきとフォークを手取る。

「いったきまゝ」

ぱくりと一口、兄ちゃん特製のいちごタルトを頬張った。

う。

「うんまい〜!」

はむはむと噛むたびに、甘酸っぱいいちごの味が口いっぱい広が

る。

うん、生で食べるいちごも美味しいけど、焼いたいちごはまた違った感じで、この独特のむにとした触感がたまらない。いちごの実そのものが入ったジャムの味がする。

タルト生地との境目に、いちごの果汁がいい感じに染みてて、タルトのさくさく加減と一緒に食べると美味しい。

「これって・・・いちごだけしか入ってないんだね〜！」

うまうまだ、これ。

幸せな気分でタルトを味わいながら、私は気づいたことを兄ちゃんに訊いた。

いちごタルトってカスタードクリームがつきもののイメージがあるけれども、兄ちゃんが作ったタルトにはいちごしか入ってない。なんだか珍しい感じがした。

「そう。たまに、こういう素材だけのものが食べたくなるんだよね。焼いたいちごってのも結構いけるだろ？」

兄ちゃんは、コポコポとコーヒーメーカーから自分用と私用のカップに、琥珀色のコーヒーを注いでくれながら答えてくれた。

白い湯気が立ち昇る。

「うん、おいしいよ。」

カスタードもおいしいけど、いちごだけでも全然おいしい！」

うん、なんていうか、自然の甘酸っぱさが口の中に広がるんだよね。

熱を加えたことで甘みと酸味を増したいちごが、タルトの美味しさを引き立ててる感じがする。

「ちなみに作り方も超簡単だぞ。」

タルト生地に、グラニュー糖と片栗粉で混ぜたいちごを並べて、一緒に焼いただけだ」

と兄ちゃんがことりと、テーブルにカップを置いてくれた。

ピンクの水玉が私のでミルクたっぷりのカフェオレ、青い水玉のブラックコーヒーがお兄ちゃんのだ。

ありがとう、とお礼を言いながら、兄ちゃんの言葉に私は目を丸くした。

「え、ほんとに？」

「ああ。外国の家庭料理のタルトだからな。そんな凝ったものじゃない。

この素朴なところがいいだろ」

私はうんうんと頷いた。

うん、だってうまうまなんだよ、このタルト。

いちごジャムみたいな味わいだけど、ちょっと違ういちごの触感が癖になる。

「おかわりは？」

「もちろん！」

あっという間に最後の一口まで食べてしまった私は、兄ちゃんの言葉に勢いよく首を縦にふった。

苦笑しながら、兄ちゃんは今もう一切れ私にタルトをお皿に載せてくれる。

私はまた、嬉々としてイチゴのタルトにフォークを突き刺した。

「学校はどうだ？」

しばらくのおやつタイムの後、兄ちゃんがそう聞いてきた。

「新しいクラスにはもう慣れたか」

「うん！一年の時から仲良かった凛とも同じクラスだし、大丈夫だよ」

「そうか」

兄ちゃんがまたへにやりと目尻を緩ませて、ほんと私の頭に手を載せた。

お菓子づくりの繊細な動きのする骨ばった手。

「良かったな」

うん、これが私のブラコンの理由だわ。
私は心の中でしみじみとつぶやいた。

なにこの甘い笑顔。

こんな笑顔を向けられて、ブラコンにならないはずがないよね。
その分怒られたりもするけど、そんなものこの笑顔で帳消しだよ、
帳消し。

そういえば兄ちゃんが店番に立つと女性客が増えるんだよねえ、
と私はタルトをまた頬張りながら思った。

「——あ、それに、面白いこともあったよ」

手を下ろし、自分用のカップを手にとった兄ちゃんに、そういえば、と私は付け足した。

「へえ？」

キッチンにもたれ、一口カップに口をつけた兄ちゃんが私に訊きかえしてくる。

「どんなことだ？」

「あ、ええつとねえ」

笑顔で私は、あの大きな身体つきの、目つきの悪い……隣のクラスの子のことを説明しようとして、ふいに言葉を止めた。
うん、だってなんだか一瞬恥ずかしくなったのよ。

「愛那^{まな}？」

訝しげな兄ちゃんの声に私ははっとした。

慌てて兄ちゃんを見上げ、言う。

「えつとね、電車を降りようとして、ホームとの間に片足つつこん
じやった人がいた！」

「ええ？」

兄ちゃんが目を丸くした。

「どうやって？」

「なんか、ぼーっとしてて、ホームと電車の隙間を見ながら降りようとしたらそこに足入れちゃったんだって。

びっくりだよな？」

「なんて器用な・・・怪我とかはなかったのか、その人」

「うん、大丈夫だったよ」

話を誤魔化せたことにほっとしながら、私はカップに入ったカフェオレを一口飲んだ。

そうしながら思い浮かぶのは、兄ちゃんに話すのを止めた高橋君のこと、だった。

眉間に皺を寄せたあの表情を思い浮かべると、自然と口元が緩む。

実はあれから4日が経ってる。今日は、金曜日なんだ。
で。

あの黒猫さんに会った日から、私の日課がひとつ、増えた。

高橋君が黒猫さんにごはんをあげてた次の日、私はある予感を胸に抱いて、前の日と同じように校舎裏を歩いていった。率先してゴミ当番を引き受けて。

そして、その日も同じように、黒猫さんにパンをあげてる高橋君の姿を発見した。

高橋君は私の姿を認めると、一瞬驚いた顔をしていたけど、現れた私を拒む様子はなかった。

だから私も安心して、高橋君の隣にしゃがみこんだ。

まだ黒猫さんは私たちを警戒していたから、ちよつと離れたところで二人、黒猫さんが食べる姿を見守って。

食べ終わったら二人で玄関まで戻って別れる、そんな感じの日々を、この四日過ごしていた。

ちよつとずつ、ちよつとずつ心を許してくるのを感じる黒猫さん

に会うのは、嬉しい。

「^{まな}愛那？」

「——なんでもない」

思い出し笑いをする私を怪訝そうに見る兄ちゃんに首をふりながら。

私には、もうひとつの予感が、あった。
ちよっとした悪戯めいた予感。

——そしてそれは、当たっていたんだ。

高橋君と猫 2 (後書き)

続きます。

高橋君と猫 3

「いらつしゃいませ」

その次の日の土曜日。

先週と同じく、学生鞆と胴着を肩に掛けて現れた高橋君の姿を認めて、私はとっておきの笑顔で迎えた。

あ、びっくりしてる。

いつもちよつと眉根を寄せた無愛想な顔が、きよとした表情でお店の入り口で立ちつくしてるのを見て、私はふふつと悪戯っぽい笑みを浮かべた。

意外に目が大きいんだね、高橋君。そうしてると、ちよつと幼くって年相応に見えなくもないよ。

「ご注文は？」

にこやかにそう訊ねると、憮然とした表情を浮かべて、大またでショーケースのところまでやってくる。

「ロールケーキ。箱入りで」

「ありがとうございます。少々お待ちくださいね」

そう言い置くと、ショーケースからロールケーキを取り出してすばやく包装する。

持ち時間を確認し、保冷剤も入れて完成、と。

「ありがとうございます！」

につこり満面の笑顔でケーキを渡すと、迫力のある視線が返ってきた。おっとあ、怖いよ高橋君。

「・・・どうしてここに」

「えつとそれは、ここがわたしのお家だからです！ちなみに先週も居たよ？」

高橋君、うちのロールケーキ気に入ってくれたんだ？」

「・・・・・・・・・・」

す、と視線を逸らした高橋君を見て、私は堪え切れずに噴出してしまった。

高橋君の甘いものの好きは、私の中で決定事項になっていたんだ。なぜなら。

黒猫さんにあげるパンのチョイスがもう・・・全部、あまいあまい菓子パンだったから。

クリームいっぱい、チョコいっぱい、美味しそうなパン達ではあったんだけど、毎回毎回私は笑いをこらえるのに大変だったよ。

くすくすと笑うと、むっとした気配が漂ってくる。

けれど、この四日間であつとだけ高橋君のことを知った私は、それが照れたためだとわかったから怖くなかった。

「けど、高橋君こそどうしてこんなところに？」

「・・・母親が、この辺で働いてるんだ。」

「え、そうなんだ?! あれ、もしかしてうちの常連さんだったりするのかな？」

ウチのケーキ屋、一番のお勧めはロールケーキ。

ふんだんに卵を使った生地はふわっふわで、軽い。

中のクリームは甘さ控えめだけれども、少し柑橘系の果汁を混ぜていて、食べるとほんのり甘酸っぱい。

一度食べると嵌まる人が多く、常連さんは必ずといっていいほど買っていてくれる品なんだ。

高橋君は先週も買っていてくれたから、食べたことあるのかな? と思つての質問だった。

「・・・たまに、ここのケーキを買って帰ってくる」

「そっかあ、ありがとうございます〜!」

うふふと笑つて私がお礼を言つた時、背後の厨房からひいっとお母さんが顔を出してきた。

「愛那? どうしたの、お友達?」

どうやら話し声が聞こえたらしく、気になって様子を見にきたら

しいお母さんは、高橋君の姿を認めると一瞬だけきよんとして目を丸くした。

うん、ちよつと驚くよね。およそケーキ屋さんに似合わない風貌だし、目つきは悪いし。

とか考えてただけ、お母さんの反応は私の予想の斜め上を行っていた。

「あら！愛那と同じ学校の制服じゃない。

どうも、娘がお世話になってます」

と頭を下げつつ、お母さんが高橋君の頭の上からつま先まで視線を走らせ、全体像をチェックしたのが私にはわかった。

あ。なんか、やばい気がする。

「こんにちは」

す、と高橋君が姿勢を正して頭を下げる。

いつもは無愛想だけどそこはやっぱり腐っても体育会系なのか、年上の人に対する礼儀は叩き込まれてるなあと私は感心した。

口数は少ないけれど、穏やかな声音が落ち着いた雰囲気を漂わせる。

目つきはやっぱ怖いけど。でもまあ、精悍な顔立ちの高橋くんは、こうして見ると、背も高いし、テレビに出るちよい悪役のガタイのいいイケメンって感じた。

そして、世代的に、同じ世代の私達にとって高橋君の無愛想さってちよつと怖いけれど、お母さんにとっては違っらしい、ていうのがわかった。

「あらあらまあ」

えと、お母さん、どうしてそんなに瞳がキラキラしてるんですしよ。うか。

なんか、意味ありげに私のほうを見るの、止めてくれる。

ふふ、と全体的に柔らかめな印象を持つお母さんは、口元に手をあてて笑みを浮かべた。

「愛那ちゃん、せつかくお友達が来てくれたんだから、ちょっと出てきたら？ここは、いいから」

「「え？」」

私と高橋君の声がはもった。

え。お母さん、何言い出すの。

「ほらほら、行っで行って」

にこにこと、私の肩に手を置いてカウンター内から私を押し出すお母さんに、慌てて私は振り返った。

あれ、これ、なんか誤解してない？！

「お、お母さん、何か勘違いしてる・・・！」

「いいからいいから。行っでらっしゅい」

私の言葉を訊くこともなく、ぶんぶんとショーケースの向こうから大きく手を振るお母さんにあちやあと頭を抱えなくなる。

私の性格はどちらかというと母親似で、思い込みが激しいところなんてほんと、嫌になるほどそっくりだとお父さんや兄ちゃんに言われることを思いだす。

でもまあ、せつかくだからいつか・・・

私は肩を竦めながら、呆然とことの成り行きを見守っている高橋君に向かって、言った。

「行こっか？」

高橋君と猫 3 (後書き)

今日か明日にまた投稿します。

ややこしいことをしながらも、ここまで読んでくださったかた、本当にありがとうございます。そして、ごめんなさい！

高橋君と猫 4

「ごめんねー、高橋君」

商店街を抜けたところに、公園がある。

滑り台と砂場だけの、ほんとに小さな公園なんだけど、私と高橋君はそこへやってきていた。

小さな砂場の前に置いてある、二人がけのベンチに腰掛けると、私は目の前に立つ高橋君を見上げた。

高橋君は小さく首を振る。

「いや・・・」

「高橋君は今日、部活だったんだ？」

ね、黒ネコさんに会ってきた？」

高橋君はひとつ頷く。ふふつと私は頬を緩めた。

「そっかぁー、私、休みの日は学校行かないから・・・」

黒ネコさん、かわいいよねえー！私昨日、ちよつと感動したよ」

4日前まで近寄りもしなかった黒猫さんは、昨日、私の足元でご飯を食べた。

逃げないかな？とおっかなびつくり伸ばした指が触れた小さな頭の感触に、ほんのり胸が温かくなった。

そつと撫でた毛はふわふわで、愛しかった。

「ねえ、高橋君は猫派、それとも犬派？」

私はねー、犬派だったんだけど、断然今は猫派に変わっちゃったよ！」

調子に乗って話していた私はそこで、なんだか微妙な表情をしている高橋君を見つけてちよつと口を噤んだ。

「ご、ごめん、うるさかった？」

「いや・・・」

また軽く首を振りながら、じつと私を見下ろしてくる。

その不思議そうな目の色に、私はことりと首を傾げた。なにかな？

「・・・人見知りしないんだな」

見つめ返せば、ちよつと迷った素振りを見せた後でそんな言葉が返ってきて、私は軽く目を瞬いた。

え。

ひとみしり？

「・・・ぷっ」

思わず吹いてしまい、慌てて堪えようとしたんだけど、ツボに入ってしまったらしく、なかなか止まらない。

えつと、うん、多分、ほんとは何を言いたかったのかはわかったと思うよ、高橋君。

「・・・そこまで笑うか」

ぶるぶるとまた肩を震わせて笑っていると、懽然とした様子の高橋君が目に入って更にそれが笑いを誘った。

あーなんか、かわいいかも。

「うん、私、お家の職業柄人見知りはあまりしない方かも。

あ、でも、高橋君のことはちよつと初めは怖かったかな？」

くすくすと笑いながら、恐らく訊こうと思って何故か方向転換したのだらう、本当に訊きたかったことへの答えを言うと、ぷいと高橋君が顔を逸らした。

その顔が少し赤いように見えるのは気のせいじゃないと思う。

よいしょと私は高橋君を見上げたまま立ち上がった。

背の高い高橋君に近づくため、背伸びする。

「ていうかこの眉間の皺がねー、ただでさえ目つき悪そうなのに、怖く見えちゃうんだと思うのよ。

もったいないなあ」

せつかく、よく見ると男前なのにな？

今も寄ってるその皺を解そうと指を伸ばすと、その手が届く前に

がつしりとした大きな手のひらが私の手首を包んだ。

「・・・大きなお世話だ」

そう言いながら、そっと捕まえられた手首を降ろされる。

言葉とは裏腹のその丁寧な手つきに、私はどきりと心臓が飛び跳ねたのを感じた。

えっと。あれ？

今私はナチュラルにいたい何をしようと・・・！

一気に体温が顔に集まったのがわかった。

「じ、ごごごごめんっ」

ぎゃー、何しようとしたの私っ。

慌てて後ずさると、砂場の砂が散らかってる石畳の上で、ずるりと足が滑った。

ひよえ、こける・・・！

後ろに倒れて行こうとしたところで、大きな手のひらがまた私の手首をとり、もう片方の腕が私の腰を支えてくれて、転倒をまぬがれたことを知る。

「・・・そそつかしいと言われないか」

「ええっと・・・ごめんなさーい・・・」

助けてくれたのは、当たり前だけど高橋君なわけで。

ため息混じりにそんなことを言われ、吐息が触れる距離に心臓がどきりとした時にはもう、大きな体が静かに離れていった。

前にもこんなことあったような。

いやもうほんと、すみませーん・・・

申し訳なくって小さくなっていたら、また高橋君の眉間に皺が寄って、私を見た。

「・・・月曜日」

「え？」

ぼつりと零れた声に聞き返すと、ふいとその目が逸らされる。

「また、昼休みに校舎裏に、行く」

「……………」

私は目を瞬いた。

ええっと、それって。

「黒猫さんに、会いに？」

「……………」

ちらりと目線が返ってきて、それが『YES』の返事だとわかった。

そっか。

「じゃ、私も昼休みに行くね！」

につこり笑顔でそう言うと、少しの沈黙のあと小さな頷きが返ってきた。

——それからしばらくの後。高橋君は駅へと向かうため、そして私は店へと戻るため、この公園の前で別れたただけだ。

私の心の中はなんだか浮き足立っていた。

だってさーちょっと嬉しかったのよ。

あの無愛想な高橋君が、まさか誘ってくれるなんて。

ちよっと私に心開いてくれたのかなーなんて。

そんなことを考えて知らぬ間ににこにこ笑っていた私は、要らぬ勘違いをして私達を送り出したお母さんのことをすっかり忘れていた。

おかげで店に帰ったときには、「あら愛那ちゃんご機嫌じゃない」と根ほり歯ほり高橋君のことを突っ込まれることになってしまい、勘違いを解くために四苦八苦する羽目になってしまったのでした・・とほほ。

高橋君と猫 4（後書き）

ここまで読んでいただいて、ありがとうございます〜！
嬉しいです。

黒ネコさんの受難 1

というわけで、私の学校での日課がひとつ、増えた。

「はいはい、ちょっと待ってね〜！」

にゃあお、にゃあおと足元に絡み付いてくる黒ネコさんに話しかけながら、私もその場にしゃがみ込む。

きらきらと輝く、薄い黄緑色の瞳が期待を込めて見上げてくるのにふにやりと相好を崩しながら、私はねこまんまを入れた小さなブラスチックのタッパを差し出した。

とたん、待ってましたとばかりに鼻先をタッパに突っ込む黒ネコさん。

「ほらほら〜、ゆっくり食べて。」

慌てなくても、誰もとらないよ」

ごはんをがつつくその姿に、自然と笑みがこぼれ落ちてしまう。

ああかわいい。

一生懸命なその姿にもう私はめろめろだった。

はむはむと口元を動かしながら、美味しそうに目を細めるそのかわいい姿にハートが驚づかみにされる。

ゆら〜りゆら〜りと揺れるネコじやらしみたいな小さな尻尾を衝動的に掴みたくなるけど、ここは我慢我慢…！

せつなくなつてくれてきたのに、嫌われたら悲しすぎる。

しゃがみ込んで黒猫さんを見下ろしていた私の後ろから足音が聞こえて、私は笑顔で振り返った。

「こんにちは〜！高橋君」

「・・・どうも」

相変わらずそっけない感じだけど、ちゃんと挨拶が返ってくる。黒ネコさんが鼻先を突っ込んでいたタツパから少し顔を上げて、にゃあお、と甘えるような声を高橋君に上げた。うふふ。無愛想な目元がほんの少し緩んだの、わかつちゃったよ高橋君。

先週の土曜日、高橋君とこの校舎裏で昼休みに黒ネコさんに会にくると約束してから、私は黒ネコさんのごはんを用意してここにやってくるようになった。今日は月曜日から数日経った、水曜日。

高橋君は私がごはんを持ってくるようになると、代わりにお水を用意してくれるようになった。

うん、まあね。子猫ちゃんに甘い菓子パンはあまり身体に良さそうじゃないもんね。

高橋君がお水の入った小さな白いお皿を黒ネコさんの前に置くと、くんつと一度匂いを嗅いだあとで、黒ネコさんは小さな赤い舌を出してお水を飲んだ。

で、その様子を私はしゃがみ込み、高橋君はその隣で胡坐をかいて座り、眺めてる。

そろそろ日差しは初夏の鋭さを含んで来ていたから、私達は木陰の下に居た。

木漏れ日が綺麗な模様を草の上に描いていて、土の匂いがなんだか心地いい。

木陰だとちよつとまだ肌寒いけど、この黒ネコさんを取り囲む穏やかな風景に、気持ちがとつても癒される。

昼休みの終わるこの15分間が、最近の私のお気に入りの時間だった。

目の前の校舎から聞こえる生徒たちの喧騒がやけに遠くに感じる。うつゝん、ていうかもうほんと、眠い。

ごはんも食べたし、風も気持ちいいし、黒ネコさんはかわいいし。

ちらりと隣を盗み見ると、ごはんを食べ終わった黒ネコさんが、寂しかったんだよおとばかりに高橋君の胡坐のかいた足に擦り寄っていて、高橋君はその小さな頭を優しく撫でてあげてるところだった。

ああ。

ほのぼのする。

無邪気な黒ネコさんにつられてか、いつもは皺が寄ってる高橋君の表情も和やかだ。

いつもはとっつきにくい雰囲気も今はなりをひそめていて、会話こそ少ないけれども、この空間はとても居心地のいいものだった。

腕を伸ばし、大きく伸びをして頭上を見上げた私の目に、校舎の無機質なコンクリートの壁の色が映り——ふいに、私は誰かと目が合った気が、した。

あれれ？

一瞬三階の窓に人影がいて、私達を見下ろしているように見えたんだけど、気のせいだったかな。見直したときにはもう、人影なんてなくなっていたから。

「…どうした？」

なんとなく校舎のほうに身を乗り出して目を懲らす私に、高橋君が不審そうに尋ねてくる。

その大きな体の足の間には黒ネコさんがくると丸まって寝そべっていた。

その微笑まじすぎる姿に、私の注意は完全に逸れてしまった。なにこれ。かわいいすぎる・・・！

時間が過ぎるのはあっという間で、予鈴が鳴り響いて私と高橋君は黒ネコさんとさよならの時間になってしまった。毎度毎度しかたがないけれど離れがたい。

「じゃあね、また来るね？」

ちよこんと地面に座り、私達を見上げる黒ネコさんにそうお別れの挨拶をするときゃあ、とタイミング良く黒ネコさんが鳴いてくれる。

私はバイバイと手を振って、後ろ髪を引かれる思いで高橋君といつもの校舎裏を後にした。

「おかえりー愛那」

教室に帰ると、他の友達と話してた凜が出迎えてくれる。

「ただいまー」

「おかえり。どうだった？」

「あーもう、むっちゃかわいいよ！」

窓際の席の椅子を引きながら凜とそんな会話をする。

凜には、昼休みどこに行ってるか伝えてある。

どんな反応が返ってくるかと身構えてたんだけど、割かし普通に「そっか、わかった」と受け入れてくれて、助かった。

だってねえ、逆の立場なら私なら間違いなく質問攻めだよ。

だってあの『高橋君』とどっという展開でこんなことになるの？！
って。

凜は見かけは近寄りがたい雰囲気のある綺麗な子んだけど、意外と実態はおっとり天然さんの癒し系だ。

「いいなあ、子猫。私も見てみたいな」

「え、じゃあ見に行く？放課後行こうよ」

私が軽く請け負うと、凜は嬉しそうに笑った。

そうこうしているうちに昼休みの終わりのチャイムがなり、先生がやってきて 5時間目が始まった。

というわけで放課後。私はまたまた上機嫌で校舎裏に向かっていた。

凜と一緒にね。

「かわいいよ、もう絶対めろめろになるよ！」

「ほんと？私、猫好きだから楽しみだなあ」

にこにこ凜が言う。

——けれど、校舎裏で私達を待っていたのは、意外な光景だった。

「うわ、ちょ、暴れんなお前」

ジャージを着たまだ年若い男の先生が黒ネコさんの首ねっこを掴んでどこかへ連れて行くとうとしているのを見つけて、私は慌てた。

「ちょい待つてー！先生っ」

黒ネコさんは首元を掴まれるのを嫌がって「みぎゃあ、みぎゃあ」と暴れている。

先生は私達の姿を見つけると、きょとした表情を浮かべた。

日に焼けた顔に、短く刈り上げた髪。私達は受け持たれてないんだけれども、体育の先生だ。

まだ若いから生徒たちにも親しまれてて、一部の生徒たちから下の名前で「保たもちゃん」と呼ばれてる。どことなく愛嬌のある顔立ちをしてるんだよね。男らしい眉の下に覗くくりんとした瞳とか。

「あれ？なんだ、井上たち。どうした」

「どうしたじゃないです！黒ネコさん、嫌がってますから放してくださいよー！」

と先生の腕から黒ネコさんを救出しようとする、先生がひよいっと私を避けてしまった。

「なんだ、お前たちか？この猫連れてきたの」

「え、ええ？！ち、違いますよ！っていうかちょっと先生！黒ネコさん苦しそうですから！止めてあげてくださいよ！」

思わず反射的に嘘をついてしまった。直感で、面倒なことになりそうだと思ってしまったから。

ほんの少し罪悪感を覚えるけど、「みい」と哀れっぽく鳴く黒ネコさんの姿にそんなもの吹っ飛んでしまった。

先生は自分の背が高いのをいいことに黒猫さんの首根っこを高く持ち上げて私の腕を避ける。

黒ネコさんはでろーんと重力にしたがってぶら下がってる状態だ。

って、だから動物虐待反対！

「そつかあ・・・実はみやあみやあと子猫の声がうるさいと他の先生方から苦情がきててなあ。」

俺に追い出して来いって命令がきたわけなんだよ」

え。うそ。

同情してくれーと言わんばかりの先生の言葉に私は軽く目を見張った。やば、そんなことになってるとは。

「お陰でさんざん探し回るハメになったじゃないか、まったく。」

ふう、と疲れたようにため息をついた後で先生は黒猫さんの首根っこを掴んだままくりと背中を向けた。

私は思わず、先生の腕にしがみ付いてしまっていた。

「ちよっと待ってせんせー！」

「う・・・わ！」

バランスを崩した先生の腕から、黒ネコさんが逃れて地面に着地し、そのまま一瞬だけちらりとこちらをみた後草むらの中に逃げていく。

「あつ、待て・・・！」

先生が慌てて後を追うけどもう黒ネコさんの姿は消えたあとだった。

よ、良かった。

ほっと胸を撫で下ろす私を先生が恨めしげに見下ろしてくる。

「いーのーうーえー」

「ご、ごめんなさい、でも、かわいそうだったから！」

はあ、と先生が疲れたようなため息をついた。

「俺だつて好きで捕まえたわけじゃないってのまったく・・・しょうがない、出直すか・・・」

肩を落として先生が私達から背中を向け、校舎裏を去って行く。

なんだか哀愁が漂う先生の背中に申し訳ない思いがこみ上げてきたけれども、あのままだったら黒ネコさんに二度と会えなくなってしまうたかも・・・！

「愛那ー！」

先生とのやりとりを見守っていた凜が駆け寄ってくる。

私は肩をすくめて凜に謝った。

「ごめんね、凜。黒ネコさん、どこか行っちゃった」

「うん、それはいいんだけど・・・黒ネコさん、追い出されちゃうの？」

「・・・そうみたい・・・」

私は眉を寄せて頷いた。

「そっか・・・せっかく懐いたみたいだったのに、残念だね」

「・・・」

私は黒ネコさんが去っていった草むらの方を見つめた。

初めは近寄ってもくれなかった黒ネコさん。

警戒心が強かった子猫ちゃんがやっと、最近では私達の姿を見つけると飛んでくるようになったのに・・・

どうもそれが、仇になってしまったようだ。先生が呼んで捕まえられるくらい人に慣れてしまったみたいだし。

——せっかく、高橋君とも仲良くなれたのにな・・・

そんなことを考えてがっくりしていると、ふとまた視線を感じて私は後ろを振り返った。

校舎の三階、昼休みと同窓際で誰かの影が見える・・・見た感じ、男子生徒？っぽい。

けど、目が合ったかな？と思った瞬間、またその影はふいと身を翻して消えてしまった。

「・・・・・・？」

「どうしたの、愛那」

凜が不思議そうに訊いてきて、私ははっとして首を横に振る。

「ううん、ごめん。なんでもない。行こっか」

と凜を促しながらも、なんとなく私は、その視線が心に残ったのだった。

黒ネコさんの受難 1（後書き）

ここまで読んでいただいております。

黒ネコさんの受難 2

そんなことがあった次の日。

私は、黒ネコさんが先生に見つかからないかどうか気が気じゃなかった。

かといって何回も校舎裏に行ったりして、もしかた先生に会ったりしたら怪しいことこの上ないし・・・私は休み時間ごとに廊下側の窓から校舎裏の様子をひっそりと伺って、黒ネコさんが捕まっていないかどうか確かめていた。

で、そんな落ち着きのない午前中を過ごした、待望の昼休み。

私は出来るだけ早く昼ごはんを食べた後、校舎裏に来た。

その先で見覚えのある姿を見つけ、思わず頬が緩んだ。

あ。早い高橋君、もう来てたんだ。

昨日も居た木の下で胡坐をかいて座ってる高橋君を認め、私は周りを確かめながら近寄る。

高橋君の傍にはコンビニの袋と、食べ終わった後のゴミがその中に入ってるみたい。どうやらここで昼ごはんを食べたらしい。そんなことを確認しながら、きよろきよろと辺りを見渡す。

うん、大丈夫。先生はいない。この位置だと、遠目からだと思えばが邪魔して黒ネコさんはあまり見えないはずだ。でも、念には念を入れたほうがいいかな。

「高橋君、ごめん、ちょっとこっちに来て！」

たどり着くなり、開口一番私はそう言って、高橋君のがつしりとした腕を引っ張った。

黒ネコさんがうみやあ、と高橋君の足の間から目を細めて私を見上げてくる。か、かわいい・・・、じゃなくて。和むのはあとあと！

「……？どうしたんだ？」

「理由は後で話すから、もつと奥！あっちに行こう！」

と私は、木の茂みを指差して高橋君を促した。

高橋君は眉をしかめて不明瞭な顔をしながらも、私の言うとおり黒ネコさんをそつと抱き上げて、木の茂み、コンクリート塀の傍まで私に引きずられるまま来てくれる。

うん、ここなら木が邪魔して、私たちの姿も隠してくれる。いい感じ。

「ごめんね。高橋君、ここでいいよ。」

私は注意深く辺りをチェックした後で高橋君の腕を放し、先に木の傍の草の上にそつとしゃがみ込んだ。

高橋君の腕も引つ張ると、逆らうことなくすとん、と大きな体躯が私の横に座ってくる。黒ネコさんは腕に抱かれたままだ。

楠の木は立派な幹をしていて、がっしりした高橋君ははみ出ちゃってるけど、他にも木々があるから、気づかれることはまずないと思う。

「……どういうことだ？」

ふう、とひとまずほつとしてため息をついたところで高橋君がそう聞いてきた。

私はみゃあお、と腕に顔をすりつけてごはんをねだる黒ネコさんに、用意していたねこまんまの入ったタッパを開けてあげながら、手短に昨日のことを高橋君に話した。

「というわけなの……だからしばらくは隠れてたほうがいいと思うんだけど……これからどうしよう？」

「……」

話し終わり、高橋君を見上げると、高橋君は腕組をして考えこむ表情をしていた。

私はその、男らしい顔の輪郭を見上げる。

強い意志を表すかのような太い眉、その下の瞳はきりつとした鋭さがあり、それが目つきが悪く見える要因にもなってる。とても同い年には見えない大人っぽい顔立ちは、見惚れてしまう精悍さがある。

じいつと見つめていると、ふいにその瞳がこちらを向いて私はどきつとした。うわ、見たたのわかつちやったかな、恥ずかしい。

そのちよつと厚めの唇が何かを言おうと開いたときだった。

「おーい、ネコ、ネコやーい、いないかー」

という声が、茂みの向こうから聞こえてきたのは。

う、来た！

ぎくりと肩が強張った。すばやく黒ネコさんを確かめると、タツパから顔を上げ、ぴくぴくと耳を動かして辺りの様子を伺ってるところだった。

次に楠の木に身を隠して背後の様子を伺うと、昨日の先生があちこち校舎裏を探し回りながらこっちに向かって来ているのが見えた。うわあ、どうしよう。

「おつかしいなあ、いないなー」

能天気そうな先生の声に追い詰められる心地がする。

ていうか、ちよつとこっちの方に近づいてきてない？

寄りにもよつて先生は、茂みの中にまで足に踏み入れてきていた。どくん、どくん、と心臓の音が騒がしくなつてきて、身体が緊張のあまり硬直したように動かなくなつた。その間にも声は近づいてきている。

そんな私の肩にそつと手を掛けられたのは、がさがさという草の踏み分ける音が近くまできた時だった。

え、と思つた時には固まる私の腕を優しく、でも逃がさない力強さをもつて地面に引き倒される。

すぐ隣に大きな身体と一緒に倒れてきた。言うまでもなくその主は高橋君だ。

「ぎゃあ、近い近い！近いよ高橋君！」

すぐ傍に温かい熱を感じて、顔が赤くなるのがわかった。吐息を頭の上感じて、その近さに眩暈がする。

草むらに顔が隠れるくらいまで倒されて、楠の陰から先生の様子を伺う。

「おい、いないかー」

先生の声が聞こえて、は、と私は我に返って黒ネコさんを探した。黒ネコさんは高橋君の足元に警戒態勢で座り、耳をぴくぴくと反応させている。ひげがぴんと張ってる。どうやら黒ネコさんも、昨日のことをちゃんと覚えてるようだ。

「お願い、見つかりませんように・・・！」

私はぎゅっと目を瞑って祈った。

その祈りが通じたのか、しばらくすると先生はあきらめて茂みから出ていった。

その姿が校舎裏から消えたのを確認したとたん、ふうっ、と思わず大きな安堵のため息が出た。

「よかったぁ・・・！」

「・・・行っただな」

「——！」

耳の傍で低音が響いて、気の抜いていた私は傍目にわかるほど肩を揺らしてしまった。うはあ、忘れてた・・・！

「・・・悪い、驚いたか」

隣に感じていた熱がふっと消えた。高橋君が身を起こし、また眉を寄せた顔で私を見下ろしていた。

「見つかりそうだったから、つい引っ張ってしまった。痛くなかったか」

「そう言いながら、手をさしだしてくれる。」

私はその大きな手のひらを見つめ、ちよつと迷いながらも自分の手を差し出した。

手のひらが届く前に、ぐい、と高橋君が私の手を握って上に引っ

張り揚げてくれる。

身体を起こした私は、その力強さにまた胸がどきりとしてしまった。

「うわ、うわ、絶対顔赤いよ、私いま。」

「あ、ありがとう」

「いや。こっちこそ悪かったな。」

と高橋君はそう言っ、軽く制服についた土を払いながら立ち上がった。

それから考え込むように腕を組む。

「とにかく、しばらくは見つからないようにして・・・こいつの飼い主を、探すしかないな」

「そ・・・う、だよね」

追い出されるより、飼い主を探してあげるほうがずっといい。

それでも、私はちよつと名残惜しかった。そんな場合じゃないのに。

高橋君と黒ネコさんと一緒に居た、この温かい空間がとても居心地がよかったから。

「ほら、お前ももう行け。見つからないようにしろよ」

高橋君が黒ネコさんの前にしゃがみ込んで、丁寧な手つきで黒ネコさんの頭を撫でた。黒ネコさんは気持ちよさそうに目を細めてごろごろと喉を鳴らしている。

「・・・じゃあな」

最近よく見るようになった、きつめの瞳を一瞬和ませて、高橋君は立ち上がって黒ネコさんに別れを告げた。

私もそつと柔らかい毛並みを撫でた後で、バイバイして、高橋君のがつしりとした後姿を追った。

後ろを振り返り振り返り茂みを出ていく。

上手いこと草むらと木々が小さな黒ネコさんを隠してくれるのを確認するとほつとして——ふいにまた、気配を感じて校舎を見上げた。

三階の窓に人影？

光が反射して、眩しい、と一瞬手で防いだあと、もう一度見ると人影は消えていた。

・・・また、だ。

「井上？」

「あ、ごめんね、何でもない」

校舎裏を曲がるところで高橋君が振り返って怪訝そうな視線を向けてくるのに手を振り。

私は、高橋君と校舎裏を後にした。

黒ネコさんの受難 2（後書き）

ここまで読んでいただいて、本当にありがとうございます。感謝感謝です！

（＾＾）

黒ネコさんの受難 3

五時間目が終わって、私と凜は他のクラスメイト達とも一緒に、本館と別館を繋ぐ渡り廊下を歩いていった。

移動教室だったんで、教室に帰るところなんだけど。

他のクラスメイト達が他愛もない会話を交わす中、私は昼休みのことを思い出してひっそりと落ち込んでいた。

黒ネコさんの飼い主、かあ。

我が家は、ケーキ屋さんを営んでるから無理だ。昔から、動物を飼いたいと言っても許してもらえなかったから。

高橋君のお家も共働きと聞いていたし、難しいんだろうなあ。

とかぐるぐる考えながら歩いていると。

どん、と誰かとぶつかった。

「いたっ」

相手は男子生徒だったみたいで、小柄な私にとっては結構な衝撃だった。持っていた教科書と文房具を床にぶちまけてしまう。

おまけに私は尻餅をついてしまったんだけど、相手の方はというと、ちらりだけこちらに視線を寄越しただけで、そのままさっさと行ってしまった。

私達が行こうとしていた本館のほうへと。

「うわ、ちょっと最悪、あいつ！」

「大丈夫？愛那ちゃん」

クラスメイトの女の子達が地面に散らばった教科書たちを救出してくれるのに、「う、うん大丈夫」と返事をしながら私はお尻を押さえながら立ち上がった。いてて。

「あいつら組の春日じゃない？」

「ほんとだ。あの、頭いいけどちょっと変わった感じのヤツ」
「さいてー」

女の子たちが、ぶつかつた男の子に非難を込めた視線を向けていて、私はその言葉を追うようにそちらを見た。

縦に細長い、ひよろりとした後姿のその男子生徒は私達の声が聞こえたのか、またこちらに視線を向けたところだった。

いかにも勉強が出来そうな、制服のブレザーをきちつと着ているその姿はどこか潔癖そうな印象を受ける。

で、眼鏡をかけたその神経質そうな眼差しと一瞬、私は目が合った気がしたんだけど。

あれれ？

その視線に、どこか既視感。

でも、私が首を傾げている間に、その男子生徒は、そのまま校舎に入ってしまった。

「愛那？」

「――！」

凜に話しかけられて私ははっと我に返った。

「どうしたの？」

「う、ううん、なんでもない」

首を傾げる凜にそう答えて、私達は教室に向かっただけ。

何だか私はあの男子生徒のことが印象に残った。

どうしてだろう。

あの、眼鏡姿。なんだか気になる。

そういえば、5組って3階にあるよね。

そんなことを考えていると6時間目の始まるチャイムが鳴って、私は先ほどのことは忘れてしまったのだった。

というか、ね。

それどころじゃない事態が舞い込んできたわけ。
6 時間目のホームルーム。

「はい、じゃあ引いた番号を言いに来てくださいねー」
教壇に立つ委員長の子の男の子の音が、がやがやとにぎやかな教室に響いた。

一方の私は、今しがたくじの入った箱から取り出した、自分が引いたくじの番号を見て、頭を抱えたい気分になっていた。
うわあ、最悪だあ。

この時間、6 月に開催される体育大会に出る競技を決めてて、今は全員参加の二人三脚の相手をくじを引いて決めてるところなんだけど。

運がないことに、私は一番面倒な番号を引いてしまっていた。
ため息をつきつつ、ばれないようにそっと辺りを見渡す。他の生徒達は、自分が引いた番号を自己申告しに教壇のほうへと群がっていた。

黒板には1〜18の番号が書かれていて、番号の隣に男子と女子それぞれ名前が書く欄がある。つまり、同じ番号の者同士がペアを組む、ということなんだけど。

「愛那、どうしたの？ なんだか顔色が青いけど」
さら、と染めてない黒髪を揺らして凧がこちらにやってくる。
私は机につつぷして凧の綺麗な顔を見上げた。

「・・・ちよ、最悪」
「え。・・・まさか」

凧はほっそりした指で口元に手をやり、目を丸くする。私はそれ

にこくん、と頷いた。

私が引いた番号は16番。もちろん、番号が問題なんじゃなくて私の相手が悪かった。

——間違いない。だってヤツがくじ引いたときに、16番を引いたという情報が女子の間に駆け巡ったんだもの。

なぜよりにも寄って……！

ちなみに男子のお目当てって凜なんだけど本人気づいてないだろうなあ。結構熱い視線を集めてますよ、凜さん。

って今はそんなことどうでもいい。

私はため息を一つつくと、がたりと椅子を引いて立ち上がった。

「ちょっと私、行ってくるね」

「え？どこに？」

「決まってるよー、鈴木さんたちのところ」

こんなもの、裏工作してしまうに限る。変に恨みを買いたくない。平穩無事な生活を壊すような要因は、捨ててしまった方がいいよね、うん。

とか考えながらくると首を巡らしたとき、空気の読めないヤツが、ここにやってきた。

「なあ、井上たち何やってんの？番号言いにいかないの」

犬っころみみたいな瞳が不思議そうに私と凜の姿を捉える。

うわあ、最悪。私の顔が、正直に引きつった。

女の子にもてそうな甘いマスクに、すらりとした体躯。

まつげは女の子のように長くって、鼻筋はすつと通っている。

学校仕様の紺のブレザーなのに、まるで雑誌のモデルのように着こなしてるのは単純にすごいと思う。

無駄に顔のいいこの男、名前は氷室 壱^{いち}という。

そう、お分かりのように、こいつがもう一つの16番のくじを持つてて、さっきそれがクラス中に駆け巡ったってわけ。

ある人は同じ番号を求めて、ある人はやっかいごとを嫌がってその番号を避けようと、女の子の間にちょっとした緊張感がぴりぴりと張り詰めてる。

私はもちろん後者に決まってる！

なのになのに。

なんでこのタイミングでここに来るかなあ、あんた。

「あー、なんでもないなんでもない。ちょっとトイレ行きたくなっただけ。

というわけで行ってくる」

軽くいなして、私はこの場を去ろうとしたんだけど、くい、とその首根っこを捕まえられる。

「待った。なんか様子、おかしくない？」

「ちょ、苦しい！離してよ馬鹿っ」

じたばたと暴れて、慌ててその手から逃れたんだけど。

その拍子にひらり、と私の手から件のくじが氷室の足元に落ちてしまった。

あ、しまったあ！

慌てて拾おうとした時にはもう、すばやい動きで氷室がそれを拾ってしまった。

「あれ、なんだー。井上、俺と一緒にじゃない」

嬉しそうな氷室の声が、教室に響きわたる。

瞬間、ざわ、と教室がざわめいたのがわかった。

うわあ、最悪だ！私は青ざめて氷室からくじを取り返した。

「幻覚！今のは幻覚だから！！」

「なに言ってるの。ほら、行こうー。工藤も一緒に」

「わー離してー！！」

凜が苦笑して後ろからついてくる。

右手を取られてずるずると氷室に教壇の方まで引きずられていく私の目に、教室の一番後ろでたむろっていた女子生徒たちが私たちを見つめているのがわかって、心の中で絶叫した。

うそー！ちょ、やめてよ。

一年のときから同じクラスの氷室は、有難くないことに私と凜には心を許してるフシがある。おかげでヤツのファンから熱い視線を向けられるのはしばしばだったけど、何もこんな面倒な展開にならなくったっていいと思う！

暴れる私に、ふ、と一瞬だけ氷室が振り向いて笑った。

それは、傍から見ると甘い犬っころスマイルだったけれど、私にはわかった。それは確信犯的な笑みだった。

「残念でした、あきらめよう」

「……！！！！」

「井上と一緒にだと、周りが煩くないんだもん、ラッキーだ」
知っててこっちにやって来たのかー！！

氷室のくせに生意気な……！

文句を言おうと口を開きかけた私を遮って、前を向いた氷室が大きな声で言った。

「16番、氷室、井上でよろしくー」

「お、りょうかい」

「ああと、井上さん、ご愁傷様ががんばってねー」

「おいそれどういう意味だよ」

クラスメイトの男の子の言葉に氷室が目を眇めるけど、私はそれどころじゃなかった。

呆然と、目の前の黒板に、氷室と自分の名前が記されていくのを眺める。

それはまるで死刑執行を宣告されているような気分だった。

「がんばって、愛那」

なだめるようにぽんぽんと私の肩をたたく凜の言葉も、耳に入って来なかった。

うつ、なんでこうなるの・・・！

——で。案の定というか、お約束な展開が更に私を待ち受けていたわけ。

6時間目も終わり、ホームルームも終った放課後。

くじ引きにがつくり気ながらも、黒ネコさんのことが気になる私は、また校舎裏に行こうと、持って帰る教科書を鞆の中に詰め込み、凜に一言言って向かおうとしたときだった。

「井上さん」

話しかけられて、そちらに顔を向けた私の顔が思い切り引きつりそうになった。なんとか堪えたけど。

「ちよつといいかな？」

取り巻きをつれた、クラスメイトの女の子3人組み。真ん中の、気の強そうな顔つきの女の子が腕組をして私にそう言った。

鈴木さんたちだ。

それはなんというか例の、氷室のファンの子たち、だった。

うつ、めんどくさいことになった・・・！

「愛那？」

凜が心配そうにこちらに寄ってくるのに、私は苦笑を浮かべて顔

を向ける。

「あーごめん、凜、先に帰っててくれる？ちよつと、鈴木さんたちとお話に言ってくるわ」

「・・・大丈夫？」

「えーと、うん？大丈夫？なのかな？」

私はあえて、その言葉を鈴木さんたちに振った。笑顔を浮かべて。言質をとるべく。だって怖いじゃん！

皆の視線が鈴木さんに集まった。鈴木さんはちよつと目を見開き、それからくすりと意味ありげな笑みを口元に浮かべた。

「さあ？それは、井上さん次第かもね」

ど、どういう意味なのそれ。私次第って。嫌な予感しかないんですけど。

今度こそ頬が引きつってしまった私の両脇にクラスメイトの女の子達が立ち、私は心配そうな顔つきの凜を置いて鈴木さんたちに連れていかれてしまったのだった。

どうか穏便にお願いします・・・！

連れて行かれた先は、例によって例のごとく校舎裏だった。いつも黒ネコさんと会ってる場所じゃなくて、ゴミ捨ての焼却炉寄りの。

それにしたってベタすぎる、この状況。

私は目の前に鈴木さんを真ん中にして並んだクラスメイトを眺めて肩をすくめ、ふう、とため息をついた。

怖くはないんだけど、ひたすらめんどくさい気分でいっぱいだった。

だってまあ。私、何にも後ろめたいことなんてないし。正直氷室なんてどうでもいいし。

「単刀直入に言うわ」

と、腕組をして鈴木さんが言った。私はそれを恐る恐る見上げる。鈴木さんはすらっとした細身、髪はショートボブ、どちらかというとちよつと派手めの顔立ちの子だ。

私はちよつと唾を飲み込んだ。さあ、どう来るのか。二人三脚のくじを換える？願ってもないこと。氷室の傍に寄るな？何の支障もありませんですよ！

という返事を用意していたんだけども（こういうのって勢い勝負だと思ってるからすぐさま返してやる！とある意味意気込んでたワケ）。

「私と友達になって」

「・・・・・・は？」

私の目が点になった。聞き間違い？と相手を見返すけれども、鈴木さんはそのきつそうな印象を与える、つり上がり気味の目に真剣な色を滲ませて、私を見つめてる。

「えと・・・」

「友達になつて」

「・・・・・・」

再び私は沈黙した。えーと、これは予想してなかった。ぽりぽりと頬を？く。

「えーと、訊くけど、何で？」

「決まってるわ、井上さんが氷室くんと仲がいいからよ」

「・・・その言葉に対しては言い返したいことが山ほどあるけど、だからどうしてそこから友達になるっていう発想が？」

二人三脚の相手変わってもらうとかさー、近寄るなとかさー、正直そういうの私、想像していたんだけど

という疑問をぶつけると、

「だってそんなの、氷室君に嫌われるだけで何のメリットも私になんじゃない」

あくまで真面目に、鈴木さんは答えた。

まあ確かに、その通りっちゃあその通りなのだけれども。

戸惑い気味に辺りを見渡すと、鈴木さんの両脇に立ったクラスメイトはちよつと苦笑気味の様子だ。

またこの子はーという生温かい視線を鈴木さんに向けてる。

あれ、取り巻きだと思ってたけど、なんかそんな感じでもない、普通に友達な感じだ。

「だからって何も言わず井上さんに近づいてもフェアじゃないから、宣告することにしたの。」

氷室君に近づきたいから、私と友達になってくれる？井上さん」

「……………」

またまた沈黙してしまう私。

初めは困惑していたんだけど、じいつと真剣な顔で鈴木さんに見下ろされてるうちに、なんだかちよっとおかしさがこみ上げてきた。だってこんな（ある意味）告白、されたことないよ！（って、普通の告白もないけどね）

「…………ひむろのこと、すきなんだ？」

口元が緩むのを堪えて訊くと、なんだか幼い口調になってしまった。こくり、と鈴木さんから素直な頷きが返ってくる。

「うん、だから協力して欲しい。」

……友達になってくれる？」

最後はちよっと上目遣いになって私を恐る恐る見つめてくる。ちよっと頬が染まってるのが可愛い。

いやいや、こんなある意味アグレッシブにお願いしてきてる割にそんな殊勝な態度って、どうにも性格定まってないよ、鈴木さん！駄目だ。

「井上さん？」

「ご、ごめん。ちょ、ちよっと待って」

なんだか可笑しくなってしまうって私は笑い出してしまった。だってなんかかわいい。

猪突猛進っていうの？そもそも、『フェアじゃないから』と断って友達宣言してくるあたり、なんだか真面目というか義理堅い性格がしのばれるよね。好感がもてる。

うん、こんな呼び出しならいつでも大歓迎だな。

くすくすと笑う私を困惑気味に鈴木さんが見下ろしている。

その両脇でクラスメイト達が顔を見交わして苦笑しているのが目の端に移った、その時だった。

ざっざ、という土を踏みしめる音とともに、

「おー、お前ら何やってんだ」

ジャージ姿の先生が、焼却炉の反対側からこちらへやって来るのが見えたのは。

え。

思わずぴきりと固まる私を見やり、太陽の光を背にした先生がからからと笑ってる。

「なんだ？もしかして、イジメか？」

なんて、言葉の深刻さとは裏腹に暢気そうな様子でこちらに近寄ってきた。

あーうん、まあ状況的にはそう見えるよね。

だって、私校舎を背に取り囲まれてるし。それにしたって、もうちょっと真剣に心配してもいいシチュエーションだと思うんだけど、という、私の軽い疑問は次の鈴木さんの言葉で解けた。

「ちょっと保つちゃん人聞きの悪いこと言わないでよ！」

保つちゃんと呼んでる辺り、先生と仲がいいみたい。

きつと、先生は鈴木さんがそんなことする子じゃないって知ってるんだなーとちよつと納得した。

「そうだそうだー、むしろ愛の告白？」

「そうそう、お友達になつてくださいつてねー」

鈴木さんが眉を怒らせて文句を言えば、両脇からもすかさず援護射撃が。

う、うん、間違つてない。一言も間違つてないよ！

先生は不思議そうな顔してるけど、うん、その通りなんです。ていうか、それどころじゃなくて！

先生いま、あっち側から来たよね？！黒ネコさんの居た方向から。黒ネコさんの姿が見えないから大丈夫だとは思ってたんだけど、私はそわそわ落ち着かなくなる。

いやいや落ち着こう私、怪しいから。

と自分を宥めながらも、次の先生の言葉に私は居てもたってもいられなくなってしまった。

「それにしても今日は校舎裏大人気だなあ、いつもは全然人気ないのに」

明らかに向こうのほうにも人の姿があつたというニュアンスを含むそれに、私は一瞬、高橋君かなあと思った。

だけど、何故だか胸騒ぎがする。

「・・・井上さん？」

先生とお話中だった鈴木さんが、様子のおかしい私に気づいて声をかけてきてくれる。

私はその声に導かれるように、勢いよく顔を上げた。

「ごめん、私、もう行くね！」

「え？え、ええ？うん？」

多分、よつぽど切羽詰った様子だったのかな、鈴木さんが仰け反って頷いた。

私はその脇をすり抜けて——ふいに先ほどまでのやり取りを思い出して、慌てて振り返って鈴木さんに叫ぶ。

「あ、鈴木さん、こちらこそお友達よろしく！」

「——」

私の言葉が届いたとたん、鈴木さんの表情が嬉しそうな顔に変わるのを確認した後で、私は「さよならー！」と、ぽかんとした面々を置いて校舎裏を黒ネコさんの居るほうへとひた走った。

高橋君でありますように、ただの私の気のせいでありますように・

・・！

と願いながら。

嫌な予感満載の、ときどきと早い胸の鼓動に思わず祈りを捧げずにはいられなかった。

「――！！」

でも。

私の予感は当たってしまった。

校舎裏、茂みに近い、いつも私と高橋君が座っていた大きな木の陰で。

しゃがみこんでる、ひよろ長い背の男子生徒に私は見覚えがあった。

神経質そうな瞳が、突然現れた私を見て眼鏡の奥で驚いたように見開かれるのがわかったけど、それどころじゃなかった。

――彼の足元に身体を丸めてる、その小さなシルエツト。

黒ネコさんの姿を見つけて一瞬ほっとした私は、すぐさま顔が青ざめるのがわかった。

黒い毛並みだけど、すぐにわかった。

そのかわいらしい後ろ足に、血が滲んでるのが。

怪我してる！

「黒ネコさん！」

思わず私はその小さな姿に駆け寄った。

男子生徒を押しつける勢いで目の前にしゃがみ込む。

くまなく全身を見回すと、右足の肉球近くのところから血が出ている以外、他に怪我はないみたい。

そのことにまずほっとした。

私が来たのに気づいたのか、黒ネコさんはのそりと顔を上げて、みゃあお、と鳴いた。

「く、黒ネコさん、大丈夫？痛くない？！」

手を伸ばすと、すり、と甘えるような仕草で顔を摺り寄せられて、私はほお、と息をついた。

よかった、元気みたい……。でもいったいどうして？

辺りを見渡すと、すぐ近くに血の付いた小石が見つかった。小石だけ、子猫にとったら当たれば結構な衝撃になったはずだ。

さらに見ると、校舎の近く、コンクリート部分と地面の境目のところらへんで不自然に小石が集まっていた。黒ネコさんに当たったのと同じくらいの大きさの小石。

どうやら黒ネコさんはあそこから小石を当てられたみたいだ。

ひどい、どうして……！

怒りで全身が熱くなり、その勢いのまま私は、すぐそばに立ち尽くしてる男子生徒を睨みつけた。

「あなたがやったの……？！」

感情のまま激しい口調で問いかける。

だけど、眼鏡の奥のその神経質そうな瞳が戸惑いの色を浮かべるのを見て、ほんの少し頭が冷えたのがわかった。

「――」

ひよろりと背の高い、私が渡り廊下でぶつかった男子生徒が、何かを言おうと口を開いた、その時だった。

「愛那ー！！」

聞き覚えのある声が、私がつてきた方角から。

振り返ると、そこには見覚えのある姿が二つ、走ってやってくる。

先ほど私の名前を呼んだ凜の姿と、もう一つ、最近おなじみのその大きな姿。
高橋君だった。

え。なに、この組み合わせ。どういっつながらり？

と現れた二人を目を丸くしていた見ていた私なんだけど。

少し息を切らした様子の高橋君が、怪我をした黒ネコさんを目にした表情をみて、反射的に、あ。やばいかも、とそう思った。

すう、と細められるその瞳。

顰められた眉、そして、その下の瞳は剣呑な光を宿して、私の脇に立ち尽くす男子生徒・・・確か、春日君だっと思う。に視線を移す。

「これは・・・おまえがやったのか？」

私がここに着いてまずそう思ったのと同じように、黒ネコさんの近くに立ち尽くす春日君に向かってそう問いかける。

さつき先生も言ってたけど、校舎裏ってあまり人が来ない場所だし、加えて春日くんってちよつと何を考えているかわからないような雰囲気を纏った男子生徒だった。どう見ても動物をかわいがる印象なんて、あんまりなくて。だから、高橋君がそう思ったのは、割と自然な流れだったんじゃないかなと思うんだけど。

その呻るような低い声音に、びっくりと春日君の肩がはねた。
こ、こわい。これは怖い。

唯でさえ高校生離れした体格や顔立ちをしている高橋君が凄むと、

えらい迫力がある。怒りのオーラがびしびしと伝わってきて、応対していない私でさえ思わず後ずさってしまった。

その怒りの矛先である春日君といえば、顔色が真っ青になってしまっている。言葉も出ないくらい怯えてるみたいだ。

辺りに緊張感が走った。高橋君の隣に立っている凜も、固まっ

てしまったかのように立ち尽くしてる。
同じように春日君の横で固まっていた私は、けれど、瞳を眇めたまま、す、と一歩こちらに向かって足を踏み出した高橋君を見て我に返った。

あ、駄目！駄目駄目っ！

その後の行動は自分でも褒めてあげたいくらい素早かったと思う。凄みのある表情で春日君に近寄り、手を伸ばす——多分、胸ぐらを引き寄せようとしたんだと思う、高橋君の腕にしがみ付いた瞬間、高橋君の顔に驚きの色が走った。

「ストップ、高橋君！」

「井上……」

困惑した高橋君の声が降ってくる。瞳には怒りの気配が漂ってて、腕にしがみつく私を理解できないように見つめてくるけど、振り払う様子はない。

怒りに支配されていても、基本的に優しい所は変わってない。そのことに勇気付けられて、私は必死に高橋君を見上げた。

「暴力は駄目だよ、高橋君！」

「——」

高橋君の眉がいらだたしげに顰められる。納得できない、そんな気持ちで身体全体から伝わってきて、私は無我夢中で訴えた。

「駄目！高橋君柔道部でしょ！」

我を忘れて、こんなどう見ても文科系な男の子ぶん投げでもしたらどうなるか。

大怪我でもして問題にでもなったら、高橋君だけじゃない、下手したら柔道部としての活動にも支障がでるかもしれない。大会に出

るの禁止、とか。

そんなことにでもなったら、きっと高橋君後悔する。

そんな想いを込めて高橋君を見つめていると、徐々に、高橋君の腕から力が抜けていったのがしがみ付いた腕から感じられてほっと胸を撫で下ろした。

だけど、終ったわけじゃなかった。

高橋君は目の前の春日君を睨み付けたままで、怒りを押し隠す様子がありありと伝わってくる。そして、目の前の春日君は左腕で自分の身体を抱きしめる形で固まってしまつてて。

—— まだまだ緊張感を孕んだこの雰囲気破ったのは、本日何回目かの能天気な声、だった。

「おーお前らなにしてんだー」

鈴木さんたちがいた方向から、先生が場にそぐわないゆつくりとした足取りでこちらに向かってやってくる。今日で何回この声を聞いただろう。条件反射的にぎくりと身体を強張らせてしまう。

うわあ、また嫌なタイミングでやってきた！

先生はのんびりとした様子で私たちを見渡し、その視線が私と高橋君を捕らえると、何故だかにやあ、と嫌な予感満載な笑顔を浮かべた。

な、なに。身構える私に向かって先生が言う。

「おー、暑苦しくてうらやましいなあ、お前ら」

「・・・は？」

「・・・違います、先生」

意味がわからなくて問い返す私、そしていつもの穏やかな声が私のすぐ近くから否定の言葉を先生に返す。

その声の近さに自分がまだ高橋君の腕にしがみ付いたままだった

ことを思い出した。慌てて高橋君の腕をぱつと離す。

「う、ごめん！」

「いや・・・」

このやり取りって何回目だっけ。最近こんなことばっかだ、恥ずかしい！

「まったく、高橋は女に興味ないって顔してなかなかやるなあ、俺も彼女欲しい・・・井上！紹介してくれよ」

いやいや私の知り合いだとどれだけ歳の差離れてるんですか！というかりアルに女子高生でしょう、下手すりゃ教師生活危ないですよ先生！

なんてつつこみは私の口からは出なかった。というか、出せなかった、というのが正しい。

なんでって、緊張してたから。もう、口の中からっからだった。

先生は私たちにそんな軽口を叩きつつも、しっかりと状況を把握するため辺りを見渡してて——その目がまず、私たちから少し離れたところで立ち尽くす凜を通りすぎ、それから私と高橋君、その前に青ざめた顔色のひよろ長い春日君を捕らえ、訝しげに眉根が寄った。

それから私たちの近くにまだちょこんと座りこんでた黒ネコさんに視線が移り、その瞳に厳しさが宿った。

黒ネコさんは、厳しい視線を向けられたせいか、驚いて逃げようとした。でも後ろ足を怪我してるからびっこを引いちゃって・・・草むらの中に入り込もうとしているのに気づいて、慌てて私は黒ネコさんを抱き上げて捕まえる。

柔らかい毛並みに、そんな場合じゃないのにほっとした。

「その猫・・・、俺が探していた例の猫じゃないのか？」

「というか、怪我してるみたいだがどうした」

太い眉が跳ね上がり、先生が険しい表情でこちらに近寄ってくる。私は背を向けて黒ネコさんを隠した。

いつものほほんとしてる先生が怖い顔すると、それだけで威圧感を感じて怖い。

ぎゅ、と思わず黒ネコさんを抱きしめていると、す、と高橋君が背中を向いた私の前に立って防波堤になってくれた。

「高橋？」

「・・・なんでもありません」

不思議そうな先生の声と、硬い高橋の声が背後から聞こえる。顔は見えないけど、またあの凄みのある雰囲気になってるんじゃないかな。苦笑する先生の声が聞こえたから。

「なんでもないことないだろう、そんな顔して。というかまあ落ち着け。別に怒るわけじゃない。」

「・・・いったい何があったんだ？」

えらい勢いで、工藤と一緒に校舎裏に走りこんで来たと思ったら、井上がいないとわかったとたん走り去っていくし。なにかもめごとか？

「・・・どうもそのネコ怪我してるし、普通の雰囲気じゃなかったよ」
「たようだが」

先生の言葉に、後ろを向いていた私は軽く目を見開いた。思わず凜を振り返ると、顔の前に片手を「ごめんなさい」のポーズをした華奢な姿を見つけ、こっちこそ申し訳ない気分になった。

多分、鈴木さんに連行された私を見ていた凜は心配して、援護射撃として高橋君を連れて校舎裏にやってきてくれたんじゃないの

かな。

結果的に、平和的（？）な話し合いだったけど、状況だけみたら呼び出しされたようなものだし。

けど、そうやって高橋君と二人で校舎裏に着いたところで私は居ないし、そして先生の姿も見つけるし、状況を聞いて何かあったんじゃないかとこれまた心配してここまで駆けつけてきてくれたんだろ。

で、先生の目に留まってしまったわけだ。

何かあったんじゃないかと、先生は先生で様子を見るためにここに戻ってきて、今の状況に当たる、とそういうことだろう。

えっとえっと、どうしよう。これ、どうやって收拾つけたらいいんだろ。

焦った私は無意識に何かを探して視線を彷徨わせ・・・先ほど黒ネコさんが蹲ってた草むらの影に、あるものを見つけて目を見開いた。

え。あれって・・・！信じられなくて何度も見直すけど間違いない。

猫缶だ。しかも、食べ終わった後の。

なんでこんなところに・・・？

考えていると、背後から先生の声がまた聞こえた。

「春日。お前はさっきもここに居たな？その時はそのネコは居なかったようだが

・・・なにがあった。お前が、石を投げてそのネコに当てたのか？」

穏やかだけど、逃がさない鋭さをもった声音で先生が春日くんに訊いた。

状況的には、春日くんがしたように見える。なにしろ、先生自ら

が証人なんだもん、言い逃れなんてできないだろう。

私が首だけで春日君の方を向くと、眼鏡の奥の瞳が先生の方からす、と逸らされて、本当にたまたまだけれども、その視線の先にいた私と一瞬だけ目が合った。

その揺れる瞳に、何故だか縋り付かれるような心地を覚えて、心臓がざわりと騒がしくなる。

え。あれ。

なんだろう、何かが引つかかっている。

「春日？」

「そ・・・うです。俺が、石を、当てました」

すぐに視線は逸らされて、問い詰める先生に、認める言葉を吐き出す春日君。

何故だかざわめく胸をもてあましていた私は、無意識に抱きしめる力を強くしてしまったみたいで、うみやああ、と黒ネコさんが非難の鳴き声をあげた。

あわわ、ごめんごめん。慌てて腕の力を弱めたんだけど・・・私はふと疑問に思った。

そういえば、私がここに来た時、黒ネコさんは横になっていた。

そして、その前に春日君がしゃがみ込んで・・・黒ネコさんを、ちよつと覗き込む格好でいたワケで。

そう。

黒ネコさんは、逃げずに横になつてたんだ。

でも、さっき先生が来たときは？びつこを引きながらも、逃げ出そうと動いていたよね？

そう思い至った時、色々なことが脳裏に蘇った。

草むらの中に隠すように置いてあった猫缶。

そして、先生が来たときには、黒ネコさんは居なかったという言

葉。

そして――昨日から感じてた、視線の正体。

「あ……」

色々なことが繋がって、思わず私は声を洩らしてしまった。

――私、何か勘違いしてない？

そう考えたとき、私は思わず動いていた。

黒ネコさんの受難 5（後書き）

ここまで読んでいただいて、ありがとうございます。

カテコライズ、王道↓お約束に変えました。おこがましすぎる（汗）

黒ネコさんの受難 6

——春日くんが認める言葉を口にしたとたん、またまたこの場が剣呑な空気になってしまった。

発生源は言うまでもない、高橋君とそしてもう一人。

先生、だった。

「どういう理由があつて、そんなことをしたんだ」

押し殺した、低い声だった。

怒りの滲んだその声に、自分に向けられたわけでもないのに思わず身を竦ませてしまう。

「まさかとは思つが、動物を虐待して楽しんでたとかじゃないだろうな」

そんな私の目の前で、先生はいつもは陽気な光を浮かべている瞳に陰しさを宿して、春日君の方に近づいていく。

あ、あつ・・・！

さっきの高橋くんといい、がたいのいい体育会系の男の人が怒つて迫ると結構な迫力がある。青ざめて後ずさる春日君をみて、私は焦って叫んでしまった。

「ち、違つんですつ、わた、わたしが頼んだんです、先生！」

「・・・は？」

目を丸くする先生。私は、それには応えないで、するりと高橋君の背中をすりぬけ、庇うように春日君の前に立った。

目を大きく見開く高橋くんの姿を横目に捕らえつつ、驚いた表情の先生と対峙する。

「黒ネコさんが先生に捕まるのが嫌で、先生が来たら逃がしてもら

うように、春日くんに頼んでたんです！

それで石を投げたら、間違って黒ネコさんに石が当たっちゃったみたいなんです……！」

「……なんだと？」

先生が眉をしかめて私を見下ろす。その疑うような視線にたじろぎそうになつたけど、なんとか踏ん張った。

私が先生にそう言つたとたん、背後からはひゅっと息を呑む音がした。驚愕した気配を感じる。

ぼろを出しちゃあまずい……！と、焦った私はくるりと春日くんを振り返った。

そして、両手で抱えたままの黒ネコさんを、そつと春日君の顔の前に差し出す。

「そうだよね？春日君」

内心どきどきしながら、そうやって、黒ネコさんの反応を確かめようとした私の目論見は成功した。

黒ネコさんがみゃあお、と春日君に向かって甘えるように鳴いたんだ。

ああ、やつぱり。

戸惑つた春日くんの様子が伝わってくるけど、私は黒ネコさんを胸にもう一度抱え込み、ずずいと春日くんの目の前に迫った。

「そうだよね！ね！」

「う、うう、うん？」

その迫力に押されたように、春日君が頷いた。よっしゃ。私は満足げに笑顔を浮かべ、くるりともう一度呆然としてる面々を振り返る。

「というわけだよ、先生！」

自信満々に言い放つと、我に返つた様子の先生はぱちぱちと大きく瞬きを繰り返し——疲れたように、はあため息をついて、片手を頭にやった。

「・・・そうか、ならこの騒ぎはなんだんだったんだ？ただの内輪揉めか？」

井上と工藤以外、えらくクラスがばらばらみたいだがお前らどういつつながらなんだ？」

「そ、それは・・・っ」

う、そこまでは考えていなかった・・・！

私は一瞬言葉に詰まったけど、急に閃いて勢い込んで叫んだ。

「わ、私たち、黒ネコさんを取り囲む会のメンバーなんです！」

うっ、何も言わないで。無理があるのは百も承知。

しかも何『黒ネコさんを取り囲む会』って、ネーミングセンスもあつたもんじゃない。

でも私はとにかく必死だったんだ。

「・・・はあ？」

当然だけど先生は面食らった。思いもかけない言葉を聞いたという表情の先生に向かって、私は春日君の腕を黒ネコさんを抱いたまま掴んで叫ぶ。

「で、黒ネコさんが怪我しちゃったから、どっちが病院まで連れて行くかで揉めてたんです！」

た、高橋君と春日君が超のつく猫好きで！もう、二人とも自分が抱っこするって、喧嘩になっちゃって！」

ねっ、と春日君を見つめると、勢いに吞まれたように彼は頷いた。ほっとした私は高橋君に視線を移して——とたん、う、と息を詰めてしまう。

ものすごく鋭い目つきをしていらっしやる。

いつも以上に眉をしかめ、迫力のある表情をした高橋君と私の目が合った。

なんというか、ものっすごい機嫌が悪い。

そりゃそうか、猫好きって高橋君のキャラに合わないし——と

いう理由じゃないよね、もちろん。

どうして私が春日君を庇ってるのか意味がわからないのだろう。下手をすると、私が裏切ったと思われるかもしれない。

そう思いついたとたん、ずきりと胸が痛んだ。

いつも怖い顔だけれども、こんなに怖いと思ったのは初めてだった。私はごくりと唾を呑み込んだ。

そして、じつと瞼に力を込めて、高橋君の顔を見つめ返す。

——お願い高橋君、後でちゃんと説明するから、話を合わせてそんな願いを込めて必死に高橋君を見つめていると、ふ、と高橋君の目が眇められた。

それから、ふう、と何かをあきらめたようなため息を一つ。

「・・・その通り、です。」

非常に不本意そうに、高橋君が肯定の言葉を吐き出した。

へえ、と先生が面白そうに片眉を上げた。

「高橋、本当に猫の取り合いで喧嘩になりそうだったのか？」

お前がそんなに猫好きだとは知らなかったな」

うわ、先生、人が悪い！絶対違うとわかってるのに、にやにや笑いながらそんなことをいうものだから、高橋君の眉と眉がひつつきそうなくらい眉間に皺が寄り、むちゃくちゃ人相の悪い顔になっている。

その瞳が、挑戦的な光を宿して先生を見た。

「そうです、俺、猫が好きなんです。

何か問題ありますか」

またあの芯のある声が、そんな潔いことを言い放つ。うわ、高橋くんらしい、うじうじするより男らしく認めるほうを選んだらしい。ぶ、武士だ・・・！

私が言わせたようなものなんだけど、思わず笑いがこみ上げてきてしまつて慌てて私は堪えた。

でも、先生は遠慮がなかった。
くつくつく、とその肩がゆれて、大きく笑いだす。

「そ、そうか。なら、俺の出番はないな？生徒同士の揉め事は、生徒で解決してくれ」

と言いながらも苦しそうに身体を折り曲げて笑ってる。高橋君はその前で慥然とした表情を浮かべていた。うう、先生いい加減やめて！高橋君がむっちゃ機嫌悪いよ！

それからたつぶり数分間大笑いした後で、先生はふう、と心地ついたように息を吐いた後で言った。

「と、いう理由なら俺はもう行くぞ。早くその猫、病院に連れて行ってやれ。」

それから・・・わかつてると思うが、ここにはもう戻してくるなよ？でないと、俺はその猫を追い出さないとならんからな。というわけで、『黒ネコさんを取り囲む会』は解散だ。いいな？」

最後は、からかうような声音ながらも真面目にそう締めくくって、先生は軽く片手を挙げて去っていった。

よ、良かった・・・！胸を撫で下ろす私の耳に、ものすごく機嫌の悪い声が入ってきた。

「おい・・・いったいどういうことなんだ」

「愛那ー？」

先生の姿が見えなくなったとたん、ぱたぱたと凜はこちらに走り寄ってきて、高橋君はというとむっとりとまだ眉を顰めてそう問いかけてくる。

「あははは・・・ええつと」

私はどう答えようか考えながら、ちらりと背後に立つ春日くんに視線を向けた。

とたん、ぱつちりと視線が合ってびっくりする。すぐにふいつて目を逸らされちゃったけど。

春日くんはなんだか、複雑そうな表情をしていた。

「・・・どうして」

掠れた、小さな声が春日君から漏れた。

「・・・どうして、僕を、庇ったんだ？」

ひび割れた唇が、言葉を紡ぐ。視線は斜め前に伏せられたままで。「僕が、その猫に怪我をさせたって、わかってるんだろう？」

「――」

自嘲の笑みが、春日君の頬にに浮かんだ。片方の唇の端を引き上げて。

その言葉を訊いたとたん、すう、と高橋君が目を細め、今日何回目かわからない怒りの気配が立ち上るがわかった。

私は、その鋭く釣りあがった瞳と視線を合わせて――とどまってももらえるように眼差して訴える。

怒りを含んだ瞳が、それでも不承不承ながらも、最後にはまたこの場を私に譲ってくれる。

「うん、そうなんだろうね・・・でも」

一度言葉を切り、私は春日くんを見上げた。

「さっきも言ったけど、それって、わざとじゃないよね？」

「――・・・」

断言すると、細い瞳が一瞬だけはつとしたように見開かれたのがわかった。傍目にはわからない程度になんだけれども。

「愛那？　どういうこと？」

凜が不思議そうに私の傍に近寄ってくる。黒目勝ちの綺麗な眼差しを向けられて、私は軽く肩をすくめてみせた。

「・・・言葉通り、だよ。」

凜も知ってるでしょ？先生が黒ネコさんを追い出そうとしていたこと。

さっき、私が先生に言ってたことは、多分ほんのことだと思ってるんだ。

——春日君は、黒ネコさんを逃がそうとしてくれて・・・投げた石がたまたま、黒ネコさんの後ろ足に、当たったんじゃないのかな？」

そこまで話して春日君を見上げたけど、春日君は視線を逸らしたまま、だった。思わず苦笑が零れてしまう。

それとは別に私は高橋君からの視線も、横から感じていた。

きつともみたく、きゅつと眉が寄って私を見ているんだろうなあ。

そんなことを考えたら、ふつとなんだか和んでしまった。

私は先ほど見つけた猫缶が置いてある草むらまで歩いて行く。

しゃがみこむと、黒ネコさんがじたばたと暴れたので、ついでにそつと地面に下ろしてあげる。

ごろごろと喉を鳴らしながら黒ネコさんが猫缶の残りに鼻先を突っ込むのに、思わず笑みが浮かんた。

「それ・・・」

凜が背後で呟く声が聞こえる。

私は、その声には答えずに、もう一つ傍に転がった、空の猫缶をひょいと手にとって春日君の方に向けた。

「——これ黒ネコさんにあげたの、春日君、だよな？」

目元を和らげて春日君に訊くけど、春日君はちらりと一度こちらに視線を向けただけでまたすぐに逸らしてしまった。

けど、その眼鏡の奥の細い瞳が一瞬揺らめいたのに私は気づいていた。

・・・うーん、話してくれる気は、ない、か。

私は肩を竦めて、戸惑ったようにこちらを見ている高橋くと凜

を見上げ、続けた。

先ほど見つけた、校舎と土の部分の境目、コンクリート部分周辺に集まってる小石を指差して話し出す。

「多分、春日君は黒ネコさんに猫缶をあげている間、あそこに座ってそれを見ていたんだと思う。」

草むらの中に置いていたのは、先生が来ても、黒ネコさんが居るってわからないようにしてくれてたんだと思うんだけど・・・」

小首を傾げて春日くんを見つめるけど、春日くんは何も反応しない。

私は頬を緩めた。

「木の奥の方まで行かなかったのは、黒ネコさんが最初、警戒して近づいて来なかったからだよね？」

視界の端で、高橋君が何かに思い当たったように、罰の悪い表情になったのがわかった。

うふふ、初めて黒ネコさんと対峙した時のこと思い出すね、高橋君？

「——で。」

運の悪いことに、黒ネコさんにごはんあげていた途中で、先生がこっちに来るの気づいたんじゃないのかな。

近寄っていても見つかったら怪しいし、それで仕方なく小石を投げて逃がそうとした石が、たまたま黒ネコさんに当たってしまった・・・そんなところかなあと思うんだけど——違う、春日くん？

「——・・・」

春日くんはまだ、俯いている。

でも、私はほとんど確信していた。

だって。私がここに着いたとき、春日君は、黒ネコさんの傍にしゃがみ込んでいたんだ。

最初私はそれが、黒ネコさんに危害を加えるためだったと思ったけど。そうじゃなかった。

きつと、思いがけず怪我をさせてしまった黒ネコさんを心配して、様子を見るためだった。

私は高橋くんに近づいて、伏せられたその顔を、あえて下から覗き込んでみた。

「ね、春日君・・・猫、好きでしょ？」

思い出すのは、黒ネコさんと一緒に居たときたび感じていた視線。

お世辞にも感じのいい視線とは言いがたかったんだけど。その視線は、きつとこの、背の高くて眼鏡を掛けた男の子からだ。

眼鏡の奥の瞳が、目が合ったとたんびっくりしたように見開かれるのを見て、私はくすり、と笑った。

意外と目が小さいな。こうやって見ると、愛嬌があるような。そんなことを考えていたら、今まで神経質そうだと思っていた印象が、ちよつと変わったような気がした。えつと、うん。なんだか、とつつきにくそうな感じではあるんだけど、実は春日くんって感情を表に出すのが苦手な、普通の男の子なんじゃなかるうか。猫好きの。

そして、それを裏付けてくれたのが、愛らしい我が子猫ちゃんだった。

「・・・何を」

ふ、と私から視線を引き剥がし、馬鹿にするような口調で春日くんは否定の言葉を放ったんだけど。

するり、とその春日くんの足に頭を摺り寄せる小さな黒い塊が、それを台無しにしてしまったんだ。

怪我した後ろ足は庇うように立ちながら、甘えるように、みゃあ

お、と黒ネコさんが春日君に向かって鳴く。

どうみても、それが答えのように見えるよね？

「……！」

黒ネコさんに足元に絡みつかれた春日君の身体が強張った。

おそろおそろ黒ネコさんを見下ろして、その表情がちよっとだけ歪んだ。

唇が、微かに言葉を紡いだのがわかった。小さすぎて聞こえなかったけれど、それは「ごめんな……」だったように思う。

でも、それはほんとに一瞬のこと。

すぐに我に返ったように、いつもの無表情に戻ると。

ふいに身を翻して、この場を立ち去って行った。

誰も、止めたりしなかった。

小さな沈黙が落ちて、柔らかな風がふうわりと立ち尽くす私たちの間を通りすぎていった。

「——井上」

低い耳心地のいい声に名前を呼ばれて、私は高橋君を見上げた。

「……そろそろ、そいつを病院に連れて行ってやろう」

「良かったねえ、黒ネコさん、なんともなくって」

学校近くの獣医さんへと黒ネコさんを連れていった、帰り道。

私と凜と高橋君は駅の方へと向かって歩いていった。

黒ネコさんは私の腕の中だ。その小さな後ろ足には、白い包帯が巻かれている。

「うん・・・ほんとにね」

にこにこ笑う凜に向かって、私も笑顔を返す。それから隣に立つ大きな姿に視線を移した。

「というか、ごめんね、高橋君。かばん、持たしちゃって。重くない？大丈夫？」

「・・・平気だ」

黒ネコさんを抱っこする私のために、高橋君は私の鞆を持ってくれているけど・・・申し訳なくて仕方がない。だって、今日英語の宿題があるから辞典が入ってるんだよ！絶対重いよ。

「暑くなってきたねえ」

空を眩しそうに手をかざしながらの凜の言葉に、私はこくり、と頷いた。

時刻はもう、4時過ぎ。夏へと向かうこの季節、少しずつ日が長くなってきたのがわかる。

日差しも、柔らかい春の日差しからじりじりと肌を焼くものへと変わってきている。

もう、5月も終わり。

明日から、そう言えば制服も夏服に変わる。

6月に入ると、一気に夏ムードが高まるよね。体育祭も近いし。

「それにしても・・・」

「え？」

駅へと向かう道路脇の歩道を歩いている途中だった。凜が、思い出し笑いをくすくすとし始めたのは。

「『黒ネコさんを取り囲む会』、一瞬で終わっちゃって残念だね？」

「・・・！！」

悪戯っぽい瞳を向けられて、私の顔は大いに引きつってしまった。ぎゃあ、なんてことを持ち出すのよ！凜さん！ちろり、と隣に目を向けると、慄然とした瞳とかち合ってしまった。

「同じメンバー、二度と集まらないだろうねえ。惜しいことしたな、写真でも取っとけばよかったかな？」

「り、りん〜！」

勘弁してください、高橋君の眉間にまた皺が寄ってるから。

ひとしきりくすくす笑ったあとで、凜はまだ笑みの残る瞳で、私を見下ろした。綺麗な二重の瞳。

「それにしても、あの人・・・春日君、だったつけ。猫が好きな人だとは思わなかったなあ。

愛那、よく気づいたねえ。私、春日君が黒ネコさんをいじめてたのかと思ったよ？」

「あゝ・・・うん、実は私も最初そう思った。」

私は、腕の中の黒ネコさんを見下ろした。ぴくぴくと耳を小刻みに動かして黒ネコさんは、身体を丸めてリラックスモードだ。その愛らしさについつい頬が緩んでしまう。

「でもこんなかわいい黒ネコさんをいじめられる人なんてそうそういないよ〜〜〜！」

心のままに抱きしめたい欲求を堪えて、軽く自分の頬をその小さな頭に寄せてすりすりすると、凜が苦笑していた。

私は顔上げる。

「——ほんとね、偶然、気づいただけなんだけどね。

猫缶が、草むらにあったのが目に入ったし」

「・・・それをえさにそいつを呼び寄せたとは、考えなかったのか？」

ふいに、静かな声に訊ねられて、私は目を見開いた。思わずその言葉を発した隣の高橋君を見上げると、まっすぐな目と出会って瞬く。

「そいつを傷つけるために敢えてえさをあそこに置いていた・・・そして、怪我をさせた。そう考えることだって、できるだろう？」

・・・井上は、そうは思わなかったか？」

「――」

私はちよつとだけ黙って、高橋君の言葉の意味を考えた。

高橋君とは逆の隣で私達を見守る凜が息を呑んだのが気配でわかった。

「・・・実は、ちよつとだけ考えた、よ？」

ぺろりと舌を出して高橋君を見上げると、高橋君は私の言葉が意外だったのか、軽く目を見張った。

私は、ぽりぽりと頬を？く。

「でも、さ。なんだか、困ったような顔していたんだもん、春日君」
私が、黒ネコさんのところに駆け寄ったとき。一瞬だったけど、どこか戸惑ったような、そんな印象の表情を浮かべたんだ。

少なくとも黒ネコさんを傷つけようとする意思は、そこには感じられなかった。

そう私が言うのと、高橋君はちよつと黙り込んだ。唇を閉ざして、じつと私を見下ろしてくる。

疑ってるのかな？

私は、まっすぐその瞳を見つめ返した。

「――確かに、逃がすためだとはいえ、石を投げるのはやりすぎかなあとも、思ったよ？」

でも、春日君ってちよつと、人付き合い苦手みたいな印象があったし・・・感覚が、人とずれてる処が、あるんじゃないかな？とも思っただよね。

だって、知ってた？黒ネコさんに投げようとしていた石が、ぜーんぶ、ちびっこかったの」

そう、敢えて選んだかのように、集められてた石は小さかった。本当に危害を加えようとしていたんだったら、そんな面倒くさいことしない。

それに、第一そんなまどろっこしいことしないで、他に方法なんていくらでもあるわけで。

そこまで言い終わると、突然凜がするり、と私の腕に自分の腕を絡めてきた。

「私、愛那のそういう処好きだなあ」

うふふ、とかわいく笑いながらそんな告白をされて、私は照れてしまう。

いやいやなに、いきなり。嬉しいけどそんなたいそうなことではないし。

とか思っていると、逆隣から、大きく息をつく音がしてそっちに目をやって、私はちよつと驚いてしまった。

なんだか、穏やかな瞳をした高橋君がそこに居たんだ。

黒ネコさんに向けられているのは何度か見たことはある。でも、自分に向けられるのは初めてだった。

「印象を覆して、判断することは簡単なようで難しい。

——井上は、ちゃんと人を見てるんだな」

なんだかぼーつとしている間にそんな言葉も頭に入ってきて、一気に顔が熱くなるのがわかった。

ぎゃ、なになに、なんか照れるんですけど。

「え、えーっと、」

言葉を搜すけど、心臓が落ち着かなくなつて何も出てこない。あら？とか、私に腕を絡めた凜がそんな私を見下ろして、ちよつと意味ありげな笑みを浮かべたのがわかったけど、ちよ、違うから。何か勘違いしてるから、絶対。

おかげでまたまた黒ネコさんを抱きしめる腕の力を込めてしまつて、黒ネコさんから大顰蹙を買つてしまった。慌てて宥めようとしても無理で、しょうがなく黒ネコさんは高橋くんの腕の中へと移つた・・・とほほ。

——とこんな感じで話も終わつたところで丁度、駅前に着いた私達なんだけど。

大きな問題がひとつ、残っていた。

示し合わせたようになんとなく、そのまま私達は時計台前の噴水の所までやってくる。

ちよつとした憩いの場になつてゐるここは、他にもちらほらと制服姿の生徒たちとか、犬の散歩に連れてきている人の姿が見える。

これから、どうしよう。

高橋君の腕の中には、黒ネコさんがいる。

でも、もう学校には戻れないし。

困惑して高橋君を見上げると、ちようど高橋君も私に視線を向けたところだった。

お互いどうしようかと目線会議を繰り広げていると、

「——あ、私、コンビにで飲み物買つてくるねー」

そんな私達をみて、どう思ったのか。凜がそう言つて、ぱつと身を翻して駅内にあるコンビニへと走つていった。

え。ちよ、ちよつと。

思わず焦つて呼び止めようとしたんだけど、凜の華奢な後ろ姿はすでに遠ざかつてしまつていた。

伸ばした私の手がむなし。

そんなやり取りを見ていた高橋君は、煉瓦で囲われた花壇の近くにあるベンチを指差す。

「座るか」

「・・・そうだね」

そうして、二人並んでベンチに腰掛ける。

黒ネコさんは、抱っこされるのに飽きてきていたのか、私と高橋君の間にすんとん、と降りてきた。

みゃあおん、と見つめる私に向かって甘えるように鳴く。

「黒ネコさん、これから、どうしようか」

私はその小さな頭を撫ぜながら、そう黒ネコさんに訊ねたけど、子猫ちゃんはごろごろと喉を鳴らすばかり。

ほんとに、これからどうしよう。

「うち、ケーキ屋だしなあ・・・」

途方に暮れてそう呟く。
けど。

野良猫だった子猫ちゃんに、餌をあげて、懐かせてしまったのは、私達の責任だ。

このまま、どこかに捨てることなんて、できない。
しょうがない。まずは兄ちゃんに泣きついて、それから父さん達に拝み倒すしかないか・・・！兄ちゃんが味方に付いてくれたらどうにかなりそう。

と、私が決意を込めて、高橋君の方を向いたときだった。

ひよい、と高橋君が、黒ネコさんをその大きな手で抱き上げた。

自分の目線と合わせて向き合う、というなんとも微笑ましい姿で、

高橋君は言った。

「——何もないとこだが、うちに来るか？」

「ええ?!」

思わず私は大声を上げてしまった。

だ、だってだって。

「だ、大丈夫なの、高橋君？」

「・・・まあ、大丈夫、だろう」

高橋君にしては齒切れの悪い言葉に不安に思っで見上げると、ひょいっと高橋君は肩を竦めた。

黒ネコさんを膝の上に下ろした後で、言う。

「いや、本当に大丈夫だ。・・・ただ、貸しが一つ増えるだけだ」

「・・・貸し？」

聞き返すと、高橋君はああ、と頷いてから大きくため息をつく。

「うちは共働きだからな。多分、母親は反対するだろうが・・・姉貴二人に協力してもらえば、大丈夫だ。

気は進まないが・・・仕方ない」

私はちよつと、目を見開いた。

「お姉さんが、居るんだ？」

「ああ。煩いのが二人。歳は離れてるけどな。

揃うと、手に負えない」

心底げんなりとしたその口調に、私は思わず噴出してしまった。

思わず私も兄ちゃんのことを思い出してしまったんだ。うん、末っ子って、ある意味上の子の言い様にされるとこあるもんね。歳が離れてると余計に。

うちも兄ちゃんは優しい方だと思うけど、怒ると怖いし、逆らえないもん。

なんだか親近感が湧いてくすくすと笑っていると、高橋君からいつものあの眉を寄せた鋭い目つきが飛んできた。けど、とまらなかった。

だって、なんだか想像すると楽しい。

眉間に皺を寄せてた表情で、お姉さん達にからかわれている高橋君を想像すると、笑える。なんだかかわいいよね？

ああ、そうか。でも、それで納得した。

「そっかーそれであ」

「・・・何が」

無然とした表情の、その精悍な顔立ちを見上げる。

「高橋君って、見かけは怖いのに、素振りがなんだか紳士なんだもん。ちょっと不思議だったんだけど、お姉さんが居るからなんだね」

近くで見ると意外と大きな高橋君の瞳が、驚きの色を含んで一瞬、見開かれた気がした。

言葉や顔つきは怖かったりするのに、支えてくれた腕とか、いつも丁寧で、優しかった。

きつと、お姉さんに叩き込まれたんじゃないかな。と思った。歳が離れてるって言うてたし。

「・・・怖いは余計だ」

ふいと顔を背けるその仕草に、笑いを誘われる。ちょっとだけ目元が赤いように見えるのはきつと気のせいじゃない。

「前にも言っただけど、怖いと思われたくないんだったらその眉間の皺をどうにかしなくっちゃ」

くすくすと笑いながら、私は自分の指先を、高橋君の顔に向かって伸ばした。

今度は届くか？という所で、また大きな手のひらが私の手首を掴む。

「・・・だから、大きなお世話だ、と前にも言わなかったか？」

そつと手首を下ろされる。でも、全然痛くないんだ。前もそうだったけど、高橋君って人に触れるとき、ものすごく丁寧な手つきになる。まるですごく、大切なものを扱うように、優しい手つき。

呆れたような高橋君の表情に、けれど自然と私の頬は緩んでしまった。

ふふつと笑うと、高橋君の目がふつと一瞬、細められて。そのまままっすぐ、見つめられる。

男らしい太い眉、その下のきりつとした瞳が、私を映し出してる。そのことを意識したとたん、どきん、と心臓が音をたてた。

わ。

なんだか、瞳の奥まで覗き込まれるような、そんな感覚がした。手首はそつと放されたけど、視線が外れることはなくて。

え、えっと。な、なんででしょう。

目を、逸らせない。

あ。左目の目尻の下に、よく見ると薄いけど小さくホクロがあるんだ……。そんなことにも気づくくらい、しばらく見つめ合っていた。

硬直した私の時間を動かしたのは、高橋君の膝の上にちょこんと座っていた黒ネコさんだった。

僕もいるんだよお、構ってよお、と言わんばかりに、鳴きながら小さな身体を伸ばして自己主張をする黒ネコさんの姿にはつと我に返る。

「ご、ごめんごめん黒ネコさん。どうしたの？お腹すいた？」

黒ネコさんは、高橋君の大きな膝の上で立ち上がって、みゃあお、と甘えるように高橋君のブレザーに顔を摺り寄せてた。

私は、慌てて黒ネコさんに話しかけたけど、どうしてだろう。上を向いて、高橋君の顔を見直すことができなかった。

「おまたせー！」

そうこうしているうちに凜も戻ってきた。手に缶コーヒーとジュースを持って。

「あ、ありがとう、凜」

私は内心大きくほつとして、戻ってきた凜にお礼を言い、缶を受け取った。

さすが、凜。私の好きな、オレンジジュースだった。

「高橋君は缶コーヒーでよかったかな？ごめんね、わからなくて適当に買って来ちゃった」

「……構わない」

芯のある声が私の隣から返事をする。意識が、左側に集中するの
がわかった。

ちろり、と隣をなんとなくこそそとした気分で盗み見ると・・・
凜から缶コーヒーを受け取った高橋君と、ばかりと、視線がかち合
ってしまった。

内心思いつきり焦ってあわあわしていると。

ふ、と高橋君の目元が、ちよつと緩んだ。

いつも鋭いその瞳が、穏やかな曲線を描くのを目にして、私は一
瞬呆然としてしまった。

それは間違いなく、私に向けられた、笑顔。だった。

うわ。うわあ・・・！

それは私にとってはものすごい破壊力だった。だって、眉間に皺、
がスタンダードな表情の高橋君、だったから。

それは、一瞬のことで、すぐに視線は移されてしまったんだけれ
ども。

ことりと、私の心のどこかが、動いた気がした。

——それから、高橋君の膝の上にいる黒ネコさんを抱き上げて、
凜と高橋君と何か会話を交わしていたけど、私の耳にはぜんぜん入
ってこなかったんだ。

それはほんの少し何かが変わった、夏の始まりの日の、出来事。

黒ネコさんの受難 7 (後書き)

ここまで読んでいただいて、ありがとうございますm
m ()

精神安定剤？ 前 1

翌日のことだった。

空は快晴、今日から制服も夏服に変わって、半そでになったむき出しの肌に触れる風が気持ちがいい。

衣替えのあとの学校は、なんだかいつもとがらりと印象が変わって面白い。

4時間目が終って、移動教室から帰る途中。私はそんな、夏服に身を包んだ制服の群れに混じって、友達と一緒に一階の渡り廊下を歩いていた。

ちなみに女子の夏服は、白の半そでのブラウスに襟元には赤の小さなりボンを着けるんだ。ブラウスの裾のところにちよつと特徴があつて、ボタンを止めるラインのところだけが少し短く、そこから裾が小さく左右に広がって、逆三角形になつてる。

スカートは、濃いグレーと白のラインが入ったプリーツスカート。男子は同じく白のブラウスに赤のネクタイ、そしてグレーのズボン。

夏服は、なんというか初夏の爽やかさを運んできて、一気に学校全体を夏の雰囲気に変えてしまった。

あれ。

渡り廊下を歩く途中。廊下の柱の隅に隠れるようにして立っていた、背がひよる長い男子生徒の姿を見つけて私はふと足を止めた。

凜が気づいて、振り返る。

「愛那？」

「あ。ごめん、凜。先に戻つていてくれる？」

「え？」

と首を傾げた凜だったけれど、私の視線の先を辿って納得したように、頷いた。

「愛那ちゃん？」

と不思議そうなクラスメイトを引き連れて、凜は私の意を汲んで先に教室へと戻っていつてくれる。

振り返るクラスメイトに軽く手を振って校舎の中に入るのを見送ってから、私はゆっくりとその男子生徒の下へと、歩いていった。

「こんにちは、春日君」

眼鏡姿の男の子に、声をかける。こちらを見ていたはずの春日くんは、けれどふいと私の視線を避けてしまった。

思わず苦笑が零れてしまう。

昼休みの渡り廊下は、食堂や購買へ行く生徒達で、割と人が多い。すれ違う白色の制服に身を包んだ生徒達が、興味をそえられるようにちらちらとこちらを見ていた。

「・・・私に、何か用事だった？」

その視線を感じながら、私は春日君を見上げる。背の高い春日くんは、首をかなり上向けないと視線が合わない。

わざわざこんなところで立っている理由がそれしか考えられなかったんだけど、私の勘は当たったみたいだ。

春日君は、視線を逸らしたまま、ぽつりと、言った。

「・・・怪我は」

「——え？」

「怪我は、どうだったんだ」

小さな声だったけど、ちゃんと聞こえた。私はちよつとぱちくり、と目を瞬かせてから、くす、と頬を緩めた。

端的だったけど、それはもちろん黒ネコさんのことに決まってる。

「うん、大丈夫だったよ。そんなに酷い怪我じゃなかったから、す

ぐ治るって」

安心させるようにそう言つと、なんとなくほっとした雰囲氣が伝わってきた。

私は更に、続ける。

「あと、黒ネコさんは高橋君のところで飼ってくれることになったんで、衣食住の確保もできました。

だから、安心して？」

そこまで訊くと、春日君はふうとため息をついた。

「・・・そうか」

小さく頷くと、ふ、とその眼鏡の奥の細い瞳が私に向けられた。

何かを言いたそうなその色を読み取って、私は軽く首を傾げることで、待つ意思表示を示す。

ほんの少しの沈黙の後。

春日君は、口を開いた。

「・・・飼い猫が、死んだんだ」

私は、目を見開いた。

春日君はそれ以上説明しなかった。けれど、私にはどういうことがわかった。

——どうして春日君が、猫缶を持っていたのか、そしてそれをどうして黒ネコさんにあげていたのか。

色んなことが繋がって、多分痛ましい表情になってた私を見下ろして、ふ、と春日君がほんの少し口元を苦笑の形に刻んだ。

それからまたいつもの無表情に戻って。軽く首を振ると、すいと私の傍らを通り過ぎて行く。

呆然としていた私は、はっと我に返って振り返った。

縦にひよろりと細長い、春日君の後ろ姿に向かつて叫ぶ。

「いつか本当に、『黒ネコさんを取り囲む会』開催しよう！」

大声で叫ぶと、周りの生徒達が何事かと驚いた顔で私を見てきたけど、私は気にしなかった。

春日君もちよつとびつくりした顔で私を振り返った。

「・・・変な女」

苦笑交じりにそんな言葉を返しながら、またふいと身を翻す。
慌てて私は叫んだ。

「絶対だよ！」

今度は、春日君は振り向いてはくれなかった。けど、軽く左手が上がったのがわかった。

他の生徒達と混じって校舎の中に消えていく、その後姿を私はしばらく、じつと見送っていた。

なんだか胸が、いっぱいだった。

「——井上？」

と、立ち尽くす私の後ろから、ふいに声を掛けられた。一本筋が通った、最近良く聞くようになったその声に、とくん、と心臓が一つ大きく動いた。

「・・・高橋君・・・」

振り返ると。購買でお昼ご飯を買って来たらしい、がっしりした右腕に袋を釣り下げた高橋君の姿があった。

夏服に身を包むと、薄手になった分部活で鍛えた、その筋肉質な体つきがさらに強調される感じがする。

「——こんにちは。おひるごはん、またパンなんだ？」

私はちよつと笑みを浮かべてそう言った。

自分では普通にしていたつもりだったんだけど、それは少し情けない顔になってたかもしれない。私の表情を見た高橋君がふつと、硬い、真面目な顔に変わってしまったから。

「どうかしたか？」

いつものように眉間に皺が寄ってるものの、普段はきつい眼光が

気遣うような色を滲ませて私を見下ろしてくる。

それがわかったから、なんだかふにやりと心が緩んで、今度は自分でもわかるくらい眉の下がった情けない顔になってしまった。

「・・・春日君ね、飼い猫さん、亡くなってしまったんだって。」

そう言つと、高橋君の眉間の皺が深くなる。

「きつと、黒ネコさんにその飼い猫さんの面影、重ねてたんじゃないかなあ」

なんだか胸が、切なくなってしまったんだ。

どんな気持ちで、校舎裏でごはんをあげていた私達を見下ろしていただろう。

可愛がっていた飼い猫が死んじゃって・・・そんな時校舎裏で子猫ちゃんと和む私達を見つけて。

どうしても、黒ネコさんに触れたいと思わずに居られなかったんじゃないかな・・・

すれ違う他の生徒達が、さっきの春日君と居るときよりもずっと興味津々な視線を私達に向けてきていた。

そりゃそうか、泣きそうな女子生徒と180センチはある長身＆大きな身体つきの男子生徒がふたり、立ち止まってなんだか意味ありげなシチュエーションを繰り広げているんだもの、私だって逆の立場だったら見てしまう。

うつ、ごめん、高橋君、恥ずかしいよね。

というか、情けないなあ、私。

「——ごめんね、高橋君」

気分を切り替えようと、もう一度高橋君を見上げた時だった。

ぽん、ぽん、と宥めるように、大きな手のひらが私の頭を優しく叩く。

え、え、え。

狼狽する私と出会った瞳は、昨日も見た、穏やかで優しいものだった。

うつ。

私は自分の頭を押さえて高橋君を見上げながら後ずさってしまっただ、だってだっていきなりだしびっくりだしなんだか高橋君の眼がはずかしいしっ。

周囲の目が、明らかに生ぬるい視線に変わったのを感じて顔が赤くなった。

でも高橋君はごくごく普通の様子で、突然飛びずさった私を不審そうに見ている。

えっと、うん、これって、一応、慰めて、くれたんだよね？

ペットによしよしとしてあげるのと同レベルで・・・！

「——気持ちわかるが、あまり思い込まない方がいい。アイツも、それを望んではいないだろう」

「う、う、うんっ、ありがとう、高橋君っ」

心臓が騒がしくって、思わず声が上ずってしまった。

そんな私をふ、と目を細めて見つめると。じゃあな、と右手を上げて高橋君は渡り廊下を歩いて、好奇の視線を向ける生徒達と一緒に校舎の中に入って行く。

私はその間ずっと頭に手を乗せたままの状態で固まっていた。

だ、だってびっくりしたよ。いきなりだったし、まさかまさかあの高橋君がそんな、あ、頭ぼんぼん・・・っ——ぎゃあ、恥ずかしい・・・っ。と、ともかくそんなことすると思わないじゃない？！

・・・なんだか、兄ちゃんみたいだった。あの目とか、仕草とか、最後にふっと目を細めて私を見下ろすところとか・・・

そんなことを考えながら頬を覆うと、見事に熱を持っている。
あーびっくりした。お、落ち着け私。こんなこと、滅多にないことなんだから、むしろ喜ばう。うん、今日はきつといいこと起こるよ。

と、なんとか自分の心を落ち着かせ、頬の熱が冷めてから、私はようやくその場を動き出したんだけど。

なんだかとても、嬉しいような、恥ずかしいような、そんな甘酸っぱい気持ちでいっぱいだった。

精神安定剤？ 前 2

頬の熱さを冷まして教室に帰ると、いつもと違う風景が目の前にあつて驚いた。

「お先に食べてるよ、井上さん」

お昼休み、私はいつも凜と一緒に、たまに他のクラスメイトの女の子たちと、机を並べてお弁当を食べてる。

今日はそこに、派手めな顔立ちの、きつさを感じさせる目元が印象的な女の子も混じっていた。

凜の横に机を並べて座り、私の姿を見つけると軽く手を挙げ、律儀にそんなことを断つてくる鈴木さんの姿に、そういえば、と私は昨日のことを思い出していた。

お友達よろしく、したんだった。いろんなことあつて、忘れてた。いつも鈴木さんの傍に居る二人も、凜と鈴木さんの席に机をくっつけて一緒にごはんを食べてる。

私の席は、お誕生席で凜の机の横に用意してくれていたもので、ありがたく私は席に座ると鞆からお弁当を取り出した。

うーん、なんだか他のクラスメイト達の視線を感じるぞ。

今までなかった珍しい組み合わせに、好奇心を含んだ視線がこちらとこちらに向けられてるのがわかる。

まあね、鈴木さんが氷室のファンだってことは割りと周知の事実だし。

で、どちらかという女子を敬遠しがちの氷室が、なんとなく私と話す機会が多いのも、きっと（不本意だけど）皆知ってること。そんな状況だから、皆も興味津々なんだろうなあ。

なんて考えながら、お弁当を箸でつついている時だった。

「——そういえばさ、井上さんって隣のクラスの高橋君と仲いいの？」

「……つつ」

妙に和やかに凜と談笑していた鈴木さんが、ふと何の前触れもなく私の方を向いて、そんなことを言い出すから。

ぶほ、と思わず口の中でもぐもぐしていた卵焼きさんを吹きそうになってしまった。

ていうか鈴木さん、昨日も思ったけどいつつも直球だよつ。

「ま、愛那、大丈夫？」

凜が慌てて私にお茶の入ったコップを渡してくれる。

ありがたく受け取ってごくごくとお茶を飲み干せば、つりあがり気味の瞳をきらり、と光らせた鈴木さんと目が合った。

う、まずい。何がまずいって、鈴木さんが何かを期待してるってことだよ。

ほら、うずうずとした雰囲気か口元から伝わってくるし。

どうやら、聞きたくて聞きたくて堪らなかったのをずっと我慢して、タイミングを見計らっていたらしい。

しまった、女子ってこういう話大好物なんだよ……！私だって逆の立場だったら質問攻めしてるよ……！だってどういう接点？とかまず思っじゃない。

捕まった……！思わずじり、と椅子の上で後ずさる私に、鈴木さんは笑いかける。

「やっぱり知り合いなんだ？そうだよな、出なきゃあんな場面でいきなり現れたりしないよね。」

——昨日、井上さんが走って行ったあと、高橋君、工藤さんと一緒にすごい勢いで校舎裏に飛び込んできたんだよ。こーんな、すっごく怖い顔して。」

「そ、そうなんだ」

鈴木さんが自分の目尻を両方の人差し指で吊り上げて、『怖い顔を再現してくれた。

うん、そりゃあ怖かったでしょうね、高橋君ってば見かけはほんと、背は高いし逞しいし、その上顔立ちも優しさとは無縁と言っていていくらい男っぽくて鋭いんだもの。

心の中でだけそんなことを呟きつつ、私は敢えて下を向いて弁当のアスパラのベーコン巻きをつついていた。

もうこっちはお母さんやら昨日の凜の反応やらで懲りてるんだもん、変な反応返してネタを提供することない。

とか決意を固める私を置いて、鈴木さんといつも一緒にいる女の子たちもうんうんと頷きを返す。

「いつつも怖そうな雰囲気だけど、二割増しくらいに怖かったよねー」

「うん、なんかこう思わず千切っては投げ、くらいされるかと思っただよ私」

「あー、わかるわかる！すごい迫力だったよね」

「ええーつと・・・」

私は思わずぶすり、とさつま芋のレモン煮に箸を突き刺していた。

うん、気持ちわかるけど絶対そんなことはないと思うんだよ。

高橋君、女の子には手を挙げないと思う。

そんなことを考えながらさつま芋を突き刺す私の頭上で、会話は続いていた。

「ていうか、隣のクラスだからあんまり知らないけど、高橋君っていつも眉間に皺寄ってるよねえ。なんというか、近寄りがたいっていうの？話しづらい雰囲気あるよね」

「うん、話しかけても相手にされないイメージ」

・・・そんなことないよ、話しかけたら、高橋君はちゃんと最後まで人の話を聞いてくれるよ。

眉間に皺が寄ってるかもしれないけど、ちゃんと話終るまで、待っててくれる。

なんだかあんまり楽しい話運びじゃなくって、知らず、私の方が眉間に皺が寄ってしまったっていた。

だってなんだかむむむ・・・とした気持ちになっていたから。ぶすりぶすりと、さつま芋を突き刺してそんな気持ちを紛らわせていた私なんだけど、続く言葉に我慢できなくなってしまった。

「もうちょつと愛想が良かったらねえ」

あ。駄目だ。

私は、そこで思わず箸を机に置いて顔を上げていた。

さつま芋さんは哀れぐちゃぐちゃの刑だ。

驚いた表情をしているみんなに向かって、一気に喋る。

「違うよ、高橋君って確かに怖いし、眉間に皺がデフォルトだけど、ああ見えて実は優しいんだよ！

あんな怖い顔して甘いもの大好きでケーキ好きだし、愛読書（多分）ベリー・ボターだし！」

「・・・ベリー・ボター・・・」

鈴木さんが小さくそう呟いて。

それを合図にぷっとみんなが吹き出した。

え。あれ。

くすくすと凜が軽やかに笑い声を上げながら、目尻を下げて私を見る。

「そつかあ、高橋君って、甘いもの、好きなんだ？」

「ふあ、ファンタジー、読むんだ彼。似合わないー！」

鈴木さんの肩が震えている。

あれ。なんか私間違った・・・？

ひとしきり笑った後の皆の反応を見て私は自分の失言に気づいた。

だって、凜以外の鈴木さんたち三人、顔を見合わせて口元にすっごく嫌な感じの笑みを浮かべて私の方を見てくるから！っていうか凜もなんだか生温かい視線をこっちに寄越してるし・・・！

あ、あ、しまった、なんて学習能力ないんだ私、なんか嵌められたんじゃない、これ？

「ふうーん？」

「そうなんだあー。よく知ってるんだね。高橋君、隣のクラスなのに。そんな話す機会なんてあったっけ？」

「え、えとあのっ、違う、違うから。高橋君とは、黒ネコさんの縁で」

「黒ネコさん？」

必死になんとか言葉を言い募っていると、さらにきらりと鈴木さんの瞳が光った。

あ、あれ。なんだろ。なんか余計に要らないこと言った気がするよ・・・！私のばかり・・・！

「どんな縁か、聞かせてほしいなー」

「うん、ぜひとも」

にこにこと、妙に迫力のある笑顔で鈴木さん達が私に迫ってくる。そんな賑やかな昼休みを過ごしたおかげで、私達は更なるクラスメイトの注目を集めることになってしまった。

そんな最中、途中で教室に戻ってきた氷室が驚いた顔で私達を見つめていたのにも、気づいてしまって後で後悔した。だって、驚いた後はあいつ、すごい目つきで睨みつけてくるんだもの。

うつ・・・疲れる・・・！

精神安定剤？ 前 3

「で、どういふことか申し開きをしてもらおうか」

それからしばらくは氷室も大人しく、私と鈴木さんたちが仲良く？しているのを静観していたみたいんだけど、ついに我慢が切れたらしい。

次の日のお昼休み、昨日と同じく鈴木さんたちと一緒に昼ご飯を食べて、トイレに一人で来たところを氷室に捕まってしまった。ちよつと来い、と連れてこられたのは、廊下を奥に進んで人気の少ない理科準備室の前、だった。

一番奥には理科室があつて、理科準備室の手前には階段がある。「・・・なによ申し開きつて」

私は唇を尖らせて氷室を見上げながらそう返した。

「な・ん・で、井上があいつらと一緒にいるんだよ。何言われたんだよ」

見た目だけは甘くて、優しい顔立ちの氷室は腕組をしてえらそうにそんなことを言う。

うーん、やっぱりそれね。どう答えようかと一瞬迷ったんだけど、結局私はそのまま話すことにした。

「えつとね、鈴木さんに『友達になつて』と告白された」

「・・・はあ？」

「なんだっけ・・・『何も言わず井上さんに近づいてもフェアじゃないから、宣告することにしたの。』

氷室君に近づきたいから、私と友達になつてくれる？」——だつてさ」

「はあ?!なんだよそれ」

氷室は呆れたように目を見開いて、ついで不機嫌そうに眉を顰めた。

「最悪だな、わざわざそんなことのために井上を巻き込んだのか。井上、なんでそんなうっとおしいヤツに付き合ってやってるんだよ」

・・・あー、そうか、氷室サイドからみたら、そうなるかあ。

氷室の言葉に、うーんと私は腕組をして考え込む。

氷室は、一年の時からもってもてだった。ともすれば王子様みたいな容姿はものすごく目立っていたし、本人もそれをちゃんと自覚してる。

でも何が不幸って、そのきららしい外見とは裏腹に、氷室本人は意外と地味でそのくせ割りと抜け目ないところもある、まあいたって普通の男の子だってことだ。

外見がいい、って意外と大変なんだなあ、とは、氷室や凜を見てて私が思ったこと。

多分もう本人達は慣れちゃってるんだと思うけど、初め、私は凜と一緒にいると感じる視線の多さにびっくりした。どこに移動しても付きまとう、その注目度の高さに居心地の悪さを感じたものだ。本人は到ってのほほんとしていたけどね。

その立ち居振る舞い、一挙手一投足を常に観察されるうっとおしさ。

単純に、もてていいなあ、とは私は思えなかったんだよね。

そんな感じだから、氷室が自分のファンというか、女の子全般と距離を置いている気持ちはなんだかわかる気もしてたんだけど。

「・・・義理堅いなあって」

「あ？」

「義理堅いなあって、なんだか可愛く思えちゃったんだよね」

私は苦笑して氷室を見上げた。

だってさ。わざわざ普通、そんなこと人に言ってきたりしないよね？

動機が不純なんだもん、それで『友達になろう』とか言われたって、普通なら『失礼な！』と跳ね除けられたらおしまいだし。ただ黙って私に近づいて、それで氷室と話すチャンス掴むほうがよっぽど賢い。

でも、鈴木さんはそうしなかった。敢えて嘘をつかないで、私と友達になりたいと言ったんだ。

氷室が好きで、近づきたくて、でも黙って私に擦り寄りたくないから正直にそのまま私に告白した。

ああこの人、嘘がつけないんだなあって、なんだかすごく微笑ましく思ってしまったんだ。

好きな人と仲のいい女の子を責めたり排除しようとするマイナス思考より、よっぽどプラス思考でかわいいなあって。

話してみると、鈴木さんは気は強いけど正義感の強い、優しい女の子だった。

「私、鈴木さんのこと気に入ってるんだよ」

氷室の、『かわいい』と称される丸い瞳が驚いたように見開かれる。

その唇が、拗ねたように尖った。

「・・・なんだよそれ」

「うーん。ごめんね、でも、氷室は嫌がるかもしれないけど、一回鈴木さんと話してみるといいかも。

もったいないなあって思うんだよね、フィルターがかかった状態だけで相手を嫌っちゃうの」

氷室の立場からしたら、仕方がないことなのかもしれないけど、それ全とつぱらってその人を見てみたら、違う角度で相手のことを見れるんじゃないかな。

なんて、他人事だから言えることなのかもしれないけど。

「・・・・・・・・・・」

氷室は沈黙して、一瞬じっと私を見つめたあと、ふうとため息をついた。

「ずるいよなあ、そういうと」

「は？」

何が、と聞き返そうと顔を上げようとしたら、氷室の手が私の髪の毛を思い切りぐしゃぐしゃとかき回してきた。
って、ちょ、何いきなり、しかも力強いしつ。

「——何すんのよつ」

氷室の手から逃れたときには、髪の毛はもう乱れに乱れまくっていた。猫っ毛の私の髪が絡まっちゃってる。

うう、最悪！手櫛で髪を整えながら、改めて文句を言おうと顔を上げた時だった。

私と氷室は、理科準備室の前で話してたんだけど、そこは階段の前でもあった。

で、ちょうど手すりに手を掛けた状態で、階段の一番下で立ち尽くしていた人が視界の中に入ってきたんだけど。

「あ・・・・・・・・」

見覚えのあるその大きな姿に思わず頬が緩んで、声をかけようとしたその時だった。

じつとこちらを見つめていた、高橋君の瞳がふいと逸らされてしまった、気がした。

・・・・あれ？

「あれ、高橋じゃないか」

思わず言葉を失ってしまった私の視線を追って、氷室が高橋君の

姿を見つけた。

屈託のない笑顔を浮かべ、氷室は高橋君に向かって軽く手を挙げる。

「久しぶりだな、元気か？あいつかわらず怖えオーラだしてんな、おい」

「・・・大きなお世話だ」

高橋君は、短く返事を返しながら、階段を登ってきた。

ずいぶん気安げな氷室の言葉に私がきょとんと二人を見比べていると、そんな私を振り返って、氷室が笑った。

「同じ中学だったんだ。

こいつ、目つき悪いだろ？女子には敬遠されがちだったけど、なんというか男にはもっててもてだったんだ。兄貴って感じ、するだろ？」

「・・・！」

申し訳ないんだけど、私は兄貴、のくだりで噴出してしまった。

ああ、わかるわかる。高橋君のこの武士みたいな潔さとか、同姓にはすごく好かれそうだよな。

くすくす笑っていると、無然とした高橋君の表情が目に入った。

その眉間に皺を寄せている姿はいつもどおりの高橋君で、先ほどの思い違いだったのかな？とちよつとほつとした。

「というか、あんた達こそ知り合い？なに繋がり？」

不思議そうな顔で、氷室がその整った顔を傾げる。

「・・・あー、またか・・・」

どう説明しようと頭を捻らせる私を他所に、珍しく高橋君のほうから口を開いた。

「ちよつとした偶然だ」

・・・そのままだった。しかも、訊いてるほうには全然意味分らないと突っ込みたくなる省略の仕方だ。

氷室はちよつと驚いたように目を見開いた後、「ふうん？」と唇を面白そうに緩ませる。

「偶然、ねえ？」

氷室の瞳がきらりと光った気がした。

二人、じつと目を合わせる様子はなんだかドラマのワンシーンみたいだった。

氷室は顔だけはほんと男前だし、高橋君も切れ味鋭い顔立ちしてるし。

氷室の二重の大きな瞳と、高橋くんの切れ長の瞳が頭上で見詰め合うのに何だか胸がときどきした。

うわ、これとても観賞用にいいよ！

とか暢気に考えてたら、頭の上にどさりと氷室の長い腕が降ってきた。

て、ちよ、重っ！

「どういう偶然か、ぜひとも説明してほしいところだけど」

「・・・長くなる、それにそんな面白い話でもない」

にやにやかかわいらしい顔に似合わない意地悪げな笑みを浮かべて、氷室が軽い口調でそんなことを言うのに、芯のある穏やかな声があっさりとそれを流す。

「何すんのよ氷室っ」

私が頭の上の氷室の腕をなんとか引き剥がした頃にはもう、先ほど氷室にぐちゃぐちゃにされてしまった髪の毛はもつとひどいことになってしまっていた。

睨み付けると、氷室はふつと笑って肩を竦める。

「いやいや、ちよつと面白いもの見つけたなって」

「はあ?!」

手ぐしで必死に髪の毛の乱れを戻しながら、意味の分らない氷室の言葉に喰ってかかったけど、氷室はくっくと喉を鳴らして笑うだけだった。余計怒りのボルテージ上がるってーの!

「んじゃあな、話は済んだから俺は先教室に戻ってるわ。

高橋、またな」

「・・・ああ」

氷室は軽く高橋君に右手を挙げると、そのまま真っすぐ廊下を歩いて去っていった。

残されたのは、私と高橋君の二人だけで。

えーっと。

私は、心の中でほんの少し焦って、言葉を探す。

ふいと逸らされた瞳がまだ胸の中に残っていて、ちょっと高橋君の様子を伺ってしまった。

「・・・黒ネコさん、元気?」

思いついたのは結局、黒ネコさんのことで。

氷室の後姿をじっと見送っている高橋君におそろおそろ話しかけると、はっと高橋君が我に返ったように私に視線を移した。

ちょっと戸惑ったような瞳が、私に向けられる。

「・・・ああ。家で暴れ倒してるくらい、元気だ」

その言葉に私はぷつと吹き出してしまった。一気に気持ちが和んで、頬が緩むのがわかる。

「そっかぁ」

微笑んで高橋君を見上げる。遙か上から、高橋君の視線も落ちてきた。

視線がかちりと合う。

高橋君は、なんだか私のことを観察するように見下ろしていて、

私はちよつと戸惑った。

思案するような面持ち。

きりつとした瞳に、じーつと見つめられると、なんだか落ち着かない。

わあ、なにになに。なんか私、おかしい？

やつぱり髪の毛とかぼさぼさなんだろうか。さつき氷室にぐちゃぐちゃにされたやつ。

そんなことを考え付くと、今すぐにも鏡を見たくて仕方がなくつてそわそわしてしまう。

でもなんだか、ふつと細められたその瞳を振り切ることはできなかった。

「――」

教室の前、開け放った窓から、からつとした風が入り込んでくる。急に夏の暑さを意識し、息苦しさを感じて私は視線を合わせたまま身じろぎした。

ぴんと伸びた背筋、体育会系のがっしりした身体が、目の前で夏服の薄いシャツに収まつてる。

その白い半そでから伸びた筋のある右腕が、動いた。

――え？

近づいてくる大きな手のひらに思わず身を硬くしていると、ぼんと頭の上に大きな手のひらが乗せられて。

そのままわしわしと髪の毛を盛大にかき回される。

え、え、ええ？！

それはどこか既視感を覚える動きだった。

「ちよ、ちよ、ちよつと高橋君っ？！」

慌てて私は飛びずさつて距離をとった。頭に手をやると、見事にまたまた髪の毛がぐちゃぐちゃになっていた。

ひ、ひどい。みんな酷い。

「もう！いきなり何！」

こんなな一日に何回も髪の毛ぐちゃぐちゃにされることないよ！さすがに腹がたって高橋君をにらみつけたんだけど。

高橋君は私じゃなく、自分の手のひらを見ていた。しげしげと。

「???」

しかも思いつきりまた眉間に皺が寄っている。ワケがわからなくって、私はおそろおそろ高橋君に近づいて下から顔を見上げた。

「た、たかはしくん？」

「――」

は、と高橋君は我に返ったようだった。

ぱちぱちと瞬きを繰り返し、私を見下ろす。

それはどこか幼い仕草で、めずらしく高橋君が歳相応に見えた。

「すまん。

どうも・・・落ち着くようだ」

「ええ?!」

突拍子もない言葉に私は目を剥いた。

って、髪の毛ぐちゃぐちゃにするのが落ち着くってどういうことよ?!

思わず頭を手で防御して後ずさろうとしたんだけど。

それより早く、高橋君の腕が頭の上にあった。

え??

身構える暇もなく、すう、と優しく頭を撫でられる。

離れて行く指が、さらりと私の猫っ毛を一筋さらって行く。

私は硬直した。

え。今、何が起こったの??

見上げると、そこには、きつめの瞳を和ませた高橋君がいて。

「やっぱり、落ち着く」

満足げに頷いて、そんなことを言う。

一気に頬が熱くなったのがわかった。

ぎゃあ、なに、なに、今の。

脳内沸騰してるところに、昼休み終了のチャイムが鳴り響く。

「急ぐぞ、授業が始まる」

一人真つ赤になつてゐる私を他所に、ものすごく冷静にというかいつもとどおりに、高橋君がそう言つと、廊下を先に歩く。

数歩進んで、なかなか動き出そうとしない私に気づいて、ふ、と顔だけ私の方に振り返つた。

「井上？」

「——！！わ、わかつたよっ」

不思議そうな瞳と目が合いそうになつたけど、慌てて目を逸らし、高橋君の横を足早に通り過ぎる。

首を傾げながら、高橋君が後ろを着いてきてるのが気配でわかつた。

その気配を全身で感じ取りながら、先ほどのことを思い返す。さらに、と私の髪を滑つた、くすぐったい指の感触がまだ残つてゐる。

「・・・・・・・・！！」

駄目だ、恥ずかしすぎる・・・・！！

それから教室に帰つても授業が始まつても私はさっきのことが忘れられず、その日の午後はずっと悶えて凜たちに変な目で見られてしまった。

ぎゃーっ、だって頭ぼんぼんよりなんか恥ずかしかったのよ……っ！

精神安定剤？ 後 1

それから数日経って、体育祭の日。

「うあつっい・・・」

じりじりと太陽が照りつける、6月の空。

くつきりと鮮やかな青空が、私達の頭上に広がってる。

熱中症対策のためグラウンドには、競技の行われる中心部分を取り囲むようにして、クラスごとに網ネットが頭上に張られている。

そのお陰で日差しはあまり感じないんだけど、暑さだけはどうしようもなかった。人がいっぱい集まってるし。

じつとしてても、汗がにじむ。今日は運動するから、後ろで高い位置に纏めてすっきりした首元にも、つうつと汗が流れて気持ち悪い。

それに正直、私、あんまり運動って得意じゃなくて、テンション下がりが味だった。

応援するのはいいんだけどねー。

クラスの群れに混じって競技中のクラスメイトを応援していた私は、一息つくとペットボトルのお茶を一口飲んだ。

ちなみに凜は今高跳びに出てて、隣にはいない。

前線で鉢巻をして応援していた鈴木さんが、そんな私の隣にやってきた。

「井上さん、そろそろあなたの番じゃない？ 障害物競走だったよね？」

私は頷いた。足遅くっても関係ないやつ選んだので、障害物競走。なんか、足の速さっていうより根性でなんとかするような気がしな

い？

意外なことに、鈴木さんは体育会系のヒトだった。フーンとしたイメージとは違って、応援にも非常に気合が入っている。クラスのカラーの赤い鉢巻を額に締めて、指定の白いＴシャツをノースリーブのようにぎりぎりまで袖部分を織り込んでその姿はどう見てもやるき満々だった。

釣りあがり気味の瞳を生き生きと輝かせて、鈴木さんは懐から青い布を取り出してくる。

「ほらこれ、暑いから、出番まで着けていきなよ。ひんやり気持ちいいよ」

それは、熱中症対策で最近売れ行き好評といわれる某商品だった。水を絞って首に巻いて使うタイプのやつ。

いそいそとそれを差し出す鈴木さんの姿に私は思わずぷつと噴出してしまった。後ろで一つに纏めた毛先が揺れる。

「え。なに、なんで笑ってるの」

「いやえつと・・・『姉御』だなあって」

付き合ってみると、鈴木さんは非常に面倒見のいい性格をしていた。

ほら、今だつてわざわざ私を呼びにくる辺り、その証拠だと思う。黙って私に付いてきなさいタイプかと思いきや、わりと細々と世話を焼くタイプのほうだった。周りがそれに頼って付いていく感じ。なんだかそのギャップが最近心地いい。意外にもおっとりがたなの凛とも気が合うみたいで、たまに二人で私をいじってきたりするのほちよつといただけないけど。

「変なあだ名つけるのやめてよね。

・・・あ・・・」

「——え？」

話しながら鈴木さんが、急にグラウンドに釘付けになったので何事かと私も視線を向けて、すぐに納得した。

それにしても、暑い。

まだ梅雨入りはしていないから、独特のじめつとした暑さはないんだけど、その分じりじりと肌が焼かれるのがわかる。やだなあ、日焼けしそう。

全学年が集まるグラウンドで、人の波を避けながら暑さに辟易する私の目に、向こうから歩いてくる見知った姿が飛び込んできた。

「あ……」

人の波より頭一つ分高い、独特の人を寄せ付けない雰囲気を持つその人を見つけて自然、足が止まった。

と同時に、相手も私に気づいたようだった。ちょっとだけ驚いたように一瞬目を見開いてから、私の方へとやってくる。

「っ、こ、こんにちはー高橋君」

「……ああ」

う、声が上がっちゃったよ私。だってこの前頭を撫でられたのはまだまだ記憶に新しい出来事で。

気恥ずかしくってたまらない。

それでも自然な笑顔笑顔と唱えて頭上の高橋君の顔を見上げれば、見慣れた眉間に皺の表情を見つけて、なんだかほつとしてしまった。っておかしいな、私。

「………」

じいつと見つめられる、高橋君の視線は私のアタマにあった。

反射的にこの前のことがよぎって頭をガードしてちよびつと後ずさりしてしまった。

だってこの前みたいに頭をわしわしってされたら、直すのが大変なんだよ。慌てて高橋君の関心をアタマから逸らすべく話題を探す。「た、高橋君も今から競技？わたし、障害物競走なんだ。高橋君は？」

「いや、俺は……終わったとこだ」

ふつと高橋君の視線がアタマから私の顔に落ちてきて、ほつと胸を撫で下ろした。

相変わらず鋭い目つきなんだけど、すっかり慣れてしまつて、返つてその方が落ち着く気がするのが不思議だった。

頬を緩めて、高い位置にある顔を見上げると、動きに合わせて首筋で一つに纏めた毛先が揺れた。

「高橋君は、あと何の種目での？私は、後は全員参加の二人三脚で終わりなんだー」

「――」

高橋君が、ちよつと目を細める。

「俺は、後はリレーが残つてる」

「リレー？！そっかぁ、高橋君運動部だもんね、足、速い？」

「・・・遅くはない」

と言つた後で、高橋君が、す、とまた視線を私の頭に向けた。

「・・・それ」

ぎゃ。ぎくりと私の身体が強張る。

「いつもと髪型違うんだな」

「えっ、う、うんっ。ほらっ、暑いから」

私はまたまた頭をガードして、顔に誤魔化し笑いを貼り付けて後ずさつただけど、高橋君の瞳が穏やかに弧を描いたのを見て固まつてしまった。とくとんと胸が鳴る。

「くろすけの尻尾みたいだな」

その視線は、私の後ろで一つに纏められた猫っ毛に向けられる。私が首を動かすと、同じ用にふわりと揺れる毛先は、確かに動物の尻尾みたいだ。

「く・・・ろすけ」

え・・・つと、それってもしかして。

「黒ネコさんの名前？」

訊ねると、高橋君が小さく頷く。

わあ。

「そっかあ、名前決まったんだ。かわいいね」

「——俺じゃない、姉貴が決めた」

大柄でいかにも男っぽい顔つきの高橋君の口から零れる、その可愛らしい響きが微笑ましい。

ふいと高橋君が視線を逸らしてそんな風に言い訳するのがなんだか可笑しかった。ちよつと照れてるみたい。

気持ちがゆるゆるとほぐれて、すんと次の言葉が自然に出た。

「いいなあ、会いたいなあ」

あの柔らかな毛並みが懐かしい。小さな肉球がとてもかわいくつて、愛しくつて、心のままにぶにぶにしていたことを思い出す。そのたびに猫パンチくらっちゃったけど、それもかわいいんだよね。

回想する私の相好は緩みつばなしかったに違いない。

っていうか、誓っていうけど、別に、他意はなかったのよ。

「——会いに来るか？」

だから、そんな私の様子を見下ろして、そう訊いてきた高橋君の言葉に私はびつくりして目を瞬かせてしまった。

え。

思わずその精悍な顔を凝視してしまった私に不審そうな眼差しを落とし、高橋君はもう一度繰り返した。

「アイツに、会いに家にくるか？——明日の土曜日午後なら、部活も終わってるから空いてる」

「——」

言葉を失う私とは逆に、事も無げに話す高橋君。

ってえつと・・・うん、び、びつくりしてるのは私一人なわけですね。うち？うち、って、お家ってことよね？

落ち、落ち着け私。黒ネコさんに会いにおいでって誘ってもらっ

てるだけなんだから！

顔に熱を帯びるのが自分でもわかって、心の中で必死に言い聞かせる私の目は多分泳いでた。「・・・井上？」と不思議そうな声に呼ばれて、ぷるぷると首を振って邪念を追い払う。

「う、うん！ご迷惑じゃなければ是非！」

につこりと笑ってそう言くと、ふ、と高橋君が口元を緩めた。

「わかった。じゃあ、明日の2時頃、〇〇駅の改札前でいいか？」

「うん、大丈夫」

「そうか。・・・そろそろ、行かないと不味い。井上も、出番が近いんじゃないか？」

高橋君が、グラウンドに響くアナウンスに耳を傾けながらそう私に聞いてくる。確かに、障害物競走に出る選手を呼ぶ最終アナウンスが響き渡っていて、我に返った私は俄かに焦りだした。

わあ、不味い。早く行かなくっちゃ！

「じゃあな」

「うん！ばいばい！」

慌てて私は、高橋君と別れて召集場所に走り出した。

人の波を掻き分けてちよつと進んだところで振り返ると、反対側に歩いて行くその背中を確認する。

う、お家に行くことになってしまった・・・！

ちよつとだけざわめいた心臓の音を首を振って誤魔化し、私はまた、前を向いて走りだした。

で、無事、障害物競走終了してきました。

ちょうどネットを潜るのがうちのクラス前だったんだけど、「いのうえさん！！」「愛那ー！」と聞き覚えのある高い声が聞こえてなんだか恥ずかしいようなくすぐったような気持ちになった。結果は健闘むなしく4位。うん、でも私にしたらよく頑張ったほうだ。

「ただいまー」

クラスのところに戻ってくると、高飛びを終えた凜が出迎えてくれた。

「おかえりー。お疲れ様だったね」

にこにこ笑ってくれるほっそりした姿は、周りの暑さを感じさせない涼やかな雰囲気纏ってる。なんだか爽やかな風が通り抜けたような清涼感。

その綺麗な笑顔に心を癒されながら、私はどさりと凜の隣に腰を降ろした。

「ふいー、つつかれた」

「ここから見てたよ。4位だったね、残念」

「うーん、私にしては大健闘だよ」

とか言っていると、ぺしりと頭を叩かれた。振り返ると、氷室だった。

「なーに満足してんだよ、言っとくけど、ぜんぜん大したことないからな。つか、もっと走れたんじゃないかね」

相変わらず、可愛い顔立ちに似合わず口が悪い男だ。

むっつと私は唇を尖らせる。

「運動神経いいあんたと同じにしないでよ。それでも精一杯だったんだから」

とかやってると、やっぱり前列に陣取って応援していた鈴木さんが、私の声に気づいたのか勢いよくこちらに振り返ってやってくる。
「井上さ・・・」

けど、その足が氷室の姿を認めて止まってしまった。その腕には、スポーツドリンクのペットボトルが抱えられていた。

「……?」

なんだかその表情が微妙に強張っていて、いつもの強気な目元とかが、力を失っている。不思議に思っただけでその眼差しを追って、私はあちやあと頭を抱えなくなった。

氷室が、冷たい目つきで鈴木さんを見つめていたから。

いつもは無関心を決め込むその氷室の態度に、鈴木さんは尻ごんでしまったみたいだ。

う、うわあうわあどうしよう。私もあんまり、こいつがこんな風に冷ややかな態度とるところ見たことなかったので、内心思い切りたじろいってしまった。隣で凜が「あらら……」と暢気に呟くのが耳に届く。

「——なんだよ」

無機質な氷室の声音が、鈴木さんの心に突き刺さるのが見えた気がした。

「な……んでもない、ごめんね!」

気丈にもそう言っただけで鈴木さんは笑って、たつとクラスメイトを避けてその場を立ち去って行った。

うーんと……。

「……きついんじゃない?」

「どこが。白々しく近づいてくるからだ」

はき捨てるようなその言葉に、眉をしかめるほどには、私は鈴木さんのことが好きだし同情してしまう。

かと言って私が鈴木さんを庇うとなんだか逆効果な気がする……と考えると、隣に座っていた凜がのんびりと口を開いた。

「ペットボトル」

「え?」

気詰まりな沈黙が落ちた後のその声に、私と氷室は顔を向けた。ふわりと凜が笑った。

「ペットボトル、持ってきてくれたんだよ、鈴木さん。愛那にほら、私ももらったもん」

そういつて凧が腕に持つそれを掲げて、にっこりと微笑んだ。
・・・あ。さっき、そういえば、鈴木さん、ペットボトル持ってた気が。

「自意識過剰だけで、相手を傷つけるなんて最低だよな?」

凧が綺麗に笑う。なんだかそれはいつもと違って力強いというか、
・何らかの意思を持つての笑顔は、なんというか、珍しく棘があった。

向けられた氷室は驚いた表情で凧を見返した。まあ、めったにな
いことだから氷室もびっくりしたんだと思う。でも、凧の言葉を理
解したのかその後で端正な顔が不機嫌そうに歪んだ。

「——・・・自意識過剰か、わからないだろ」

「そう?けど私、氷室君と一緒に居るとき、鈴木さんがこっちに
寄ってきたのまだ見たことないよ」

ねえ?と急に予先を向けられて、私は内心慌てながらも、こくり
と頷いた。

・・・そういえば、そうだ。『氷室君と友達になりたいから井上
さんと友達になりたい』と言いながら、私が氷室と話してるとき、
鈴木さんが私に近づいてくることってなかった。

氷室の可愛らしい丸い瞳の縁が、羞恥のためかちよつと赤くなる。
気づいてなかった所を突かれたって感じた。

そんな氷室に、凧は言った。

「鈴木さんは、ちゃんと考えてる女の子だよ」

凧いだ海のような穏やかな声で、凧がそう締めくくった。いい終
わるとにっこりと微笑んで私に視線を移す。

「あ、愛那、次100m走みたい。応援しに行こう?」

「う、うん」

誘われて、私と凜は前列に移動したんだけど、私は気になってちよつとだけ氷室の方を盗み見た。氷室は、唇を噛んで立ち尽くしている。

それから私は、「よっこいしょ」とのんびりとした声を挙げながら、前列の応援席へと移動したほっそりした姿を眺めやった。その表情には、先ほどの力強さはなくいつもの優しい微笑みが浮かんでいる。

・・・凜が怒ったとこ、初めて見た。

私の視線に気づいたのか、ペろりと凜がかわいらしく舌を出した。
「・・・やつちゃった」

その茶目っ気のある態度に私も笑顔を返した。

うん、まあそう。

そうやって怒るくらいには、私も凜も鈴木さんたちのこと友達認定してるってことだった。

精神安定剤？ 後 2

ぱあん、と鉄砲の音がグラウンドに鳴り響いて、二人三脚が始まった。

晴天の中、それぞれ片足を縛った男女ペアがグラウンドをまっすぐ走り抜ける。

全校生徒参加のこの競技、今さっき二年生の部が始まって、私は今順番待ちしているところ。

「藤沢君、足の紐、結び方これでどうかな？」

「ええっと・・・ていうかそれより井上さん、どうして僕の隣に・・・」

「あれっなんだかゆるっゆるみたい！藤沢君、これどうしたらいい？！」

「え？あ、うん、ちょっと待って・・・ってお団子結びになってるじゃないか！」

と慌てた様子で、優しい雰囲気のクラスメイトの男の子が、私が縛った硬い団子結び、私の右足と自分の左足を結ぶゆるゆるの紐を見て解きにかかる。

結びなおすことに頭がいつて、先ほど言いかけた言葉は忘れてしまったようだ、しめしめ。わざと時間かかる結び方した甲斐があるってものだ。

私は紐のことは藤沢君に任せ、ちらり、と前方に目をやった。とたん殺気立った目つきをしてる氷室と泣きそうな瞳の鈴木さんに出会う。うぎゃあ、と内心悲鳴を上げつつも気づかないふりをして後方に目を逸らした。

逸らした先には他のクラスメイトに混じってにこにこ天使の微笑を浮かべる凜の姿があった。口パクで何かを言っている。

声は聞こえないけど、だいたい何言ってるのか分る気がする。『やったね』と多分私を褒め称えているんだろ。前面の虎、後門に天使。ただし小悪魔の尻尾つき。なんだか私の気持ちとしてはそんな感じだった。

——二人三脚、鈴木さんと愛那、相手交換しちゃおう？

『氷室君には、反省してもらわないとね』

にこにこしながら、競技が始まる前にそんなことを言い出した凜の言葉に私の目は丸くなった。

要するに、先ほど険悪なムードだった鈴木さんと氷室に一緒に二人三脚組ませようってことで。

う、うーんと。

『・・・まずくない？』

『うーん、ちょっと強引かもしれないけど、あの二人には一度ちゃんとお話してもらうほうがいいかもって思う』

凜の穏やかな声が、のんびりとした口調ながらも譲れない強さを覗かせて、そんな風に言う。

こういうことって、周りがいやいや言うとか余計にこじれるよね、特に氷室は、自分の容姿目当てに近づいてくる女の子のこと毛嫌いでるふしがあるし。とか考えていた私は、自分と真逆の案を出してきた凜の言葉に驚きを隠せなかった。なんていうか、私はずっと凜のことおっとりとして内気、っていうイメージを持ってただけで、さっきの氷室に対しての態度といい、割と行動的な一面があるみたい。

けど、私ははじめ、反対した。だって、氷室はともかくさっきの後じゃあ、あまりにも鈴木さんがかわいそうすぎるよ。けど、その言葉に返ってきたのは、凜のふんわりした笑顔だった。

『氷室君、あんまり口は良くないけどそこまで性格は歪んでないと思う。多分、さっきのことで罪悪感、持ってると思うんだ。だからむしろ今が一番チャンスじゃないのかな』

あー・・・、なんだか説得力ある言葉に、ぐるぐると私が考える
と、更に凜が綺麗に微笑んだ。

『大丈夫だよ。それにもし氷室君がまた、鈴木さんを傷つけたら、私は全力で鈴木さんに違う人をお勧めすることにするし』

綺麗な顔立ちの彼女がそんな風に笑うと、ある意味脅されたりするより逆らいがたい気分になるの、実は本人知ってたりするのかな。多分大丈夫だと思うけど、何故だか疑う様子のない凜の言葉に、ちよつと考えてから私は首を縦に振った。

だってさー、確かに、これから先、こんなことたくさんあるんじゃないのかなあと思ったのよ。

氷室が近づくと、鈴木さんが今日みたいに傷つくの見たくない。凜の大丈夫っていう根拠は今ひとつ私にはわからなかったんだけど、私は凜の言葉を信じて乗ることにしたんだ。

だって凜が鈴木さんを傷つけるようなことすると思えないし。

というわけで、二人三脚の召集がかかってからぎりぎりまで氷室の隣にスタンバっていた私は、一年生の部が終ってスタート地点に移動になったと同時に、行動を開始した。

鈴木さんの相手役だった藤沢君を凜と二人で捕まえ、目を白黒させる藤沢君の足と自分の足を紐で繋げて逃げられなくしてしまったんだ。

で、呆然とする鈴木さんと氷室をセットにして、二人三脚の順番待ちでクラスの群れの中に入った。

ええもう、そりや目立ちましたよ。

今もクラスメイトの視線が痛いよ。好奇心でんこもり。まあそりやそつだ。

氷室はぴりぴりしてるし、その隣の鈴木さんは泣きそうだし。

ほ、ほんとに大丈夫かしら、これ。

けどもう後戻りはできない。そうこうしてる間にも、どんどん人の波は前に前に進んで行く。

私の隣に座っている藤沢君もここまで来たらあきらめたみたいでもう何も言わない。時折ため息ついてたりするのは聞こえないフリ。ご、ごめんね藤沢君。

せわしなく動く心臓の音を落ち着かせようと、私はなんとなく辺りを見渡して、割と近くに高橋君の姿があることに気づいた。

そっか、隣のクラスだもんね、考えてみたら。

けど、私より3組斜め後ろに、相変わらずむっつりした表情で体育座りしてるその姿はどう鼻屑目に見ても怖かった。

えっと、高橋君、だから眉間のしわだけでもどうにかしようよ、ほら、組んでる女の子怖がっちゃってるから……。思わずはらはらと様子を伺ってしまう。

ショートボブのその女の子は、高橋君と繋がった右足からできる限り距離を取ろうとしているのがわかる。

うーん、それはそれでどうかと思う態度だけど……。多分高橋君もそれがわかってるからだろう、怒ってるというより困ってるんじゃないかと、なんとなく私はそう感じ取ったんだけど、周りからみたら不機嫌なようにしか見えないし近づけない……。と、思ってたんだけど。あれ？

ぼん、と高橋君の後ろに座っていたクラスメイトの男の子が、苦笑しながら高橋君の肩に手をかけて何か話しかけた。一言、二言、話すとふ、と高橋君の表情が少し緩む。

それだけで、取り囲む雰囲気が和らいだのがここからでもわかった。

男の子と高橋君が、言葉を交わす。その隣の、強張った表情の女の子にも、話を振って……。だんだん、高橋君とペアの女の子の表

情が緩んでいく。

その様子をそつと伺っていた私は、知らない間にほつつと安堵のため息をついていた。

ていうかなんで私が緊張してるの。手に汗までかいちゃってるし。それにしても、氷室の言ってたみたいに高橋君って男の子とは仲いいんだな。

苦笑を零しながら前を向いた私は、ちよつとだけ胸の中をよぎった寂しさを見ない振りをする。

「井上さん？前、進むよ」

藤沢君に促され、は、と我に返った私は、だいぶと前に進んだ列に気づいて慌てて進もうとせずべつと前につんのめってしまった。右足を後ろに引つ張られたまま、地面に手をつく。隣で「うわっ」という藤沢さんの悲鳴も聴こえた。

「い、いのうえさん、足、縛ってるから・・・」

「ご、ごめんっ」

そうでした、足縛ってるの忘れてたよ、恥ずかしい。周りですくすという笑い声が聞こえて顔が赤くなった。心配そうに手を伸ばしてくれる藤沢君の手を借りて体勢を立て直す。

息を合わせてせいのかと藤沢君と前を詰めて——その視線の先に、氷室と鈴木さんの姿を見つけて、今度は驚いて目を見開いた。

精神安定剤？ 後 3

私達より3組ほど前の二人は、あともう少しで出番なんだけど。

氷室と鈴木さんが、にらみ合うようにして見つめ合っていたんだ。さつきまでも険悪なムードだったけど、更にぴりぴりとした雰囲気。を周囲に撒き散らしてる。

鈴木さんはさつきまでの弱弱しい表情は引つ込めて、代わりに挑戦的な釣りあがり気味の瞳が氷室を見上げている。

対する氷室は苦々しげな表情だった。

えええ、この数分の間にいったい何があったの？私がこの急展開に目を白黒させてる間に、二人の出番がやってきた。

鈴木さんと氷室は先生に促されて、視線をお互いから外すと厳しい顔つきでスタートラインにすたすたと歩いていく……ってちょっと気のせいかな、足繋がったままなんだけどは、早いよね……？

「位置について——よい」

ぱあん、と先生が片耳を塞ぎながら、鉄砲を撃つ音がグラウンドに響き渡った。

縦一列に並んだ、各クラスごとの男女ペアが走り出す。氷室達も鉄砲の音と同時に走り出した。

結果。

「う、うわあ……」

接戦を制して一位をもぎ取ったのは我らが氷室ペアでした。

ていうかすごい早かった。驚くことに、すぐく息が合ってた。

二人ともさすが運動神経良い……けど、でも。

え、えええ？

思わず後ろを振り返ると、凜の天使の笑み。ほらね？とその瞳が

語っているけど私は訳がわからなかった。

わかんない、一体何が起こったの？

呆然としてる間に、今度は自分に順番が回ってくる。

「井上さん、行こう？」

立ち尽くす私に向かって苦笑を零し、藤沢君がそつと私の背中を押して促してくれる。

そのまま、他のクラスの生徒達と一緒に白線の引かれたスターラインで位置につくと、藤沢君が言った。

「右足から行こう。出来るだけ歩幅、合わせるようにするから」

「う、うん」

そうだ、他のことに気を取られてる場合じゃない、こっちはこっちで頑張らないと。

緊張して前を向く。ぱあんとピストルの音が響いた。

せえの、の合図と共に私と藤沢君は走り出した。

ゴールラインを通過した時には、私はもうへろへろだった。

私達は、3位だった。可もなく不可もなく、という感じだ。

走り終わった選手たちが集まる、ゴールラインの脇に着くと私と藤沢君はしゃがみこんで縛っていた紐を外していた。

「お疲れさま」

「お疲れさまー、・・・藤沢君、ごめんね？」

巻き込んでしまったことに申し訳なさを感じて謝ると、藤沢君は優しい目元を苦笑の形にして、肩をすくめた。

「いいよ、僕はあんまり迷惑被ってないし。・・・むしろ今から大変なんじゃないかな？」

「え？」

意味が分らず問い返す、しゃがみこんだままの私と藤沢君に影が

かった。

「いのうえさんくくく」

恨みがましい声と共に現れたのは、釣り目を更に吊り上げた鈴木さんだった。背後に腕組をして佇む氷室の姿も見える。当たり前だけど二人ともものつすごい機嫌が悪い。

う、うわあ、怖いっ。思わず後ずさる私の肩を、ぽん、と藤沢君が叩いた。涙目で振り返ると、にっこりと柔らかな笑みを浮かべて、「がんばってね」の激励と共に藤沢君はさっと去ってしまった。うう、逃げ足速いよ助けてよー！

「いったいどうしてこんなことしたのっ」

「わわわっ鈴木さん落ち着いてっ」

「これが落ち着いていられますかくくく！」

ずずいっと鈴木さんが迫ってくるのに、じりじりとお尻を使って後ずさってる、その時だった。

ざわざわと、周りが騒がしく、ざわめいた。

「どうしたのかな」「捻ったんじゃない？」そんな声に釣られるように、周りの視線を辿って二人三脚の行われているグラウンドの方に視線を移して私は目を見開いた。

見覚えのある大きな体つきの男子生徒と、その脇で足を押さえて蹲る女子生徒の姿が、ゴールラインよりもまだ少し遠いところに居た。他の選手達はもう、全員ゴールラインを無事通過して競技を終えてしまっていて、その場で後ろを振り返って様子を伺っている生徒たちの姿もあった。

ショートボブの女の子の傍に、同じように片膝をついてしゃがんだ、その人は。

「高橋君、じゃない？」

私にじりじりと詰め寄っていた鈴木さんも、視線をそちらに移していた。私は、うん、と頷く。

「相手の女の子、足どうにかしたみたいね」

待機していた先生達が慌てた様子で近寄っていく。

まわりがざわめいている中、落ち着いた様子で自分達を繋ぐ紐を外していた高橋君が女の子に何か話しかけるのが見えた。

女の子の頭が足を庇ったままふると横に動く。足が痛いのか、こんな騒ぎになったのが恥ずかしいのもあるんだろう、俯いて顔を隠してる。高橋君は眉を寄せる。

先生達が何か言っていて、高橋君は顔を上げて頷いた。そして、そっと女の子に、手を伸ばす。

その瞬間、周りがどよめいた。私もうわあ、と目を瞬く。

「お、お姫様だっこ・・・」

一緒に見ていた鈴木さんも、思わずと言った感じで呟いた。黄色い悲鳴が周りから聴こえる。

危なげない様子でクラスメイトの女の子を抱き上げた高橋君は、周りの声も気にした風もなく、腕の中の女の子に何か話しかけると、と喧騒の中を動き出した。

女の子の足に響かないように、ゆっくりとした歩調で。

そのぴんと張った背筋が、凜として思わず目を奪われてしまった。「派手だね・・・」という鈴木さんの呟く声が、耳に届く。

「ほら、そっちに移動して！競技続けるから！」

ゴール付近で立ち止まったままだった生徒達を追い出す先生の声で、止まったままの時間が動き出した。

まだざわめきを残しながら、何事もなかったように競技が進行し始める。

「ちよっと、井上さ・・・」

は、と我に返ったように鈴木さんが目を吊り上げて私にまた詰め

寄ろうとして——言葉が途中で止まった。私の顔を見た鈴木さんの眉が、一瞬にしてきゅっと寄る。

「おい、井上——」

目の前で腕組をしていた氷室のえらそうな声も、途中で止まった。整った顔立ちが、口を開けた間抜けな格好で固まってる。丸っこい瞳が、驚いたように開かれて私を見下ろしていた。

「・・・？」

首を傾げるのと同時に、ぐい、と鈴木さんに腕を引っ張られて、その場から連れ去られる。立ち尽くした氷室は取り残されたまま。

なんとなく私は何も言わないで、そのまま鈴木さんに引っ張られたままてくてく歩く。

と言っても、まだ競技が終ってなくてこの場所を離れられないから、人の波の目立たない端っぐらしいしか行けるとこないけど。

鈴木さんはすると、腕をとったままの私と一緒にその場に座り込んだ。

そこで初めて、私は鈴木さんの顔を見た。

「鈴木さん？」

「——もういい、あつついから怒るとしんどい」

ぷいと視線を外した鈴木さんはなんだかぶつきらばうな声でそんなことを言っと、膝を抱えて黙り込んだ。

よくわからなかったけど、なんとなく私も一緒に口を閉ざすと、ぼんやりと辺りを眺める。

何事もなかったかのように進行を続ける、二人三脚を終えた生徒達がこちらに流れてくる。

それにしても、あつついな。直射日光が頭を照りつける。つつつと汗が背中を流れるのが気持ち悪かった。

——あの女の子、大丈夫かな。

ぼうつとしていると、先ほどの高橋君の後ろ姿が脳裏に蘇った。そつと女の子に向かって手を伸ばす、無骨な大きな手。なんだかその手の優しさや温かさまで想像できてしまつて私は苦笑した。胸

の奥ががちよつときゅつとなる。

「愛那——」

そうこうしている間に凜が競技を終えて戻ってくる。
きよるきよると辺りを見渡して私達の姿を見つけるとこちらへや
つてきた。

で、凜の姿を見つけた鈴木さんが「ちよつとお——！」と勢い
を取り戻した様子で隣で立ち上がった。

その迫力に思わず仰け反ってしまった私を、しかめっつらで見下
ろしてくる。

「明日、今日の分も怒るから覚悟してなさいよっ」

そんなことを言い放って鈴木さんは凜に詰め寄っていった。

対する凜はにこにこ笑顔で応酬している。騒ぎに気づいた氷室も
こちらにやってきて、なんだか鈴木さんと一緒になつて凜にやいや
い言ってるけど、本人達気づいてるのかな。多分気づいてないだろ
うな。

その様子を見てると、知らないうちに笑みが浮かんでいた。

ごめんね、ありがとう鈴木さん。

心の中で、私は鈴木さんに向かって頭を下げていた。

正直、ちよつとだけ心が今、痛かった。さっきの高橋君の姿が頭
に焼きついて、胸がちくんちくんって針で刺されたような痛みを
訴えていたから。

ぴんと張った糸のような空気がふつと緩む瞬間や、あの優しい手
つきは自分だけに向けられるわけじゃないんだなあって、当たり前
のことにショックを受けてる自分がすごく嫌だった。

女の子を抱き上げる、精悍な横顔を思い出したら胸がきゅうつて
なる。

だめだなー、私。なんだかとても今、哀しいみたい。

私はふるふると首を振って高橋君の姿を脳裏から振り払うと、気分を切り替えるように立ち上がった。ちょうど二年生の二人三脚も終わったみたいで、そのままクラスごとに列になって、退場していく人の波と一緒に歩いて行く。

「愛那ー！」

「ちょ、待ちなさいよ工藤さんっ」

途中でにぎやかな二人と共にクラスの集合場所に帰りながら。

その日一日中、もやもやした気持ちを、振り払うことができなかった。

恋心と天然さん 1

体育祭の明けた、次の日の土曜日。

私は約束どおり、高橋君と待ち合わせをした駅の改札前に居た。

時刻は1時50分。待ち合わせ10分前だ。

うーちよつと緊張する。

胸元に切り返しのある、花柄の黄色いワンピースに黒のレギンス姿の私は、手に持ったお土産のケーキの入った袋を持ち直した。手ごろで悪いんだけど、うちのケーキ屋のロールケーキが入ってる。何回か高橋君が買っていつてくれたし、家族の方も気に入ってくれるのかな、と思つてのチョイス。

ていうか彼女でもないのにお家に行くつて家族の人に要らない誤解を生みそうなんだけどそこらへん大丈夫なのかしら、高橋君。

というかお家に人、いるのかな。

居たら居たでいたたまれないけど、居ないのもどうにも落ち着かない気がする。

いやいや私、考えすぎだから。落ち着けちよつと。

というか何で、凜を誘わなかったんだ・・・。

そつだ、凜にも声を掛ければよかったんだよ・・・！

今更ながらそんなことを思いついて、私は知らず頭を抱えていた。昨日はなんだか疲れてあのあと何も考えずに眠ってしまったし、そこまで頭が回らなかった。

馬鹿すぎる・・・！

いや、今からでも遅くないかな？ダメもとで電話してみる？

そんなことを考えついて携帯を探してごそそと鞆の中を探る私の肩に、ぽん、と手のひらが載せられたのはそのときだった。びっくりに思いつきり肩を揺らしてしまう。

「悪い。待たせたか？」

「た、高橋君」

遅かった。あたふたしている間に、本人がやってきてしまった。引きつり笑いでお出迎えの私に、頭上の高橋君は軽く首を傾げている。

現れた高橋君は、今日は私服姿だった。裾がだぼんとした形の、カーキ色のＴシャツにジーンズ。胸元には三つボタンが付いてて、一つ目は外されてる。いつもは制服姿しか見たことないので、すごい新鮮な感じがする。

「行くか」

「・・・うん」

結局、二人きりか。そう思うと、また緊張して身体がかちこちになってしまう。

そんな私を先導して、高橋君が歩き出した。

たどり着いたのは、駅から１０分くらい歩いたところにある住宅街の一角だった。

途中に公園もあって、静かな雰囲気の住宅地。子供達が道路で遊んでいたりで、なんともどかな土曜の午後って感じがする。

高橋君のお家もその軒並み連なる家々の中にあった。煉瓦調のかわいい屋根が特徴のそのお家へ、高橋君が入って行く。

で。先に玄関に入って、扉を開けて私を招きいれてくれた高橋君なんだけど、玄関に並ぶ女物のパンプスを見つけるとまたまたお馴染み、眉間に皺が寄った。

「・・・出かけたんじゃないのか」

「ふえ？」

嫌そうな声に思わず高橋君を見上げるけど、答えは返ってこない。

えつと、これどうしたら。

家主が玄関先で留まってるから私も動けないで、どうしようかとちよつと視線を巡らしたところで、玄関から見える廊下の突き当たりの扉から、かりかりという引っかく音が聞こえた。

みやおん、という鳴き声も聴こえて思わず相好が緩んだ。黒ネコさんだ。

その声を訊いて、高橋君ははあと溜め息をつく。なんだか仕方なさそうな様子で靴を脱いで家の中に行くと、私を振り返る。

「どうぞ、上がってください」

「は、はい」

反射的に緊張がぶり返し、固くなりながら、私は勧められるままに廊下を進んだ。

高橋君が奥の扉を開けると、小さな黒い生き物が勢いよく飛び出てきた。

元気いっぱい黒ネコさんだ。

「久しぶり、黒ネコさん〜！」

足元に擦り寄ってくる黒ネコさんの背中を、しゃがみこんで優しく撫ぜたその時だった。

「鉦大帰ってきたのー？丁度いい、あんたのウォークマン貸して、見つからないのー！」

女の人の声が聞こえて、とたとたと軽やかな階段を降りる足音と共に背の高い若い女の人の姿が現れた。黒ネコさんが大きな声に驚いたのか、私の手をすり抜けてまたリビングへと逆戻りしていく。

「あ」

涼やかな目元が印象的な、迫力美人という言葉が似合う、20代くらいのお姉さんだった。

右肩の方に一つに纏められた髪は、緩やかなラインを描いて胸元に垂らされている。

ていうか、間違はなく高橋君のお姉さんだよ、似てるし！

慌てて私は立ち上がり、まだ階段を降りる途中で立ち止まって目を丸くしてるお姉さんに向かって、ぺこりとお辞儀をした。

「こんにちは、お邪魔しています。」

「つて、ああどうも、こんにちは？———」というかちょっと鉦大、あんたいつの間に彼女なんて出来たの？？」

私に向かって挨拶を返してくれたお姉さんは、階段を降りてくると案の定というか盛大な勘違いをして私の隣にたたずむ高橋君に向かってそう訊ねてきた。高橋君はすごい嫌そうな表情でお姉さんを見下ろした。

「出かけたんじゃないのか。さっき、出て行っただろう」

「ち、違います彼女じゃないです！私、隣のクラスのものでっ」

いや、突っ込むところそこじゃないから、高橋君！

慌てて口を挟むと、おや？という風にお姉さんの眉が吊り上った。高橋君に似た、きりつとした瞳が、高橋君を見上げる。高橋君も背が高いけど、お姉さんも背が高い。170センチくらいありそうすりりとした体躯が、かつこよかった。

「忘れ物して、戻ってきた。でさ、ついでにウォークマン持って行こうと思っただけど、鉦大、ウォークマン貸してくれないかな？」

「自分のを持っていけばいいだろう」

「見つからないから言ってるのよ？いいから早く持ってきてー」

腰に手を当てて、お姉さんがにこつと高橋君に笑顔を向けた。笑っているけど、逆らいがたい雰囲気をもし出してる所、なんだかうちの兄ちゃんを彷彿とさせる。

高橋君は仕方なさそうにため息を一つつくと、私に「ちょっと待っててくれ」と言い置いて階段を登っていった。姉弟の力関係が見えた瞬間だった。

ちよつと笑える展開ではあったけれど、残されたのは高橋君のお姉さんと私二人という、ものすごくいたたまれない状況だった。

えーっと、どうしよう。困って背の高いお姉さんを見上げると、お姉さんはもう一度にっこりと笑った。

きりつとした瞳が優しいラインを描いて、そうすると一気に人懐っこい印象に変わる。

「ごめんねー、いきなりびっくりしたよね。お名前、訊いてもいい？」

その気安げな雰囲気にはっと肩の力も抜けて、私も顔に笑みを浮かべた。ケーキ屋で培った笑顔のスキルを、ここぞとばかりに発揮させて、姿勢をす、と伸ばして、軽く頭を下げる。

「井上 愛那っていいいます。今日は、突然お邪魔してしまつてすみません」

「いやいや、そんなのいいのよー！というか、もっかい確認なんだけど井上さんって鉦大の彼女ってわけじゃないんだよね？さつき隣のクラスって言うてたけどどういう繋がり？」

うわあ、いきなり興味深々にそんな風に訊かれて、思わず私は苦笑してしまった。

「黒ネコさんを拾ったときに一緒に居あわせてたんです。

で、今日は久しぶりに、黒ネコさん会わせてくれるということでお邪魔させてもらいました」

「ああ、くろすけの」

ぼん、と納得いったようにお姉さんが手を打った。

「そつかー、そうよねえ、あの無愛想に彼女が出来たつて一瞬喜んだんだけどそんなわけないかぁー……。ごめんね、井上さん。あいつ、いつも眉間に皺寄つてて怖い顔してるしとっつきにくいでしょ」

「あ、ええつと……。大丈夫、です。」

お姉さんの言葉に、私は軽く首を振った。さすが身内、容赦ない。でもそれは本音だった。確かに最初は怖かったけど、今は全然気にならない。

続く言葉は、ちょっと迷ったけど唇に乗せた。

「それに、高橋君、優しいと、思います」

「――」

私の言葉に、お姉さんが目を瞬いた。綺麗に化粧の施された、マスカラの塗られた長いまつげが動くのに、私はぼうつと見惚れてしまう。

「優しい？あいつが？」

「え、ええっと、落ちてきた本から助けられたり、黒ネコさんにごはんあげてたり・・・なんていうか、見た感じ怖い雰囲気だけど、いつも、優しい、と思います」

上手く言えなくて探り探り言葉を紡いでいると、じいっとお姉さんが私を見つめてくるので戸惑った。

あれ、なんか失敗した？！とあせっていると、突然がばりとお姉さんが私に抱きついてきた。

「かわいー！なにこの甘酸っぱい感じ。うわー妹に欲しいー！」

一瞬驚いて手をばたばたさせたんだけど、ふわりと香水のかおりが鼻に届いて、私は大人しくなった。

わ。いい香り。大人の女の人の、香りだ。

普段年上の女の人に接することのない私は、なんだかすごい胸がときどきして顔が赤くなった。

「・・・何やってるんだ」

呆れた声が背後からして、高橋君が階段を降りてきた。私に抱きつくお姉さんの後ろに立つと、小さな四角い青のメタルカラーの機械を差し出す。

「いやだってー、かわいいんだもん。鉦大、あんたにしてはよくやったじゃない、こんなかわいい娘、友達になれただけでも儲けもんよ。あんたその怖い力才のせいではなかなか女のコ寄ってこないんだから大事にしなさいよ」

「・・・大きなお世話だ。それに、必要ない」

「まーなんて17歳の男子高校生らしくないことを。お姉さまがいっ彼女できてもいいように小さな頃から躑けてやったのにこの恩しらず」

「・・・単に使い勝手が良かっただけだろう・・・」

「もう、言い返しちゃってかわいくないわねー」

とか言葉の応酬をしながら、お姉さんがウォークマンを高橋君から受け取った。

それを見届け、ふう、と高橋君が疲れたようなため息をついて、やつとお姉さんから開放された私の手首を取る。

「ほら、もういいだろ・・・井上、行くぞ」

「わ、わ・・・っ」

くい、と軽く引つ張られて、お姉さんの前を横切る高橋君の頭をスパコーン、と背伸びしてお姉さんが叩いた。

「ちょっと、女の子の手、むやみに触るんじゃないわよ」

「・・・痛くしてない、ちゃんと加減してる」

痛かったのか、頭を押さえながら高橋君がむすつとした様子で言い返した。

「そういう問題じゃないのよ全く・・・あんた女っ気ないくせになんでそういうこと普通にできるのよ。普通はちよつと手が触れただけでもどきっ・・・くらいから始まるでしょうよ」

うつ。その言葉に、顔を赤くしてるのは、高橋君じゃなくて私だった。

ええはい、手首を突然握られてどきどきしてるのは私です。

「意味分らん。もう行くぞ」

思い切りまた、眉間に皺を寄せて高橋君はお姉さんに向かってそっういい放つと、私の手を取ったまま階段に向かった。釣られて歩きながらも、私は高橋君とお姉さんの顔をきよろきよると往復する。

そのまま何段か階段を上がった。

「このすけべー」

その背中に向かってお姉さんが楽しげに言葉を投げてきた。瞬間、ぴたりと階段に足を掛けたままの高橋君の足が止まる。

ぎ、と鋭い目つきがお姉さんを見下ろした。

「何を突然言い出すんだ。さっきから意味分らんことばっか言っていないでさっさと行ったらどうなんだ」

ちよつと怒ったようにそう言つと、今度はもう振り返らない！という意思を込めた背中がまた階段を上りだしたんだけど。

「付き合ってもない女の子、部屋に連れ込むなんてエロ男爵じゃなくてなんだっていうのー」

がんと痛い音が足元からした。

とられた手首からも、衝撃が伝わってくるくらいの勢いで、高橋君が階段に足を打ちつけたみたい。

「~~~~~」

高橋君が蹲っている。

うわあ、痛そー・・・私は心配になつて背後から高橋君の様子を伺ったんだけど、左足の脛を触りながら、勢い良く高橋君が身を起こしてきた。

「なっ、なっ」

涙目になつてゐる高橋君が、ぱくぱくと口を開閉させてお姉さんを見る。

お姉さんはにんまり、と笑つて階段の上の高橋君を見上げていた。

「このナチュラルすけべ。わかつたらとつと降りてらっしゃーい。お部屋はもうちよつとステップアップしてからね」

と言つて、綺麗にマニキュアの塗った細い指を、廊下の向こう

のリビングへ向かって指した。

「
というわけであんた達があっち」

恋心と天然さん 2

高橋家のリビングは陽の光が差しこむ、小綺麗な雰囲気な部屋だった。

『じゃあねー、愛那ちゃん、また私の居るとき、ゆっくり来てね？
行つてきまーす』

そんな台詞と共に、高橋君を絶句の海へと放り込んだお姉さんは、軽やかな笑みを浮かべて出かけていったんだけど。

床に座り込んで、黒ネコさんを膝に抱き上げその背中を撫ぜていた私は、ソファに沈みこんだ高橋君をちらり、と盗み見た。

南向きの大きな窓から陽の光が差し込んで、部屋の中を照らしている。

今日も昨日に引き続いて暑く、窓を開けていても風のない日だった。早々にクーラーをつけたリビングにはひんやりとした空気が漂っている。そんな快適な部屋のソファの上で、高橋君は眉間に皺を寄せてむつつりと押し黙っていた。

でも、良く見るとその目元がほんのり赤い。

さっきお姉さんに言われた言葉が余程恥ずかしかったんだろう。お姉さんにかかわれていたときの、高橋君の姿を思い出すと、笑いがこみ上げてきた。

いやまあね？私だって、来る前はそりや緊張したけどさ、でもさ。相手がこんな様子だと、肩の力も抜けて、逆に考える方が馬鹿みたいっていう気持ちになる。それに。

『ナチュラルすけべ』

「・・・・・・・・・・!!」

だ、駄目だ。妙に笑えてしまうのはなんでだろう。芋づる式にその後階段に足を打ちつけた高橋君の表情を思い出し、ふるふると肩が震える。声を抑えるため、私はちよつと俯いた。

「なに笑ってる」

「——っ、ご、ごめん、なんでもない」

すかさず後ろからそんな低い声が聞こえて、私は笑いを噛み殺して振り返った。

高橋君はそんな私をソファの上から見下ろしてくる。

「誓っていうが」

高橋君がまっすぐ私の目を見つめる。その目の真剣さに私はちよつとたじろいだ。

「俺は別に、井上に何かしようと思って、家に呼んだわけじゃないからな？」

「・・・・・・・・・・!!!!」

私は固まった。

えっと。

どこまで真面目な高橋君・・・!

みるみる私の顔は真っ赤になった。そ、そんなことわざわざ宣言しなくたっていいよっ。

「わっ、わわわ分ってるよ？」

お、落ち着け私。

恥ずかしさのあまりどもりそうになるのを、ごくりと唾を飲み込んで抑える。

「だ、大丈夫。男の子のお家に行くことが・・・えっと、そんなことに繋がるわけじゃないよ。」

遊びにいくことだって、普通にあるから」

私は行ったことがないけど。そういう話はよくあると、思う。

まあ、二人きりというのはさすがにめずらしいかもしれないけど、それになんていうかお姉さんがああいう風に言ってくれたのは、高橋君に釘を刺すというよりも、年長者から私への優しさだったと思う。だって私、実際のところ緊張してたし。あともちろん高橋君をからかう為もあるだろうけど。

高橋君にそんな気ないってわかってても、男の子と二人きりの部屋って考えただけでがちだったと思うんだ。大して変わらないかもしれないけど、部屋で二人きりなのと、リビングとか開かれた場所で二人きりなのとは、なんていうかプレッシャーが違う。

同性だし、どちらかというとお姉さんは私に気を遣ってくれたんだろう。私が彼女かどうか確認したのだってそのためじゃないかな、きっと。

・・・って、まあこんな細かいとこまで高橋君には説明しづらいから、言わないけど。

安心させるように私はそう言ったんだけど、返ってきたのは高橋君の微妙な表情だった。

「井上も、行ったことあるのか？」

「え。えええ私？！ないない、ないよ。男の子のお家に来るのも初めてだし！」

と力説した後で気づいた。えっとこれも結構微妙な答えだよね？！
「そうか」

でも、真っ赤になる私とは裏腹に、高橋君はふっと目元を和らげただけだった。

た、助かったけど、ちょっと複雑な気持ちでもある。なんだか意識してるのが自分だけみたいでそれはそれで恥ずかしい。

「前に、二人お姉さん居るって言ってたけど、さっきの人は何番目のお姉さん？」

微妙な雰囲気振り払うように、私は話を変えることにした。疑

問に思ふ風もなく、高橋君があつさりと話に乗ってくる。

「二番目だ。俺とは4つ違いの21歳。一番上は7つ離れてる。二人とも、働いてる」

そうか。前に歳が離れてるって言ってたけど、ほんとに離れてるんだな。

「面白いお姉さんだね？」

「・・・どこがだ。いつも人のこと捕まえては要らんことばかり言ってくる。今日は一人だからまだマシだったが、二人揃ったら最悪だ」

渋面を作る高橋君に、我慢できずに吹き出してしまった。

さっきのお姉さんとのやり取りを見る限り、リアルに振り回されてる高橋君が想像できた。あまり物事に動じなさそうな高橋君とのギャップに笑みが浮かぶ。

「笑うな」

むすつとした顔で凄まれても、怖くありません。

くすくす笑つてると、黒ネコさんが高橋君の居るソファへと飛び乗ってきた。ぴん、と尻尾をたてて高橋君の腕に擦り寄っていく。

高橋君はため息をつきながら、慣れた手つきで黒ネコさんの小さな頭を撫ぜた。

落ち着くと、私は自分が手土産を持ってきたことを思い出した。

出しそびれたケーキの入った袋を手にして、黒ネコさんと戯れている高橋君に近づく。

「これ。うちの店のロールケーキなんだけど、良かったら家族の人と食べて。」

——ええっと、それと」

私は、袋と一緒に入っていた、小さな瓶を取り出した。中には、キヤラメル色したクリームが入っている。

首を傾げる高橋君に向かって、私は笑いかけた。

「高橋君、キャラメルラテ、好き？」

台所を借りて、私はおなべに牛乳を入れて温めた。

その間に、高橋君に用意して貰ったカップに、スプーンでキャラメルクリームを数匙、落とす。それからちよつと濃い目のインスタントのコーヒーを用意しておく。

みやおみやおと、食べ物をおねだつて身体をこすり付けてくる黒ネコさんにも、牛乳のおすそ分け。

ふふっ、かわいい。目を細めておいしそうに器から牛乳を飲む黒ネコさんの口の周りには白いお髭ができていた。毛が黒いからよくわかる。

興味深そうに私の後ろに佇んでいる高橋君は、私が持ってきたキャラメルクリームの蓋をあけて匂いを嗅いでいる。

「高橋君、キャラメルクリームは初めて？」

「ああ。キャラメルとは、また違うのか？」

「うん、違うと思う。これ、焼いたパンとかに塗ってもおいしいよ。やってみて」

と言いながら、私はいい、と高橋君にスプーンを手渡した。

きょとんと目を瞬く高橋君に、笑いかける。

「どうぞ。味見してみる？」

スプーンを受け取った高橋君は、一瞬じつと私を見つめたあと、一匙、クリームを掬った。

「・・・うまい」

「ほんと？！よかったあ」

私は、高橋君の言葉にほっと胸を撫で下ろした。そんな私を、高橋君が見下ろして言った。

「・・・もしかして、これ、井上が作ったのか？」

「え。あ、うん。わかった？これ、すごく簡単で、よく家でも作るんだ」

気分を落ち着かせたいとき、私はよく台所に立てこもる。

昨日、精神的にちよつと落ち込み気味だった私は、帰るなり冷蔵庫をチェックして、生クリームを見つけた。

甘い飲み物を飲みたい。そう思ったら、居ても経っても居られず鍋を用意して、キャラメルクリームを作っていた。

「こんなの、自分で作れるんだな」

感心したような高橋君の言葉に、私はちよつと笑った。

いつもよりなんだか瞳を輝かせている高橋君の瞳を見上げる。

「作り方わからないと、そう思うよね。でもこれ、ほんとに簡単なんだよ。材料、砂糖と水と生クリームだけだし」

話している間に牛乳が温まった。

沸騰させる前に火から下ろした牛乳と、濃い目のコーヒーを、準備していたカップへと注ぎいれる。香ばしい香りが台所に広がった。スプーンでよくかき混ぜる。ほのかにキャラメルのいい香り。

「はい、これで出来上がり」

ということ、ちよつとしたカフェ・タイムが始まった。持ってきたロールケーキも切り分けて、リビングに戻る。

私はどきどきとして、カップに口をつける高橋君の様子を見守った。

「・・・うまい」

「ほんと?!」

「ああ。ほろ苦くて、ほろ甘い。キャラメルの味もちゃんとして、うまい」

目を細めてまたキャラメルラテを飲む高橋君の姿に、ほつとする。どうやら気に入ってくれたみたいで、よかった。

口元を綻ばせて、私もカップに口をつけた。うん、おいしい。

カップを両手で持ったまま、ほつと息をついた。

高橋君の目元が、柔らかく緩んでる。切り分けたロールケーキも、美味しそうにほうばるその姿に、ほんとに甘いものが好きなんだなあ、と口元がほころぶ。

ゆるゆると幸せな気分を満たされて、胸の真ん中がきゅんと響いた。

ああ私、この空気が好き。

牛乳を飲み終わった黒ネコさんが、満足そうな様子で高橋君の下へやってきた。足元に座ると、ぺろぺろと自分の手を舐め、顔を洗う。

その姿をぼんやりと眺めながら、私はこのやわらかい空気にひたっていた。

高橋君が微笑む。いつもの緊張感はどこかに置いてきた、そのほんわりした雰囲気、胸があたたくって、陽だまりの中にいるような気持ちになる。

ああ、私、高橋君のこと、好きだなあ。

抵抗することもなく、素直にすとな、とそんな言葉が胸の中に落ちてきた。

とっつきにくい印象の、隣のクラスの男の子。眉間に皺を寄せる表情とか近寄り難くて、初めはとても話が掛けようなんて思えなかった。

でも、ほんとに優しい。

大きな手のひらが、その無骨そうな印象とは裏腹にいつも丁寧に触れてくれるの知ってる。

いつもぴんと張った背中、芯の強さが滲みながらも、ちゃんとそこで待っていてくれる優しさだってちゃんとある。

きりつとした瞳が、ふっと柔らかく和む瞬間が好き。

甘えて擦り寄ってくる黒ネコさんの喉を撫ぜる高橋君の指先を眺めながら、私はそんな、自覚したばかりの恋心を幸せな気分でかみ締めていた。

「え？じゃあ、お母さん、結構前からうちに買いに来てくれてたんだ？」

「ああ」

ロールケーキも食べ終って、黒ネコさんを囲みながら、私と高橋君は会話を交わしていた。話は始めて会った時のことに遡る。

高橋君は覚えていないけど、その時もロールケーキ買って行ってくれたよね、という話をしたら「母さんが風邪引いて寝込んでいて『ロールケーキが食べたい』と駄々を捏ねた」から、部活帰りにわざわざ自分の降りる駅を乗り越してまで買いに来てくれたらしい。

ちなみに私のことは知らなかったそうだ。

高橋君のお母さんはうちの店の割と近くにある事務所で働いていて、結構昔からうちのケーキ屋の常連さんで居てくれたんだって。ありがたいことに。

「そっか。じゃあ、もっと他のケーキも持ってきたらよかったかな」

「いや。このロールケーキは、姉貴たちも好きだから、喜ぶと思う。ありがとう。あと、これも美味かった」

高橋君が、飲み干した後のキャラメルラテの入っていたカップを指差す。私は嬉しくなって微笑んだ。

「良かった。あのクリーム、私もお気に入りなんだ。ケーキとかクッキーとかに入れても美味しいんだよね」

「・・・そうなのか」

高橋君の表情がちらりと動く。ほんの少し、眉間に皺が寄って。んん、っと。

ちよっとピンと来て、訊いてみる。

「良かったら、また作ってこようか？」

「いいのか？」

高橋君の瞳が輝いた。そんな顔していると、いつもの近寄りがたい雰囲気は消えて同い年の男の子らしい無邪気さが見えて、胸がきゅ

んとする。

正直に嬉しさを訴える心臓に、私は心の中で苦笑した。

うん、恋する乙女って単純なんですよ。こんな些細なことで幸せになるんだから。

「うん。じゃあ、今度学校に持っていくねー」

自分でもちよつと締りがないとわかるくらい、ふにやつと眉を緩めたら、高橋君の瞳がふ、と細くなった。

柔らかいラインを描く、いつもはきりつとした瞳に思わず目を奪われる。ごくごく自然に、高橋君の手が伸びてくるのが目の端に映った。

そこではつと我に返る。脳裏を過ぎったのは、この前髪の毛がくしゃくしゃにされたことで。

そんな姿を晒すわけにはいかない・・・！と一応恋する乙女としての危機感を持って、私にしては珍しく俊敏な動きでアタマを咄嗟に庇うと、後ろに身体を逃がす。

床の上に座っていた私の背に、ソファが当たった。

高橋君の手が宙に浮いて、ちよつと間抜けな格好になる。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

微妙な沈黙が落ちた。

う、これはこれでちよつとつらい。慌てて話を逸らしてみる。

「く、黒ネコさんって、『くろすけ』って言う名前になったんだよね？わ、私『くろちゃん』って呼んでいいかな？！」

「・・・ああ」

頷く高橋君の顔には、眉間に皺。なんだか考えこむ高橋君の表情に、嫌な予感がした私は更に唇を動かした。

「私、お茶のお代わり淹れてこようか？！またキャラメルラテでいい？」

「いや、いい。」

——井上」

腰を浮かしかけた私を制して、高橋君がまた、まっすぐ私の瞳を見つめてきた。

その不思議な目の色に、心臓がきゅっと捕われる。

「髪、触っていいか？」

「・・・！！」

私は硬直した。

一瞬、冗談？と高橋君を見直すけど、あくまで高橋君は真面目な表情だった。

その時私の頭を過ぎったのは『女の子をむやみに触るんじゃない』と言ったお姉さんの姿だった。もしかしてこれって律儀にそれを守っての言葉なんじゃないの？許可を取ってから、みたいな。

というか思い切り直球で来られて、さっきまで逃げようとしていた自分の逃げ道をあっさり封じ込められた気がするんですけど・・・！

「え、ええっと、でも私の髪なんて触っても、ぜんぜんさらさらじゃないしっ」

とつさに距離を取ろうとして、後ろのソファに背中が当たって失敗する。そ、そう言えばさっき行き止まりだった。

恥ずかしくて胸の中がむずむずする。今すぐこの場を逃げ出したいのに、それも叶わなくて、助けを求めるように高橋君を見上げた。

けど、高橋君の表情は崩れない。

きりりとした瞳が、許可を促すようにじっと私を見つめてくる。

うう、なんだか追い詰められる心地になった私は、慌てて言い訳をひねり出した。

「え、ええっと、だって私きつと汗臭いしっ」

けど、そう言ったとたん。す、と高橋君が一瞬にして距離を詰めてきた。

ふ、とその精悍な顔立ちがびっくりするぐらい近づいて、その鼻先が私の肩先で止まる。

私の顔のすぐ横に、熱を感じる。

え、え、ええ？！

思わずびくりと肩を弾ませ、ぎゅうつと目をつぶってしまったけど、すぐにその大きな身体は離れていく。

ふっと鼻先に香るシャンプーの香りにくらりと眩暈がした。

「——匂わないし、いい匂いだと思う。大丈夫だ」
「……………！！！」

に、匂った？今、私、匂われたの？！

本人がなんでもないことのように飄々としてるから何も言えなかったけど、私の顔は真っ赤で、あまりのことにへなへなと力が抜けてしまった。

「井上？」

不思議そうな、高橋君の言葉に。

「か、勘弁してください……」

白旗を掲げるしか、私にはできなかった。

その後？

目的を達成した高橋君は、ものすごく満足そうでした。

私は心臓酷使しすぎて疲労困憊になってたけどね……！

そうして私はまた、この時のことを思い出しては恥ずかしさに悶えてしまい、一晩中寝れない夜を過ごすはめになったのだった。

恋心と天然さん 2 (後書き)

乙女、振り回される 1

そんな非常に濃い休日を送った週明けの月曜日。

鞆の中にあるものを忍ばせてきた私は、朝からそわそわした様子を隠せないでいた。

うー思わず勢いで作って来ちゃったけど、どうしよう。どうやって渡そう。

「井上さん、どうかした？」

「う、うつん、なんでもない！」

挙動不審な私を見かねて、昼休み、鈴木さんがついに訊いてきた。お弁当を食べる箸を止め、私の顔を覗き込んでくる。

「ほんとに？何だかいつもと様子が違うようだけど・・・」

「ほ、ほんとに何でもないない」

ぶんぶんと首を横に振った後で、私はそうだ、と思い出す。

「鈴木さん、ケーキ好き？」

お弁当を食べ終わる時間を見計らって、私は鞆の中からごそごそと例のものを取り出した。

カップケーキが4つ。土曜日高橋君のところへ持っていったキャラメルクリームを使った、キャラメルマフィン。昨日作ったんだ。

と、そのケーキを見て、

「・・・愛那、何かあった？」

「へ？」

「愛那がお菓子作ってくるときって、たいがい落ち込んだときとかじゃない？」

凜がちよっと心配そうにそう訊いてきたから、私はびっくりした。一年の時からたまに、私はお菓子を作りすぎた時、学校に持って

きて友達と一緒に食べていた。特に自分では意識してなかったんだけど、どうもそれは自分のにテンションが落ちていた時だったみたい。凜にはばれてたんだな。

凜の言葉に、みんなの視線が私に突き刺さって、慌ててぶんぶん首を振った。

「違う違う！違うから！」

「・・・ほんとに？」

一際気がかりそうなのは鈴木さんだった。体育祭のとき、ちょっと落ち込み気味な私を見ていたから余計だろう。

「いやいやえーっと、これはお詫びのしるしっていうか。た、体育祭の」

「・・・・・・」

私の言葉に鈴木さんの、はつきりしたラインを描く眉が跳ね上がった。うぎやつ。

「どうぞお納めください鈴木大明神様ー！」

私はずいといとカップケーキを鈴木さんの方へと差し出した。

「言っとくけど、これでチャラにはならないんだからね？」

とりあえずこれは受け取っておくけど！

鈴木さんは眉を吊り上げてそんなことを言いながらも、カップケーキを受け取った。それを見て、他の皆も苦笑しながらそれぞれ手に取って、無事カップケーキは売り切れ、だっただけだ。

「ということなら俺にもあつてしかるべきだよな」

突然乱入してきたのは氷室だった。

それも鈴木さんの背後から。驚いた鈴木さんは、振り返ることもできないで固まってしまった。ぼろりとカップケーキが手から落ちる。

「なんでよ。あんたの分なんてないわよっ」

私は氷室を追いつくべくしつしと手で払いながら、内心では驚いていた。

だって、氷室が他の女子、しかも鈴木さんが居るときに私に話し

かけてくるなんて今までなかったと思うんだけど。体育祭の時だつて、鈴木さんを追い払ってたし。

その鈴木さんかというと、腕組をしてえらそうにふんぞり返ってる氷室とは裏腹に、それまでの威勢が嘘のように縮こまってしまった。

「いや、おかしいだろ。どう考えたって俺が一番の被害者じゃねえの」

「どこがよ。ていうかないから。ほんとにないから。人数分しか作ってきてないから」

本当はもう一つ、鞆の中に入っているけれど、それは内緒だ。

不満げに整った顔をしかめた氷室は、仕方のなさそうに息を吐くと、何を思ったか鈴木さんの背後からにゅ、と手を伸ばした。その手のひらのさきには、鈴木さんが机の上に落としたカップケーキ。突然伸びてきた手に驚いた鈴木さんは、とっさにそのカップケーキを胸に抱きこんだ。

「・・・えっとこれ、私のだから」

借りてきた猫みたいに大人しくなった鈴木さんが、おずおずといった感じで氷室を見上げてそう言う。

そんな鈴木さんを傲慢そうな表情で見下ろした氷室は、とてもえらそうに命令した。

「俺にくれ」

「え、嫌だ」

「・・・」

秒殺だった。咄嗟にそう言い返した鈴木さんは、しまったというように口元にぱつと手をやる。言われた氷室の方は、不満そうに鈴木さんを見下ろした。

えっとあれ、なんだかいつもよりえらそう度が増してる気がするんですけど。

というか氷室が自分から鈴木さんに声を掛けてる・・・。

目が点になって二人を見守っていると、氷室がふん、と鼻を鳴ら

す。

「あんた、俺のこと好きなんじゃあなかったのかよ」

「………！」

うわ、ちょ、あんた最低なこと言ってるよ?! ていうか、え? なに? 鈴木さん告白したの?! いつ!

ぎよっとする私達を他所に、その言葉を裏付けるように鈴木さんの顔が真っ赤になって氷室を涙目で睨みつけた。

そんな鈴木さんを、氷室の女の子みたいな可愛い顔が挑戦的に見返す。

「俺へのポイント、上げといた方がいいんじゃないの?」

にやりと片頬を引き上げて、氷室が言った。なんていうか、ものすごく意地の悪い表情で。

そして、気の強そうな鈴木さんがそうやって涙目で踏ん張っている姿は、なんだか妙にいたいけな、というか『がんばれ!』と思わず励ましたくなるような健気さがあった。

氷室はそんな鈴木さんの反応を試すかのように、目を細めて見やる。

「………さいていつ」

「もともと俺はこんな性格だ。それがわかってて好きになったんじやねえの?」

——で、どうなんだ? 俺にくれるの、くれないの?」

わざとらしい、犬っころスマイルが鈴木さんに向けられる。けど、可愛らしい、と言われる瞳の奥は笑ってなかった。

はらはらして二人を見守っていると、鈴木さんがはあっと何かを諦めたようなため息をついて、胸に抱いていたカップケーキを氷室の方へ差し出した。

氷室はそんな鈴木さんににんまりと性格悪そうな笑みを向けてから、カップケーキを受け取るため長い腕を伸ばす。

で。その手が届く寸前、ひょいっと鈴木さんがカップケーキを引っ込めた。

そして、呆氣にとられる氷室を置いて、ラッピングを素早く取り去るとぱくりとカップケーキにかぶりつき、あっという間に食べつくしてしまった。

氷室は、そこでやっと我に返ったようだ。

「おま・・・っ」

「ごちそうさま。おいしかった、井上さん。お菓子作るの上手いんだね」

言葉を失う氷室を無視して、鈴木さんが私に向かって笑いかけた。きた。

ぶっ。咄嗟に笑いを堪えて頬をびくびくさせながら、私は言った。

「おそまつさま、ありがとー！」

「あら。ほんとだ。おいしーい！」

「これ、キャラメルの味もする。今度レシピ教えてくれない？」
「すかさず、鈴木さんの両脇に座るいつもの二人が会話に乗ってくる。」

氷室は目の前で自分を無視されて続く会話に呆然としていた。

そんな氷室に向かって鈴木さんがにつこりと笑う。鈴木さんらしい、ちよつと強気な、生き生きとした笑顔だった。

「自分で食べるという選択肢もあったわね。残念でした」

「なんだかすがすがしい表情を浮かべる鈴木さんを見て、氷室の顔が歪んだ。」

ふつと顔を逸らし、負け犬の遠吠えのような言葉を吐き捨てるように言う。

「・・・お前、ほんとに俺のこと好きなのかよっ」

「腹が立つけど好きに決まってる」

「――」

まるでその言葉を言われることを予想していたかのようにあつさりとすぐに、鈴木さんが答えた。

多分氷室的には顔を真っ赤にする鈴木さんを想像していたんだと

思う。

まさかそんなストレートに返されると思わなかったみたいで、ぎよっと目を丸くした。

釣り上がり気味の瞳がそんな、ぱくぱくと口を開閉する氷室をまっすぐ見上げて続ける。

「こんなことくらいで嫌いになるようなら、最初から好きになつたりしないって言ったでしょ。」

B型直情型女を舐めないでくれる？この捻くれ王子」

あ。もう駄目。

「あははははははっ」

私は大声で笑い声をあげてしまった。見ると、凜も他の二人も笑っている。

自分で話を振っておきながら、公然と告白を受けた氷室は、恥ずかしさで顔が真っ赤だった。

そんな氷室に向かって私は言った。

「残念。氷室の負け、だね」

どういうつもりかわからないけど、鈴木さんに向かって仕掛けた氷室の喧嘩？は鈴木さんの一本勝ちだった、どう見ても。

ていうか氷室の子供っぽさ加減に笑えてくる。

「……………」

氷室がぷいと顔を背け、不機嫌そうな様子を隠そうともしないで去っていくのを私達は笑みの含む視線で見送った。

「で、と」

ぐりん、と私達の視線の矛先が今度は氷室から鈴木さんへと移った。ぎくり、と鈴木さんの方が揺れる。

「鈴木さん、私達に何か報告することはない？」

話しやすいように、まずは軽く水を向けてみる。うう、口元がうずうずする。すいと鈴木さんが視線を逸らした。

「別に何も？」

「体育祭のとき、もしくは後。何があったの？」

「………」

分りやすく、鈴木さんの少し日に焼けた健康そうな頬に朱が走った。釣りあがり気味の目がちよつと潤む。

わーなにこの、かわいい反応！絶対何かあった。それまで鈴木さんを追い払おうとしていた氷室が、苛めてやろうと心境の変化を起こす何かが。

「——トイレ行ってくる！」

私達から不穏な雰囲気を感じ取って、鈴木さんが突然立ち上がった。

「付いていこうか？」

「いい！一人でいける！」

と言つてさっきの氷室と同じでフェードアウト。逃げちゃった。

まあ追求が後になつただけなんだけどね？

でも、よかった。これで、あの二人のぎすぎすした雰囲気はなくなつたんじゃない？

そんなことを考えて安心し、他の皆と昼休みのひと時の続きを満喫している私の目に、開け放った教室の扉から、見慣れた姿が教室の前を横切つて行くのが見えた。

いつもながら姿勢のいい、がっしりとした背中にはつとなる。高橋君だった。

咄嗟に私は鞆の中に手をつっこむ。かざりと、他の皆の分と分けていたカップケーキの入った紙袋が音を立てた。

どうしよう、授業が終つたら高橋君部活があるだろうし、渡すなら今しかない気がする。

隣のクラスに行つて高橋君を呼び出して渡す、というのは私にとつてはハードルが高く、今日一日チャンスを伺っていた私はここぞとばかりに立ち上がった。

「愛那？」

「・・・トイレ行ってくる！」

不思議そうな皆に鈴木さんと同じ言い訳して。

私は、高橋君を追いかけて紙袋を手に教室を飛び出したのだった。

乙女、振り回される 2

「・・・・・・・・」

高橋君を追いかけて、右の手首にカップケーキの入った紙袋をひっかけたまま廊下を飛び出した私は、その姿を階段近くの理科準備室前で見つけた。

ただし、一人じゃなかった。

オンナノコと一緒にだった。はにかむように俯いて、ぼそぼそ何かを話してる。高橋君と言えば、いつもどおり眉間に皺が寄った、気難しそうな表情で立っている。

ぴたりと私の足が止まった。う、近寄れない。

何だか二人の世界が出来上がって、入って行けない雰囲気だった。しまった、後でやり直そう。そう思って、踵を返そうとしたとき、ばちりと目を上げた高橋君と視線が合う。

「井上」

ふ、と高橋君が瞳を柔らかく緩めるのを見て固まってしまう。

うつ、そんな顔されたら気づかなかったふりなんてできないよ。仕方なく、半笑いで近づいていく。

女の子は、体育祭のときに高橋君と二人三脚の種目でパートナーだった子だった。あの時に怪我したものだろう、右の踝には軽く包帯が巻いてある。

当たり前だけど、突然現れた私に女の子はびっくりしたみたいで、あわあわし出した。私と高橋君を交互にみやって、焦ったように口を開く。

「あつ、じゃあ、私もう行くね！ほんとにありがとう、高橋君！」
「・・・・ああ。気をつけてな」

高橋君が軽く頷いた。

頬を染めて、怪我した足を庇いながら、ここから去っていくその子は私から見ても可愛らしい雰囲気の女の子だった。ぴよこぴよこ歩くその姿は小動物を連想させる。

「・・・良かったの？」

どう考えても後からやってきた私が邪魔者だよね・・・。

後ろめたくって高橋君を見上げると、ああ、というあつさりとした返事がかえってくる。

「体育祭の時の礼を言われていただけだ。　気にしないでいい、と答えまし、話は終ってたから問題ない」

いや、ちよつと素っ気なさすぎじゃないでしょうか。普通はもうちよつとそこから話が弾んでもいいような。クラスメイトなんだし、そう考えたけど、私は初めのころの高橋君の姿を思い出して、しかたないかと苦笑を零した。そうだった、そう言えば初めは私も、高橋君のことわざわざ追いかけて話しかけていたっけ。

それにしても。

「ええと、あの人、怪我は大丈夫だったの？」

「ああ。幸い、軽い捻挫だけで済んだそうだ。二人三脚で走ってる途中、着地したところに不幸にも石が落ちていて、それで足を捻ったらしい」

「そつか・・・それにしても、どうしてお姫様抱っこだったの？」
ぼろっと思わず一番気になっていたことを訊いていた。

体育祭のあの日、私はまだ高橋君のことが好きだとは気づいてなかったけど、すっかり落ち込んだ。

だってほら、医務室に連れていくだけなら、別にそんな派手なことしなくたっていいわけで。他の選択肢だってあったはずなのに、なんでお姫様抱っこだったのか。

もしかして、高橋君があの子のこと好きなんじゃないのかとか、そういう風に勘ぐってしまう。

好きな人が自分の知らない女の子を抱き上げて、優しくしていたら誰だって気になるよね？

それにかわいい子だったし。

けど、私の言葉に高橋君は眉を寄せた。

「・・・お姫様抱っこ？」

「えっと、あー・・・あの、あの時なんで横抱きで運んで行ったのかなあって・・・」

どきどきしながら、ちらりと様子を伺うと、高橋君はああと頷いてさらっと言った。

「余程足が痛かったらしい、保健室までおぶって行こうかと訊いても、肩を貸そうかと訊いても首を振るから、ああやって連れて行く方が早いし余計に足を痛めないかと思った」

「・・・」

私は沈黙した。

あの時のことを思い出すに、きつとあの女の子は、自分が転んだことも怪我をして注目されることも恥ずかしくって、何も考えずにただただ高橋君の言葉に全て首を振っていたんじゃないかな。

ところがまさかのお姫様抱っこ。余計恥ずかしかっただろうけど、そこはほら、なんていうかある意味乙女の夢だもん、反面むちゃくちゃどきどきしたと思う。少なくとも私ならそうなる。

それに、高橋君の性格を考えるにその後もきつとあの女の子をぶっさらばうながらも優しく扱ったに違いない。

怖いと思っていた相手からそんな風に丁寧に扱われて、ときめかない女子なんているだろうか。しかもよく見ると相手は割りと男前だったりするし。

むむむっと眉が寄った。面白くない、全然面白くない。先ほど頬を染めた女の子の姿を思い出すと胸の中がもやもやとした。

ああやだな、こんな風に思うの。心がせまい。高橋君が怖そうな外見とは裏腹に、実は優しいの知ってるくせに。

自分にだけ優しいわけじゃ、ないんだから。と自分の気持ちを宥めようと、色々言い聞かせるけど胸のもやもやは晴れない。

高橋君のことを好きだと認めてから、私の心は加速気味に色んな

感情を生み出して忙しかった。

嬉しいときは全てが愛おしくなってハッピーな気分になるし、悲しいときは胸の中がぎゅうっとして地にめり込むくらい落ち込んでしまう。

そして今現在は絶賛焼きもち もやもや中、だった。

「・・・どうした？」

高橋君が怪訝そうに、眉を寄せる私を見下ろし、ふ、と手を伸ばしてきた。

身構える暇もなく、その人差し指が私の眉間を指す。

「皺が寄ってるぞ」

とか言いながらぐりぐりとその皺を伸ばそうとするかのように押してくる。

高橋君の手は大きいから、それだけで私の頭を覆って視界を遮ってしまったけど、そのことにどきどきする暇はなかった。だ、だってだって、

「い、いたいいたいっ」

「お、とれた」

悲鳴を上げて高橋君の人差し指を両手で止めると、楽しそうな声が頭上から降ってくる。

って嬉しそうなのはどうしてよ！

「怖い顔になってたぞ？」

涙目で思わず睨みつけると、唇の端を引き上げて高橋君が言った。どうやらいつも自分が言われていることの仕返しのつもりみたい。

子供っぽいその言動に微笑ましいと感じつつ、同じくらいむっとしてしまった。

「高橋君だっていつも寄ってるじゃないっ」

高橋君の人差し指を掴んだまま、反撃とばかりに逆の手の人差し指で高橋君の眉間めがけて背伸びする。けど、あっさりと手首を掴まれて失敗してしまった。

く、悔しいっ。精一杯怖い顔して睨み付けてみたんだけど、くっ

く、と機嫌の良さそうに笑う高橋君の顔を真近に見て、力が抜けてしまった。

初めてみる悪戯っぽい笑みに、悔しいけど見惚れてしまう。いつもきりつと鋭い、時に威圧感を与える瞳が楽しげに煌いていて、そんな子供っぽい表情も出来るんだ、と新たな発見にまたときめいてしまった。

ず、ずるい……！これが惚れた弱みと言うものの……！すっかり戦意喪失して、ときどきする心臓に落ち着けー！と指令を送っていると、呆れた声が後ろから掛けられた。

「何やってるんだ、おまえら」

振り返ると、さっきどこかへ去ったはずの氷室が、理科準備室の前にある階段を登ってくるところだった。声と同じく呆れた表情で、私達のところまでやってくる。

「え、ええつと」

「なにこんなところでいちやいちやしてるんだよ」

「い、いちやいちや?!」

思わず声が上ずった。というか言われて気づいた、今の姿に。

私はまだ高橋君の指を掴んだまだだったし、高橋君の手も私の手を捉えたままだった。

頬が一気に熱くなり、慌ててぱつと高橋君から距離を取る。高橋君の眉間にはまたまた新しい皺が寄っていた。

「お前らって付き合ってたっけ？」

不審そうにこちらへ近寄ってきた氷室に見下ろされて、ぶんぶんと思い切り首を振る。心臓に悪い話をふるな！

「違うわよっ。こ、これはちょっと高橋君に渡すものがあつたからっ」

ほんとはいっ渡そうかと今日一日中タイミングを見計らっていたんだけど、恥ずかしいからさもついでに持ってきた風を装って言い訳する。

私の言葉に高橋君が問うような眼差しを向けてきたから、中身が何か敢えて言わず、紙袋を高橋君に差し出した。

「えっとこれ、はい」

「………」

受け取った紙袋の中身を見て高橋君の瞳が少し和んだ。けどこで思わぬことに、氷室がひょいっと首を伸ばして紙袋の中を覗き込んだ。って普通そゆことする?!

「あれえ?これってさっきのカップケーキじゃん。」

絶句する私を他所に、意外そうな表情で氷室が言った。うわあ、ぎくりと私の肩が強張る。

「ていうか井上、さっきもう無いって言ってなかったっけ?わざわざ高橋に残してたのか」

氷室の形のいい眉が寄って、探るように私を見下ろしてくる。

うわ、なんか恥ずかしい。どっと汗が噴出してくる。ちらりと高橋君に視線を向けると、目が合ってどきりとした。

「……へー」

そんな私たちの姿を見て、氷室が一瞬だけ真顔になった気がした。でもそれはすぐに消えて、変わりににやっと楽しげな笑みを口元に浮かべる。

「なるほどー、そういうことね」

とか頷きながら、馴れ馴れしく高橋君の肩に手を回す。高橋君の眉がきゅっと寄った。

「高橋ー、それ、俺にちょうだい? おまえ、甘いもの食べる顔してないだろ。俺が食べてやるよ」

「……断る」

ものすごく失礼なことを言いながら、氷室が高橋君に詰め寄っていく。

「え、何もしかして食べるの?! そんなどう見ても辛いもの好きな顔してて実は甘いもの好き?!」

「………」

「え、うそマジ?!」

けたけたと氷室が笑った。うわー高橋君むっちゃ不機嫌になっちゃったよ。

その広い背中を氷室がしばし叩く。

「あんたって割りと意外性あるよな」

「・・・ほっとけ」

「いやいやなんかかわいいデスよ?」

からかうような氷室の言葉に、高橋君はあきらめたように息を吐く。

くつく、と喉の奥で笑った後で、氷室は今度は私を見た。なぜだかその視線にぎくつとなる。

「というわけで今度俺になんか作ってきて」

「なにがというわけなのかちつとも意味がわからない」

「冷てー」

氷室は一瞬ちらつと高橋君の方へその眼差しを向けるとにやりと口元を緩めた。高橋君の眉間に怪訝そうな皺がよる。

それから楽しそうに近寄ってくる、氷室のその何かを企む犬つころスマイルに嫌な予感がして私は後ずさった。

「だってそれって体育祭のことで鈴木に作ってきたんだろ?なら俺だって食べる権利あるはずだよな?」

「いや、だからそれ意味がわからないから。」

そもそも権利ってなによ。というつつこみは喉の奥に引っ込んだ。氷室がひょいっと身をかがめながら、私の頭をぽんぽんと叩いてきたから。

「俺、井上の作るお菓子好きなんだよ、いいだろ?」

「・・・!!」

ちよ、近い!赤くなつて、思わず私は飛びずさった。胡散臭げな見た目だけは可愛い笑みを浮かべる氷室を睨む。

「嫌だ!なんでわざわざあんたに作って来ないといけないの」

「まあまあ、そう言うなつて」

「ちよつ、髪の毛わしゃわしゃしないでよつ」

「・・・おい」

低い声が氷室の背後からした気がしたけど、また髪の毛をぐちゃぐちゃにされた私は怒りで耳を素通りしていった。

氷室が笑いながら、首を傾ける。なんていうか、顔だけ見たら爽やかな笑顔だけど、どうにもさつきから胡散臭い。

「だってさつき俺食えなかったし」

「なんであんたの分がある前提なわけよつ」

「えーだって前はくれてたじゃん」

「——おい」

「余つてたのよそれは！・・・ってちよつと近い近いちかいからつ」
氷室がからかうように顔を覗き込んできて、なんだかもう色々頭がいっぱいになってきた私は何も考えずに叫んだ。

「ばかばかそもそも逆なのよつ、高橋君に渡すために持ってきたからあんたの分はなかったのよ！」

「え」

「・・・え」

「あ」

ぴたつと時が止まった。

しまった。思わず口が滑った。

慌てて高橋君の姿を探すと、いつの間にか氷室の肩に手を乗せる距離まで近寄って来ていた高橋君が、驚いた表情で私を見ていた。

「ほ、ほら、土曜日、高橋君美味しいって言ってくれたし、また作ってくるって言ってたし、それで、作ってこようかと・・・と、友達にお詫びもしなくちゃだったし！」

慌てて高橋君に向かって言い訳していると、今度は隣の氷室からの呆れたような突っ込みが入った。

「土曜日って、お前ら一昨日も会ってたのかよ・・・
ていうかどこで会ってたんだ・・・高橋には作るのかよ・・・」

つつか突っ込みどころ多すぎだろおい」

ぎゃー氷室居たの忘れてた！というかまた口が滑った！

ダメだ、これ以上いたら余計に要らないことまで話してしまいそうだ。それに、とんでもなく恥ずかしい。

なんかもういっぱいいいっぱいになってしまった私は、逃亡することにした。

「ということで、またね！」

どういうことかは突っ込まない方向で・・・！

けど、横をすり抜けて走り去ろうとした私の手首を、高橋君が掴んだ。

うつ、捕まった・・・！おそろおそろ顔を見上げると、いつものあの落ち着いた瞳に出会ってドキんと胸が弾む。

「・・・喰うの、楽しみにしてる」

言葉を搜すようにしてから、ゆっくりと高橋君がそう言った。

「・・・うんっ」

嬉しくなって、真っ赤になりながらも頷くと、後ろからまた氷室がぼそぼそと言った。

「つつかなんか俺あれじゃね。お邪魔虫」

「ばっ、何言ってるのよっ、ちよっとあんたは黙って——」

思わず氷室に突っかかっていこうとした私の手首が後ろに引つ張られて、阻まれる。

振り返ると、私の手首はまだ高橋君の大きな手に包まれたままだった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

えっとあれ。動けない。

思わず高橋君を見上げると、そこで高橋君ははっと我に返ったよ

うだった。私の手首を離すと、自分でもよくわからないような表情をして、大きな手のひらをしげしげ眺めている。

「――悪い」

「え、わ、と、ううん！」

なんだか胸がむず痒くなって、私も視線を逸らしながら頷いた。なんだこれすつこい照れる・・・！

「・・・あーうん。悪かった。俺はもう行くから、好きなようにしてくれ」

「えっちよつ氷室っ」

そんな私達を呆れたように見やって、氷室は冷やかすようにひらひらと手をふって去って行った。

「・・・これ」

しばらくなんとも言えない沈黙が続いた後で、高橋君が、紙袋を掲げて言った。

「ありがとう」

「・・・うん」

俯きながら、私は頷いた。頬が熱くて、顔をあげることができなかった。

結局、予鈴が鳴るまで、二人でそこに佇んでいたんだけど。

えっと、うん、あの。

こんなことされたら、期待、しちゃうよ？

乙女、振り回される 2（後書き）

お久しぶりです。戻ってきました。

次回は何も起こらなければ10/24（月）更新予定です

ここまで読んでいただいて、ほんとにありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1793r/>

どんぐりさんの恋

2011年10月21日02時00分発行